財団法人八尾市文化財調査研究会報告54

Ⅰ　小阪合遺跡（第30次調査）
Ⅱ　竹渕遺跡（第4次調査）
Ⅲ　竹渕遺跡（第5次調査）
Ⅳ　東郷遺跡（第49次調査）
Ⅴ　東郷遺跡（第51次調査）
Ⅵ　中田遺跡（第31次調査）
Ⅶ　八尾南遺跡（第22次調査）
Ⅷ　八尾南遺跡（第24次調査）

1996年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

財団法人八尾市文化財調査研究会報告54

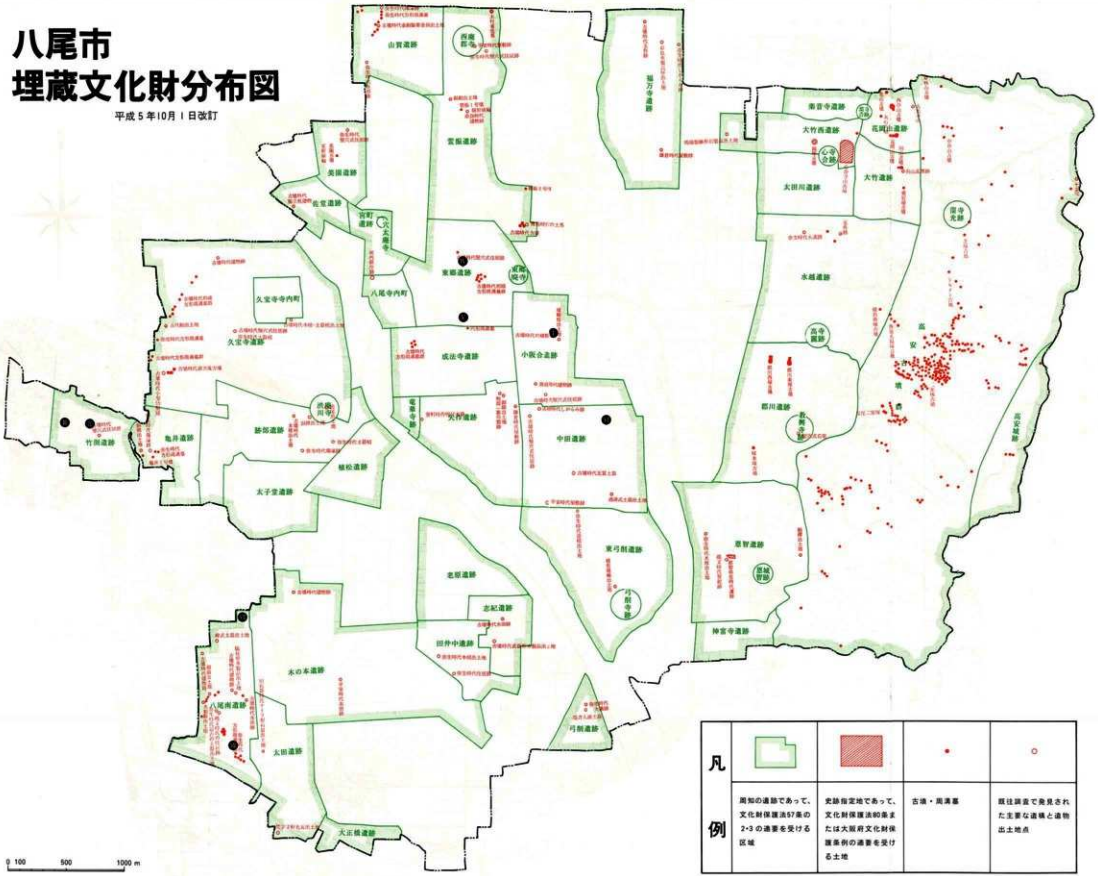
Ⅰ　小阪合遺跡（第30次調査）
Ⅱ　竹渕遺跡（第４次調査）
Ⅲ　竹渕遺跡（第５次調査）
Ⅳ　東郷遺跡（第49次調査）
Ⅴ　東郷遺跡（第51次調査）
Ⅵ　中田遺跡（第31次調査）
Ⅶ　八尾南遺跡（第22次調査）
Ⅷ　八尾南遺跡（第24次調査）

１９９６年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成５年10月１日改訂



はしがき

八尾市は東に生駒山地、西に上町台地、南に羽曳野丘陵に囲まれた河内平野の中に位置しています。

平野部は、淀川や旧大和川および生駒山地の西麓から西へ流れる中小の河川によって運ばれてきた土砂の堆積作用によって形成されています。堆積した土砂は水田や畑に適した土壌であります。この肥沃な土壌がひろがっている平野には古来より人々が生活していた遺跡が多く存在しています。また、生駒山地の西麓にも古来より人々が生活していた遺跡が多く存在しています。

現在、その遺跡のほとんどは河川等の堆積作用や近年の土地区画等の整地によって地中深くに残っています。近年、平野部では住宅建設や工場建設等の大規模な開発が多く行なわれるようになり、地中深く眠っていた遺跡が破壊されることが頻繁に起きてきました。そこで、これらの文化財を開発による破壊から守り、先人が残した文化遺産を後世に永く伝承させることが我々の責務と認識し、文化財の保護・保存の徹底をはかってきたところであります。

本書は、平成7年度に実施しました小阪合遺跡（第30次調査）、竹渕遺跡（第4・5次調査）、東郷遺跡（第49・51次調査）、中田遺跡（第31次調査）、八尾南遺跡（第22・24次調査）の5遺跡発掘調査を記したものであります。

本書が、今後の学術研究及び本市の地域史の一資料として広く活用され、その一助となれば幸いです。

末筆となりましたが、調査におきましてご協力いただきました関係各位の皆様方に深くお礼申し上げますとともに、今後ともより一層のご理解、ご支援を賜りますようお願いいたします。

1996年9月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　木　山　丈　司

序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成７年度に実施した発掘調査成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成業務は各現場終了後に着手し、平成８年９月をもって終了した。

1．本書に収録した報告は、下記のとおりである。

1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市市役所発行の2.500分の1（昭和61年8月）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成5年10月1日改訂）をもとに作成した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。

1．本書で用いた方位は磁北及び国土座標の座標北を示している。

1．遺構は下記の略号で表した。

竪穴住居－ＳＩ　溝－ＳＤ　井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　小穴－ＳＰ　自然河川－ＮＲ

掘立柱建物－ＳＢ　落ち込み－ＳＯ　土器棺墓－土器棺　土器集積－ＳＷ

1．遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した。

弥生土器・土師器・瓦器・埴輪・石製－白、須恵器－黒、木製品－斜線。

1．各調査に際して、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

目　　次

はしがき

序

八尾市埋蔵文化財分布図

Ⅰ　小阪合遺跡　第30次調査（ＫＳ95－30）…… 1

Ⅱ　竹渕遺跡　第４次調査（ＴＫ95－4）…… 15

Ⅲ　竹渕遺跡　第５次調査（ＴＫ95－5）…… 25

Ⅳ　東郷遺跡　第49次調査（ＴＧ95－49）…… 43

Ⅴ　東郷遺跡　第51次調査（ＴＧ95－51）…… 57

Ⅵ　中田遺跡　第31次調査（ＮＴ95－31）…… 71

Ⅶ　八尾南遺跡　第22次調査（ＹＳ95－22）…… 87

Ⅷ　八尾南遺跡　第24次調査（ＹＳ95－24）……105

報告書抄録

Ⅰ　小阪合遺跡第30次調査（ＫＳ95－30）

例　言

1．本書は、大阪府八尾市南小阪合町１丁目21番地で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する小阪合遺跡第30次調査（ＫＳ95－30）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋458－４号　平成７年12月20日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が阪奈住宅株式会社から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年１月８日から１月22日（実働９日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は104㎡を測る。調査においては岸田靖子・中西明美・西田真紀・西村和子が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成８年９月30日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－沢村妙子　図面トレース－北原清子。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……1

2．調査概要……2

　1）調査の方法と経過……2

　2）基本層序……3

　3）検出遺構と出土遺物……5

　4）出土遺物観察表……9

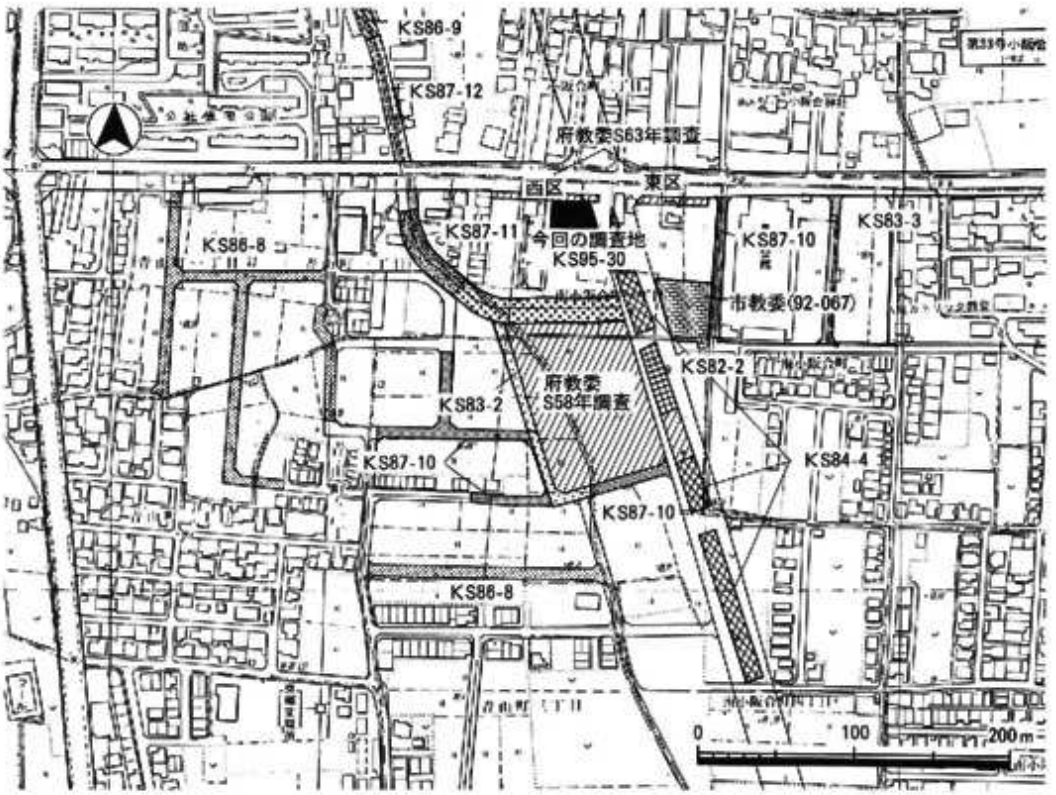
3．まとめ……10

Ⅰ　小阪合遺跡第30次調査（ＫＳ95－30）

1．はじめに

小阪合遺跡は八尾市のほぼ中央部の小阪合町１・２丁目、南小阪合町１・２・４丁目、青山町１～５丁目、若草町、山本町南７・８丁目一帯の東西0.45～１.0km、南北１.0kmに広がる弥生時代中期～近世に至る複合遺跡である。地理的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれて、八尾市二俣地区を基点として南北方向に展開する低位沖積地の標高８～９ｍ付近に位置している。小阪合遺跡の成立を見たこの低位沖積地は、水稲耕作を生活基盤とする弥生時代前期以降、比較的安定した地形的条件を背景として数多くの遺跡が成立しており、考古学的な資料の蓄積も多い。当遺跡周辺に限っても、北西に東郷遺跡、西に成法寺遺跡、南西に矢作遺跡、南に中田遺跡が隣接している。

小阪合遺跡は昭和30年に若草町で行なわれた、大阪府営住宅供給公社の建築工事に際して、古墳時代の土器が多量に出土したことに端緒を発するもので、昭和57年以降は南小阪合地区を



第１図　調査地周辺図

中心とする区画整理事業に伴う発掘調査が当調査研究会により継続して実施されてきた。その結果、弥生時代中期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。なかでも、古墳時代前期における集落の広範囲な分布や、数多くの地域から搬入された土器群の存在は、当時の地域間交流の一端を知る上で貴重な資料を提供する結果となった。

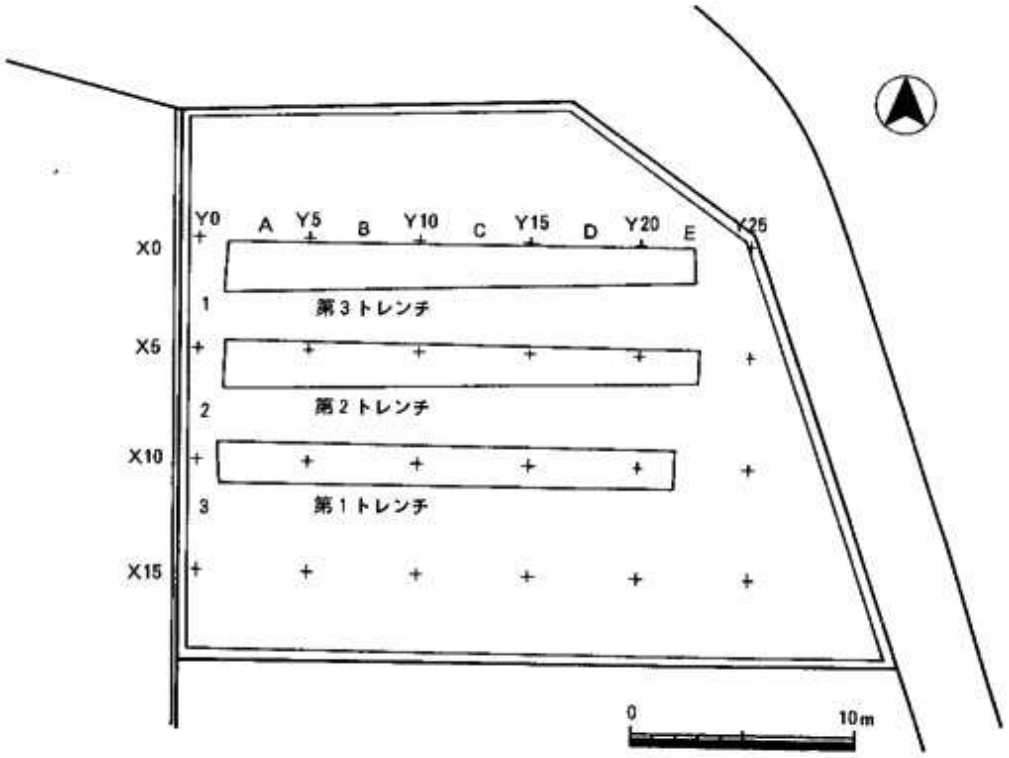
このような情勢下、阪奈住宅株式会社から八尾市南小阪合町１丁目21において、共同住宅の建設を行う旨の届出が市教育委員会文化財課へ提出された。工事が予定された地点は遺跡範囲の北東部にあたり、調査地点に北接する府道服部川久宝寺線では、昭和63年度に拡幅工事に伴う発掘調査が大阪府教育委員会より実施されているほか、東接する地点では、当調査研究会が昭和59年度に区画整理事業に伴う第４次調査（KS84－４）を実施している。これら一連の調査では、古墳時代前期から鎌倉時代に至る集落が検出されており、申請地においても当該期の集落が存在した可能性が高いものと推定された。これらを確認する目的で、平成７年11月21日に八尾市教育委員会文化財課により遺構確認調査が実施された結果、古墳時代中期後半～中世に至る遺構・遺物が検出された。以上の経緯を踏まえ、発掘調査を実施するに至ったもので、八尾市教育委員会・阪奈住宅株式会社・（財）八尾市文化財調査研究会の三者協定に基づき、（財）八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて発掘調査を行うことになった。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は共同住宅建設工事に伴う発掘調査で、基礎杭構築部分に沿って東西方向に伸びる３本のトレンチを設定し、南から第１トレンチ～第３トレンチと呼称した。各トレンチの規模は、第１トレンチ幅1.7ｍ、長さ20ｍ。第２トレンチ幅1.7ｍ、長さ21ｍ。第３トレンチ幅1.7ｍ、長さ21ｍ。調査面積は約104㎡を測る。調査地の地区割りについては、調査地の北西隅のＸ０・Ｙ０地点を基点として東西25ｍ、南北20ｍにわたって設定した。一区画の単位は５ｍ四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｅ）、南北方向は算用数字（北から１～３）で示し、地区の表示は１Ａ区～３Ｅ区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～Ｘ15）・南北線（Ｙ０～Ｙ25）の交点の数値を使用した。調査は第１トレンチ、第３トレンチ、第２トレンチの順で行った。掘削に際しては、現地表下約1.6ｍまでを機械掘削した後、以下0.1～0.2ｍについては人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、現地表下1.7ｍ前後（標高7.6ｍ前後）に存在する第５層上面で、古墳時代後期中葉に比定される溝１条（ＳＤ－１）、平安時代末期～鎌倉時代初頭に比定される土坑１基（ＳＫ－１）、溝11条（ＳＤ－２～ＳＤ－12）、小穴11個（ＳＰ－１～ＳＰ－11）を検出した。ただ、平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構としたものの中には、第４層上面を構築面とするもの



第2図　調査区設定図

があり、時期幅があるものが含まれている。出土遺物は包含層および遺構内からコンテナ1箱程度が出土している。

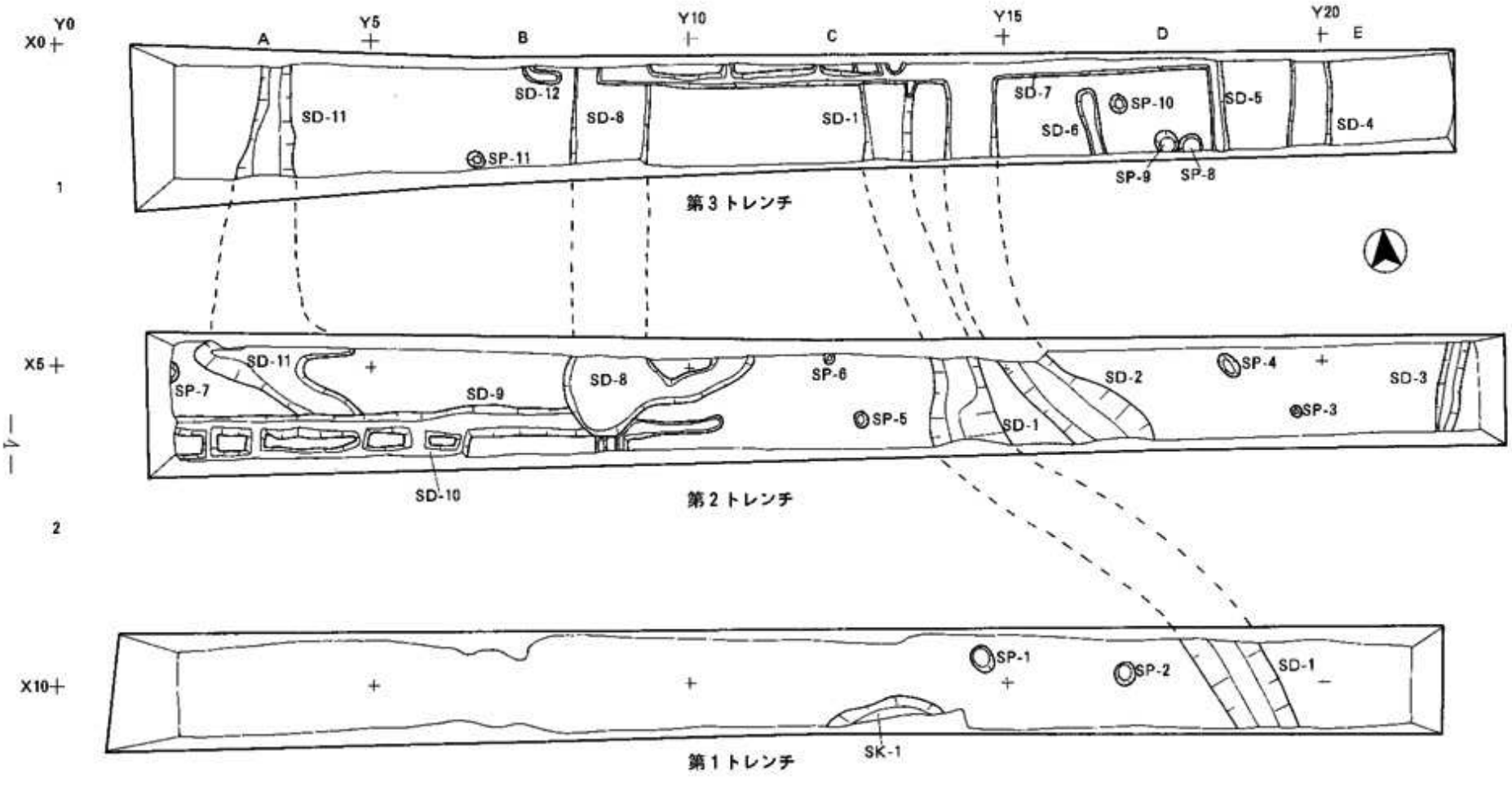
2）基本層序

客土を除けば、第1層の耕土から遺構検出面である第5層上面までが0.5～0.6m程度と浅く、古墳時代後期以降、付近一帯の沖積作用が緩慢であったことを示している。さらに中世以降はおもに耕地としての土地利用が看取されており、農事作業に関わる度重なる掘削のため、遺物包含層が攪拌を受けたためか、出土した土器類も磨耗した小片が大半であった。ここでは、普遍的に存在した5層を摘出して基本層序とした。

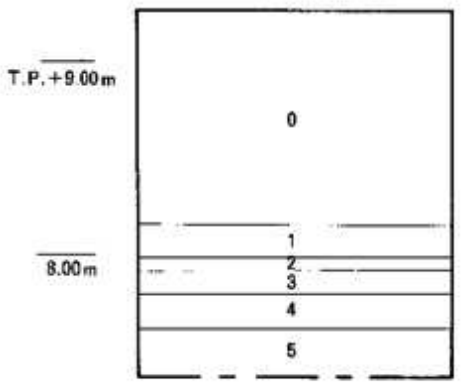
第0層　客土。層厚1.1～1.2m。上面の標高はT.P.＋9.4m前後。

第1層　N6/ 灰色粘質シルト。耕土。層厚0.1～0.2m。

第2層　10BG5/1青灰色粘質シルト。床土。層厚0.1～0.2m。
近世遺物を極少量含む。


Y0
X0
A
Y5
B
Y10
C
Y15
D
Y20
E
SD-11
SD-12
SD-8
SD-1
SD-7
SD-6
SP-10
SD-5
SD-4
SP-11
SP-9
SP-8
第3トレンチ
X5
SD-11
SP-7
SD-9
SD-8
SP-6
SP-5
SD-2
SP-4
SD-3
SP-3
SD-1
SD-10
第2トレンチ
X10
SP-1
SP-2
SD-1
SK-1
第1トレンチ
1
2
3
0
10m

第3図　検出遺構平面図



第3層　10BG6/1緑灰色粗粒砂混砂質シルト。層厚0.1～0.25m。中世～近世の遺物を少量含む。

第4層　2.5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂混砂質シルト。層厚0.1～0.3m。古墳時代中期末～中世の遺物を少量含む。

第5層　10YR6/3にぶい黄橙色砂質シルト。層厚0.2m以上。上面が遺構検出面。

第4図　基本層序模式図（S=1/40）

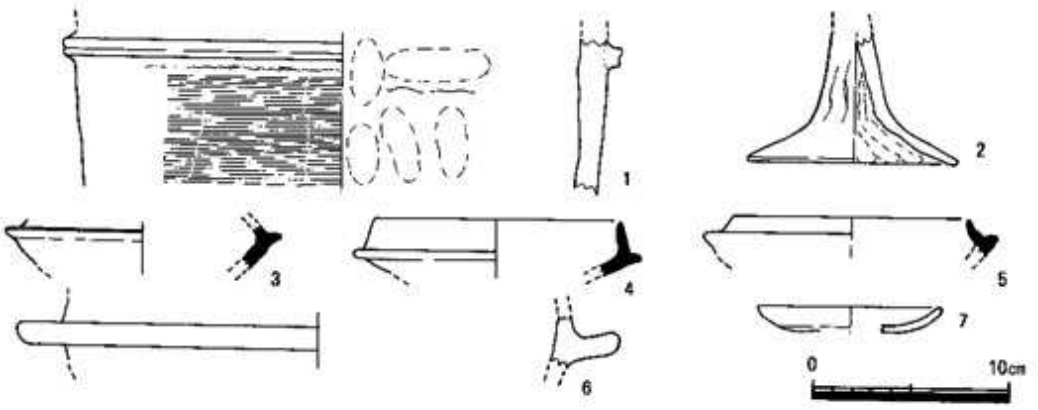
3）検出遺構と出土遺物

・古墳時代後期中葉の遺構

溝（SD）

SD－1

第1トレンチの3D区から第3トレンチの1C区にかけて北西方向に蛇行して伸びるもので、第3トレンチの北端はSD－7に切られている。検出長11.8m、幅0.8～1.2mを測る。深さは第3トレンチで0.15m、第1トレンチで0.4mで南部に行くに従って深くなっている。埋土は第1トレンチでは上層の灰色粗粒砂混砂質土と下層の灰黄褐色粗粒砂混粘質シルトの二層で構成されている。遺物は古墳時代中期後半から後期前半に比定される土師器高杯、須恵器杯身、円筒埴輪等の小片が極少量出土している。図化したものは円筒埴輪片（1）・土師器高杯（2）・須恵器杯身（4）の3点である。（1）は円筒埴輪の小片で胴部復元径27cmを測る。タガは端面が窪む台形で突出度は高い。外面調整はB種ヨコハケ、内面調整は指ナデである。胎土中



第5図　SD－1（1・2・4）、SD－7（5）、SK－1（6・7）、SP－6（3）出土遺物実測図

に石英・長石の小砂粒が多量に含まれている。色調は赤灰色で焼成は良好である。川西宏幸氏編年のⅣ期（５世紀中葉～後葉）に対比されよう。（２）は土師器高杯の脚部である。柱状部に縦方向に走る粘土紐接合痕が見られる。（４）は須恵器杯身の小片で口縁部の1/8程度が遺存している。水平方向に小さく伸びる受部から、立ち上がりが内傾して伸びるもので、口縁端部は丸く終っている。ＴＫ10型式に対比されよう。円筒埴輪（１）を別にすればおおむね、６世紀中葉の帰属時期が推定される。

・平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺構

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

第１トレンチの３Ｃ区で検出した。一部を検出したのみで、南部の大半が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.85ｍ、南北幅0.24ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は２層に分層され、堀方の断面形状に沿って堆積しているが、２層ともに粘質のブロックを含む不均質な土質で構成されている。遺物は土師器小皿・土釜、瓦器椀・甕等の小片が少量出土している。図化したものは土師器小皿（７）と土釜（６）の２点である。（７）は口縁部の1/6程度が遺存している。復元口径9.4cm、器高1.2cmを測る。色調は淡褐灰色で、胎土は精良な粘土が使用されている。（６）は土釜の鍔部分の小片である。鍔はほぼ水平方向に伸びており、端部に外傾する面を持つ。鍔裏面に煤が付着している。2点共に小片であるため不明な点が多いが、概ね平安時代末期から鎌倉時代初頭の所産と推定される。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－２

第２トレンチの２Ｄ区から第３トレンチの１Ｃ区にかけて蛇行して北流する。検出長6.5ｍ、幅0.7～1.0ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は３層から成る。遺物は土師器小皿・土釜等の小片が少量出土しているが、図化し得たものはない。

ＳＤ－３

第２トレンチ東端の２Ｅ区で検出した。本来の構築面は第４層上面である。南北方向に伸びるもので、検出長1.6ｍ、幅0.38ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

ＳＤ－４

第３トレンチの１Ｄ・Ｅ区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長1.3ｍ、幅0.68ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器の小片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

ＳＤ－５

第3トレンチの1D区で検出した。南北方向に伸びるもので、北端でSD－7と合流している。検出長1.28m、幅0.2m、深さ0.1m前後を測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

SD－6

第3トレンチの1D区で検出した。北北西に伸びるもので、北端は調査区内で終息している。検出長1.0m、幅0.24m、深さ0.05mを測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトの単一層である。遺物は瓦器椀の小片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

SD－7

第3トレンチの1B区～1D区の北部を東西方向に伸びるもので、西端でSD－8を切り、屈曲し北に流路を変えているほか、東端はSD－5に合流している。なお、この溝を基点として北に伸びる3条の小溝が存在している。全長9.7m、幅0.2m、深さ0.05～0.1mを測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトである。遺物は土師器・須恵器・瓦器等の小片が極少量出土している。須恵器杯身（5）を図化した。（5）は遺存率が1/10程度の小片である。丸味を持って水平方向に伸びる受部から、立ち上がりが内傾し、口縁端部は丸く終わる。TK209型式（7C初頭）に対比されよう。ただ、扶雑遺物であり帰属時期を示すものではない。

SD－8

第2トレンチの2B区で屈曲して流路を南北方向に変えた後、第3トレンチ1B区にかけて伸びるものである。各遺構との関係では、第2トレンチでSD－9を切り、第3トレンチの北端はSD－7に切られている。検出長は東西方向が1.8m、南北方向が5.8mを測る。幅は0.4～1.2m、深さ0.1mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトとオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトの互層である。遺物は土師器小皿・土釜、瓦器椀等の小片が少量出土しているが、図化し得たものはない。

SD－9

第2トレンチで検出した。2A区から2C区にかけて直線的に伸びるもので、SD－11を切りSD－8に切られる関係にある。検出長8.6m、幅0.2～0.48m、深さ0.12mを測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトである。遺物は土師器小皿・土釜、瓦器椀等の小片が少量出土しているが、図化し得たものはない。

SD－10

第2トレンチで検出した。2A区～2B区にかけてSD－9の南側に並行して伸びるもので、南肩は調査区外に伸びるため幅等は不明である。検出長4.6mを測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトである。遺物は土師器小皿、瓦器椀、屋瓦等の小片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

SD－11

第2トレンチの2A区で屈曲して流路方向を南北方向に変えるもので、北部の第3トレンチの1A区に続いている。検出長5.4m、幅0.4～0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は粘質シルトを主とする2層で構成されている。遺物は土師器土釜、瓦器椀等の小片が少量出土しているが、図化し得たものはない。

SD－12

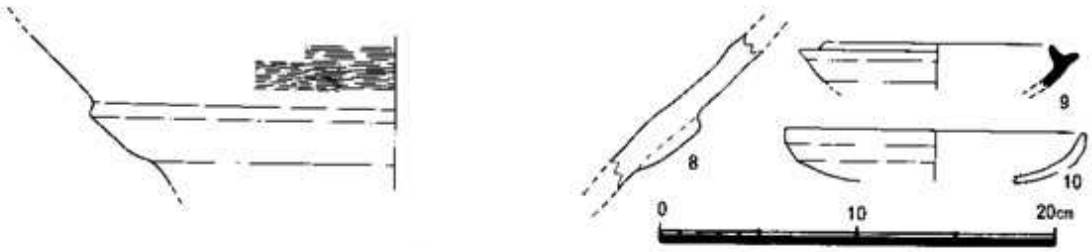
第3トレンチ1B区の北部で検出した。東西方向に約0.6m伸びた後、西端で屈曲し流路を北に変えている。検出長0.56m、幅0.18m、深さ0.02mを測る。埋土はオリーブ灰色粗粒砂混砂質シルトである。遺物は土師器片が1点のみ出土している。

小穴（SP）

小穴は全体で11個（SP－1～SP－11）を検出した。大半が調査区の中央部から東部にかけて分布している。調査区別の内訳は第1トレンチで2個（SP－1・SP－2）、第2トレンチ5個（SP－3～SP－7）、第3トレンチ4個（SP－8～SP－11）である。上面の形状では、SP－4が楕円形を呈する以外は円形を呈している。規模は、径0.16～0.4m、深さ0.04～0.14mを測る。埋土はSP－4が灰色砂質シルトであるが、他は暗灰色砂質シルトである。埋土が暗灰色砂質シルトのものは、掘立柱建物を構成する柱穴の可能性が高いが、限定された範囲のため規則性は見出せなかった。そのうち、遺物の出土が確認されたものは、SP－1・SP－2・SP－6・SP－8・SP－10・SP－11で、土師器・須恵器・瓦器が出土しているが全て小片で量的にも少なかった。図化し得たものは、SP－6から出土した須恵器杯身（3）の1点のみである。

・遺構に伴わない遺物

第3層および第4層から古墳時代中期末～近世に比定される土器類が少量出土している。前述したように中世後半期以降は主に耕地としての土地利用が計られており、度重なる掘削・削平により遺物包含層が攪拌を受けたためか、出土した土器類も磨耗した小片が大半を占めた。図化し得たものは朝顔形埴輪（8）、須恵器杯身（9）、土師器中皿（10）の3点である。（8）は朝顔形埴輪の頸部から口縁部にかけての小片である。タガの幅は約4cmを測り、一般にみられるものに比して幅広である。器面調整は口縁部外面がヨコハケ、内面にはナデが施されている。白灰色の色調で、胎土中に石英・長石の細粒が多量に含まれているほか、チャート粒が散見される。第2トレンチ2C区第4層出土。（9）は須恵器杯身で、口縁部の1/8程度が遺存している。水平方向に伸びる受部から、立ち上がりが内傾して短く伸びる。TK209型式（7世紀初頭）に対比されよう。第3トレンチ1D区第4層出土。（10）は鎌倉時代に比定される土師器の中皿である。全体の1/6程度が遺存している。第3トレンチ1E区第4層出土。



第6図　第4層出土遺物実測図

4）出土遺物観察表

・凡例　粒径－L 1㎜以上　M0.5～1㎜未満　S0.5㎜未満　量－◎多量　○多い　△少ない　▲希少　赤赤－赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( ) 復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 L 茶	長石	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成	残存	備考 地区
						質	石	炭	は			保存	率	
1	三	円筒埴輪	－ － 底径(27.0)	外面：胴部B種ヨコハケ。タガヨコナデ。 内面：胴部ユビナデ。	淡褐灰色 淡橙色	やや粗	◎S－L	◎S－L				良好	胴部小片	SD－1
2	三	土師器高杯	－ － － 脚端(10.7)	外面：脚部ナデ。 内面：脚部ユビナデ。柱状部シボリメ。	赤褐色 〃	精良	▲S					良好	脚部2/3	SD－1
3		須恵器杯身	－ － － 受端(13.9)	外面：底体部回転ナデ。 内面：底体部回転ナデ。	青灰色 〃	精良	▲S					堅緻	1/10	SP－6
4		須恵器杯身	(12.4) － － 受端(14.5)	外面：立ち上がりおよび底体部上半回転ナデ。 内面：立ち上がりおよび底体部上半回転ナデ。	灰灰色 〃	精良						堅緻	口縁部1/8	外面灰かぶり SD－1
5		須恵器杯身	(12.2) － － 受端(15.0)	外面：受部および立ち上がり回転ナデ。 内面：立ち上がり回転ナデ。	青灰色 〃	精良						堅緻	口縁部1/6	SD－7
6		土師器土釜	－ － － 鍔径(30.6)	外面：鍔および体部ヨコナデ。 内面：体部ヨコナデ。	地灰色 赤褐色	やや粗	○M	○M－L				良好	鍔小片	胴裏面煤付着 SK－1
7		土師器小皿	(9.3) 1.3	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：ナデ。	乳灰色 〃	良好	△M				赤△M	良好	口縁部1/4	SK 1
8	三	朝鮮形須恵	－ － －	外面：口縁部ヨコハケ。頸部ヨコナデ。 内面：ナデ。	白灰色 〃	やや粗	◎S－L	◎S－L		▲L		良	口縁部小片	第3トレンチ2C区第4層
9		須恵器杯身	(11.4) － 受端(14.1)	外面：立ち上がり、受部、底体部回転ナデ。 内面：立ち上がりおよび底体部回転ナデ。	淡青灰色 〃	精良	▲S					堅緻	口縁部1/8	第3トレンチ1D区第4層
10		土師器甕	(15.2) (2.6)	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	淡褐灰色 〃	精良						良好	口縁部1/6	第3トレンチ1E区第4層

3．まとめ

今回の調査では、古墳時代後期中葉（６世紀中葉）と平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺構が検出された。

古墳時代後期中葉の遺構については、溝１条（ＳＤ－１）を検出している。調査地に北接する地点で昭和63年度に大阪府教育委員会により、実施された府道拡張工事に伴う発掘調査[註1]（西側調査区）では、ＳＤ－１に続く溝（ＳＤ－18）が確認されており、今回の調査と同様、円筒埴輪片の出土が確認されている。さらに、調査地の南東約40ｍ地点で行なわれた小阪合遺跡第４次調査[註2]（ＫＳ84－４）の第10調査区で埴輪円筒棺（５世紀初頭）が検出されている他、南東約80ｍ地点で八尾市教育委員会により実施された発掘調査[註3]（92－067）でも、円筒埴輪片のほか滑石製小玉が出土している。以上の調査結果を総合すれば、調査地付近一帯は、古墳時代中期～後期初頭にかけて、墓域を中心とする土地利用が行われていたようである。なお、調査地の西約300ｍ地点（青山町１丁Ｈ）で実施された、小阪合遺跡第８次調査[註4]（ＫＳ87－８）および第26次調査[註5]（ＫＳ93－26）では、当該期の居住域が検出されており、当調査地周辺で検出されている墓域と有機的な関係を持つ居住域であった可能性が高い。

平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺構については、土坑・溝・小穴等を検出したのみで不明な点が多いが、八尾市教育委員会が事前に行った遺構確認調査[註6]では、２Ｄ地区付近で井戸遺構が検出されている他、北接する府道拡張工事に伴う調査においても、当該期に比定される遺構群が多数検出されいる。これらの集落は、おそらく、調査地の南部に存在した当時の主要幹線道路である信貴越道や北東約130ｍ地点に鎮座する式内社の阪合神社を中心に展開した集落であったと推定されよう。

註記

註１　山上　弘　1989『小阪合遺跡発掘調査・－八尾市南小阪合町所在－』大阪府教育委員会

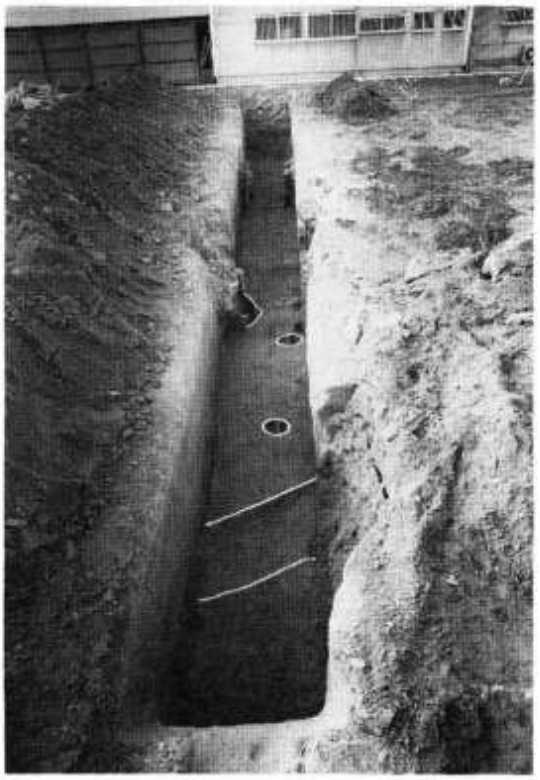
註２　高萩千秋　1988『小阪合遺跡（昭和59年度　第４次調査報告書）』（財）八尾市文化財調査研究会報告15　（財）八尾市文化財調査研究会

註３　滔　　斎　1993　６．小阪合遺跡（92　067）の調査」『八尾市内遺跡平成４年度発掘調査報告書』八尾市文化財報告27　八尾市教育委員会

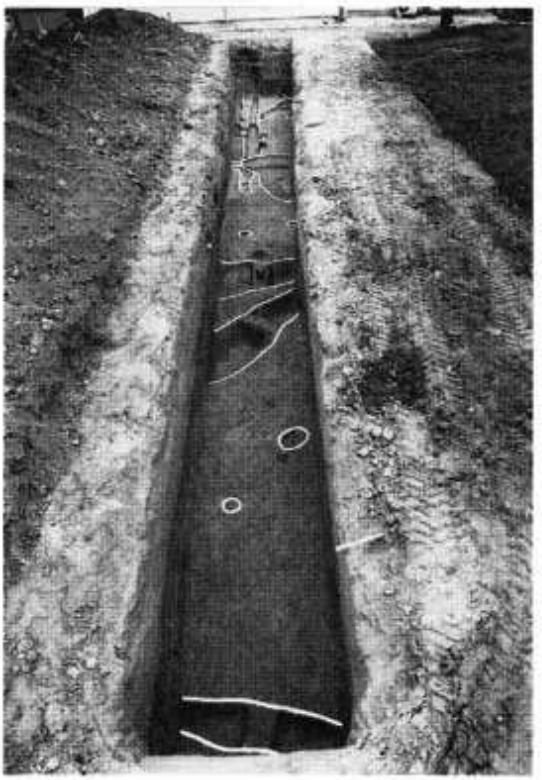
註４　高萩千秋　1990『小阪合遺跡<昭和61年度第８次調査報告書>』（財）八尾市文化財調査研究会報告26　（財）八尾市文化財調査研究会

註５　坪田真一　1994「14．小阪合遺跡第26次調査（ＫＳ93－26）」『平成5年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』　（財）八尾市文化財調査研究会

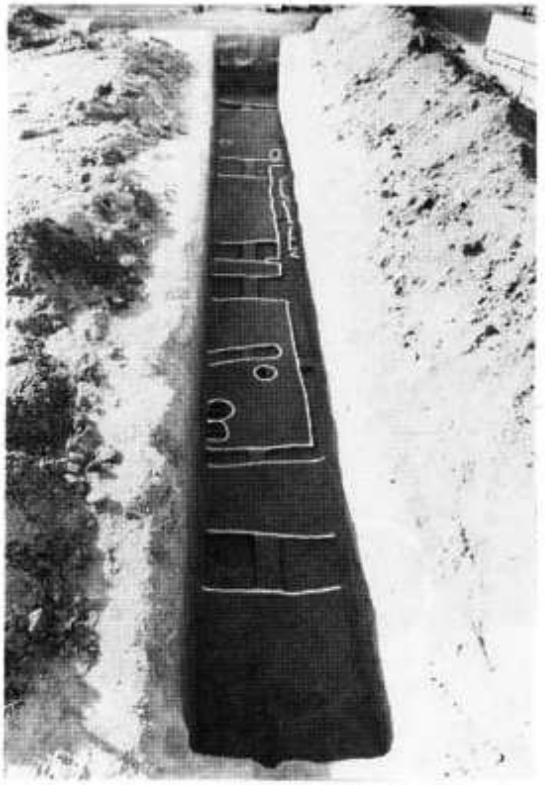
註６　吉田野乃　1996「４．小阪合遺跡（95－458）の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告33　八尾市教育委員会



第1トレンチ検出状況（東から）

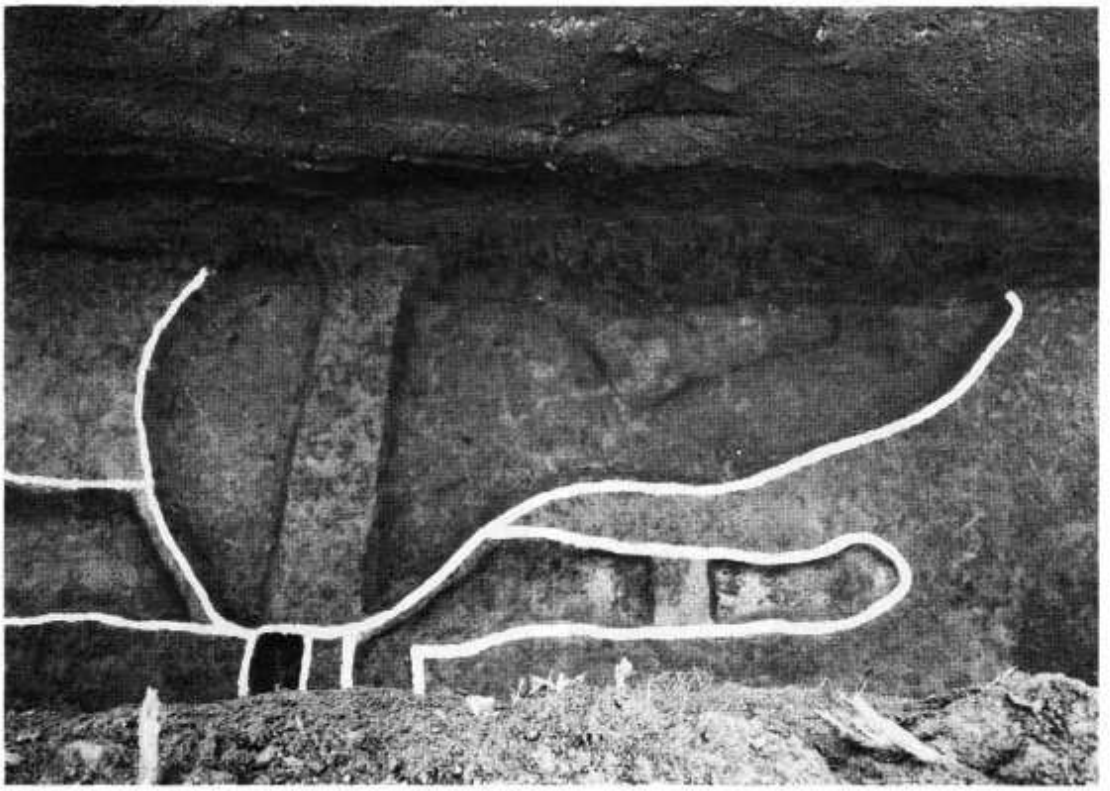


第2トレンチ検出状況（東から）

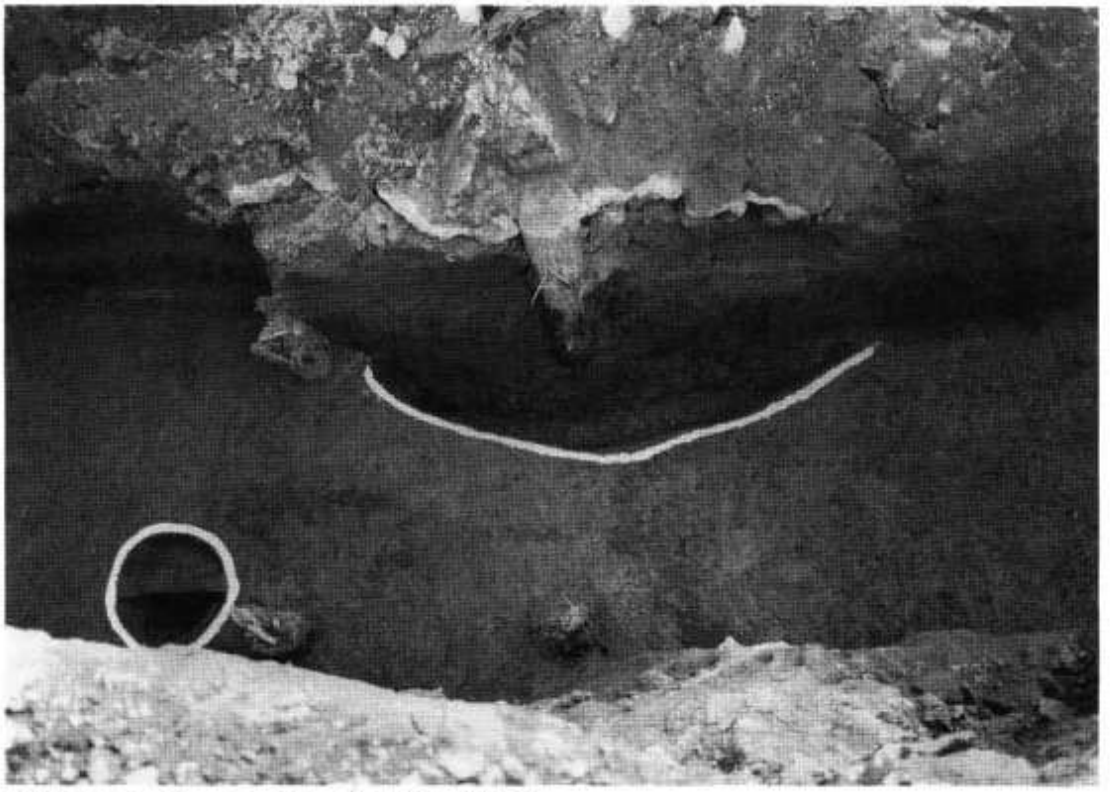


第3トレンチ検出状況（東から）

図版二

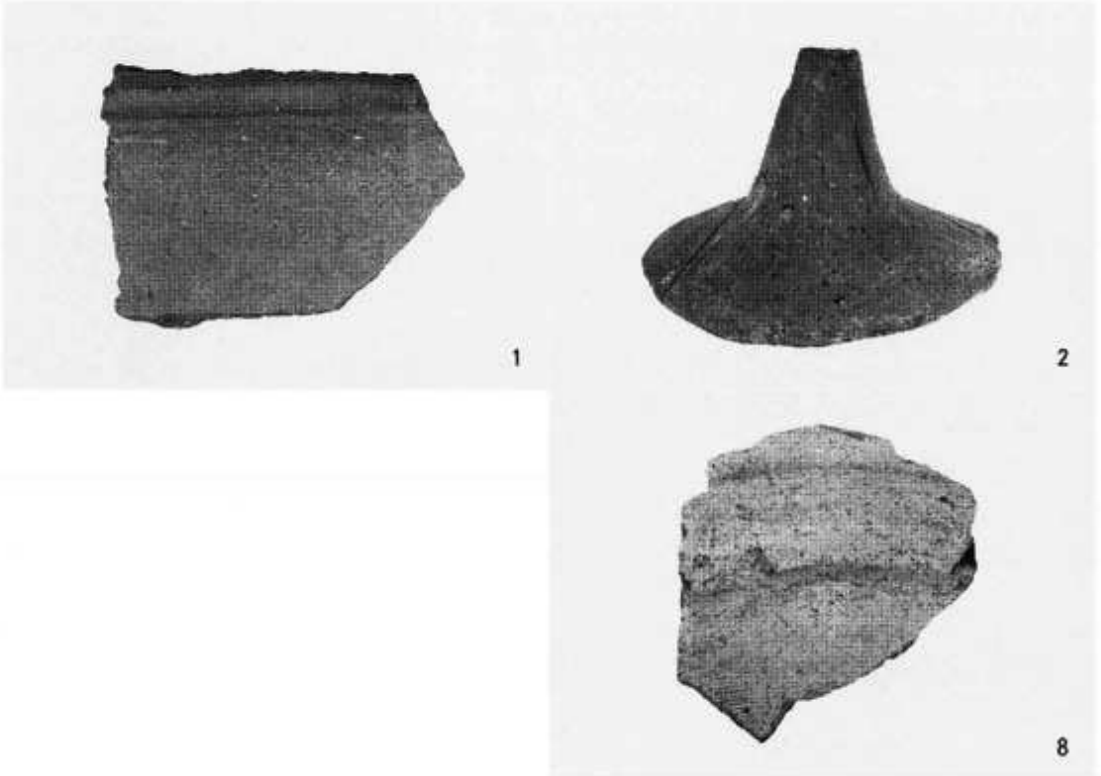


第2トレンチ　SD－8・SD－9検出状況（南から）



第1トレンチ　SK－1・SP－1検出状況（北から）

第3トレンチ　SD－1検出状況（北から）



SD－1（1・2）、第4層（8）出土遺物

Ⅱ　竹渕遺跡第４次調査（ＴＫ95－4）

例　言

1．本書は大阪府八尾市竹渕１丁目223－１,224－１,225－１,226－１で実施した共同住宅工事に伴う発掘調査である。

1．本書で報告する竹渕遺跡第埋４次調査（ＴＫ95－4）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋38－３号　平成７年３月31日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が(株)平野木材住宅から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成７年６月19日から６月30日にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は64㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・赤澤茂美・島野鋼一・中村百合・西岡千恵子・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウトー中村・西岡、トレースー市森が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……15

2．調査概要……16

　1）調査の方法と経過……16

　2）基本層序……17

　3）検出遺構と出土遺物……19

　4）遺構に伴わない出土遺物……19

　5）出土遺物観察表……21

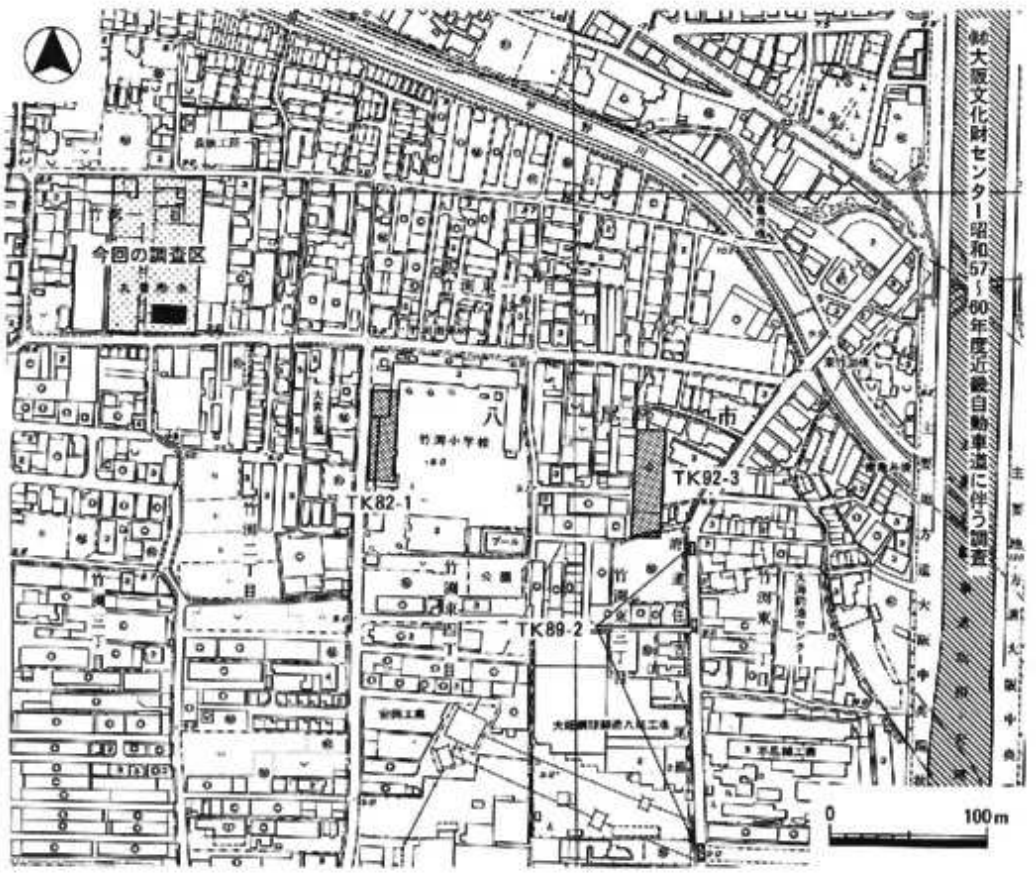
3．まとめ……22

Ⅱ　竹渕遺跡第4次調査（TK95－4）

1．はじめに

竹渕遺跡は八尾市西部の竹渕1～5丁目、竹渕東1～4丁目に広がる弥生時代から平安時代に至る遺跡である。地理的には旧大和川の主流の一つである長瀬川から分岐し、北西方向に流れる平野川の左岸に広がる沖積地上に位置する。当遺跡の周辺には東に平野川を挟んで亀井遺跡・跡部遺跡、南に長原遺跡（大阪市）、北に久宝寺遺跡・加美遺跡（大阪市）が隣接している。

当遺跡の契機は昭和57年度、八尾市教育委員会が市立竹渕小学校校舎増築に先だって行われた遺構確認調査で発見された遺跡である。発掘調査（TK82－1）は当調査研究会が実施し、現地表下（G.L.）1.8mの地層から古墳時代後期に比定される集落遺構（竪穴住居・土坑・溝など）が存在することが判明した。しかし、その後しばらくは発掘調査もなく当遺跡の状況を掴



第1図　調査地位置図及び周辺図

むことができなかったが、平成元年度、当地区で公共下水道工事が行われることになり、それに伴う発掘調査（ＴＫ89－2）が実施された。その結果、現地表下4.5ｍ前後で弥生時代前期の遺構（土器棺）。また、平成４年度、工場建設に伴う発掘調査（ＴＫ92－3）で弥生時代前期の土坑・古墳時代後期の方墳・平安時代中期の土坑などが検出された。これらの調査成果により、竹渕遺跡が弥生時代から近世に至る集落遺跡であることが認識された。

今回の発掘調査は当調査研究会が竹渕遺跡内で実施した第４次調査（ＴＫ95－4）にあたる。以下、今回の調査について記す。

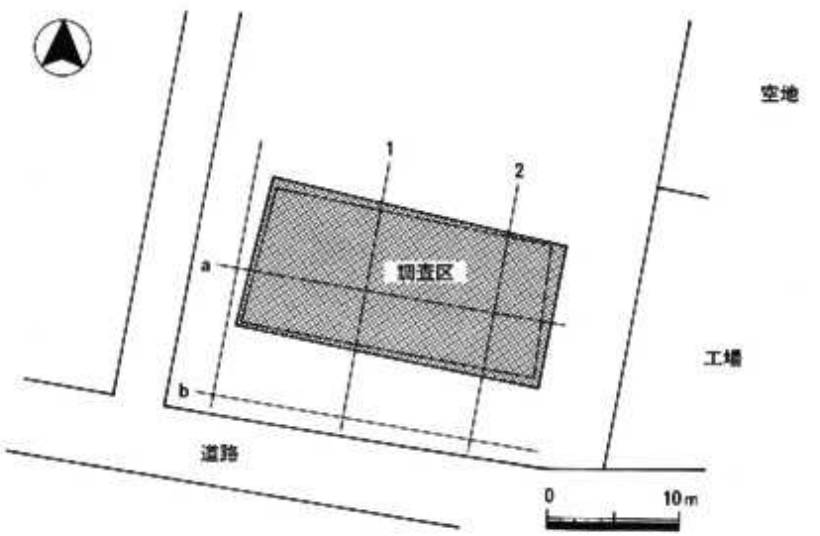
2．調査の概要

1） 調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に先だって実施したものである。当調査地は市教育委員会が事前の遺構確認調査を実施し、調査地の北部は河川の埋没した地層と思われる砂層の堆積。南部では古墳時代前期の遺物包含層が厚く堆積していることが確認された。その結果により、調査地南部で建築される部分を対象とした。調査区は検出した地層が深く、隣接地の建物への影響などを考慮し、建築基礎で破壊される部分に設定した。

掘削は調査指示書に基づき、現地表下 3.2ｍまでを機械掘削し、以下、0.4ｍは人力掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査区の地区割りについては、調査区西部中央に任意の基点を設定した。調査区設定方向に合わせ、調査区の記録保存の作成に使用した。主軸はＮ－10°－Ｅをはかる。



第２図　調査区設定図

2）基本層序

調査区で検出した土層内で普遍的に見られる26層を摘出して基本層序とした。以下、各層について記す。

第1層　盛土。層厚40cm前後。共同住宅建設前は工場跡（丸善撚糸工場）。

第2層　旧耕土。層厚10～20cm。近世以降の耕作土である。既設（工場）の建造物の基礎により削平及び撹乱されている。

第3層　床土。層厚5～10cm。旧耕土と同様、削平及び撹乱を受けている。

第4層　暗灰褐色砂礫混粘質土。層厚20～40cm。平安時代中期から後期の遺物を含んだ土層である。

第5層　淡褐灰色粘質シルト。層厚15～30cm。

第6層　褐灰色粘質シルト。層厚10～20cm。

第7層　淡灰褐色微砂混シルト。層厚20～40cm。

第8層　褐灰色シルト。層厚50～100cm。

第9層　褐灰色粘質シルト。層厚20～25cm。

第10層　明茶灰色粘質シルト。層厚5～50cm。

第11層　淡青灰色シルト。層厚20cm。

第12層　青灰色粘質シルト。層厚20～40cm。

第13層　青灰色粘土混微砂。層厚15～30cm。洪水層。古墳時代後期の遺物が少量含まれる。

第14層　暗灰色粘土混微砂。層厚20cm。

第15層　灰青色微砂混粘土。層厚10～30cm。

第16層　青灰色粘土混粘土。層厚15～30cm。

第17層　青灰色粘土。層厚20～25cm。

第18層　暗灰色粘土。層厚20～30cm。

第19層　暗灰色粘質土。層厚15～20cm。粘着のある粘土で、炭化物が少量含まれている。

第20層　灰黒色粘土。層厚20～60cm。古墳時代前期（布留式古相）の遺物を含む。調査区北東部で盛り上がったような堆積状況である。

第21層　暗灰色シルト混粘土。層厚5～10cm

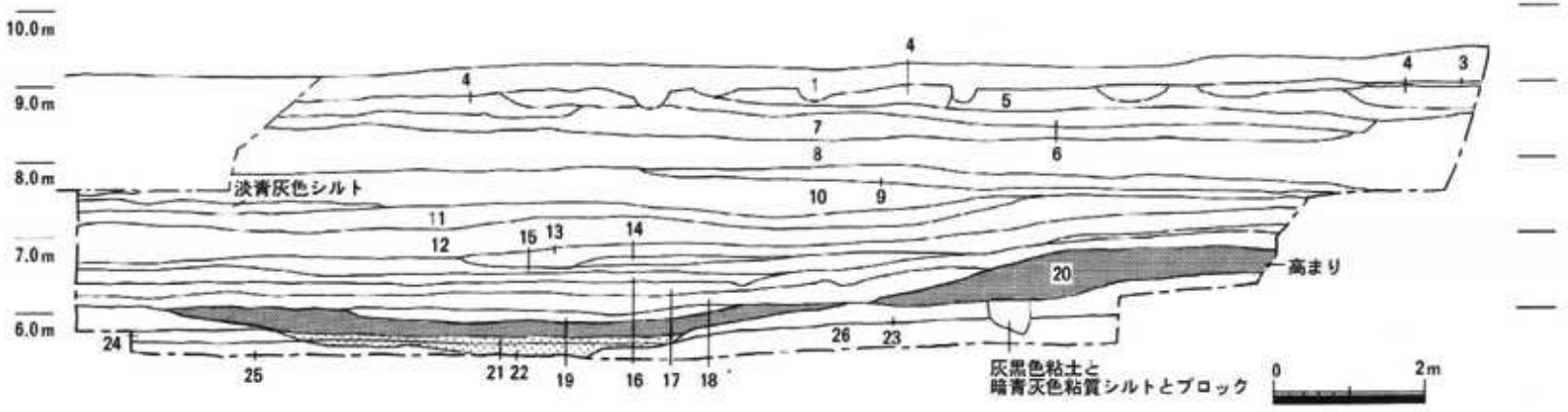
第22層　暗灰青色粘土。層厚20cm。

第23層　暗灰色粘質シルト。層厚20～40cm。

第24層　青灰色粘土。層厚20cm。南西部で堆積する。

第25層　暗青灰色粘土。層厚20cm。白色魂が斑点状にみられる。庄内期の土器を少量含む。

第26層　灰色細砂混微砂。層厚30cm以上。古墳時代前期のベース面で、南西が低い。

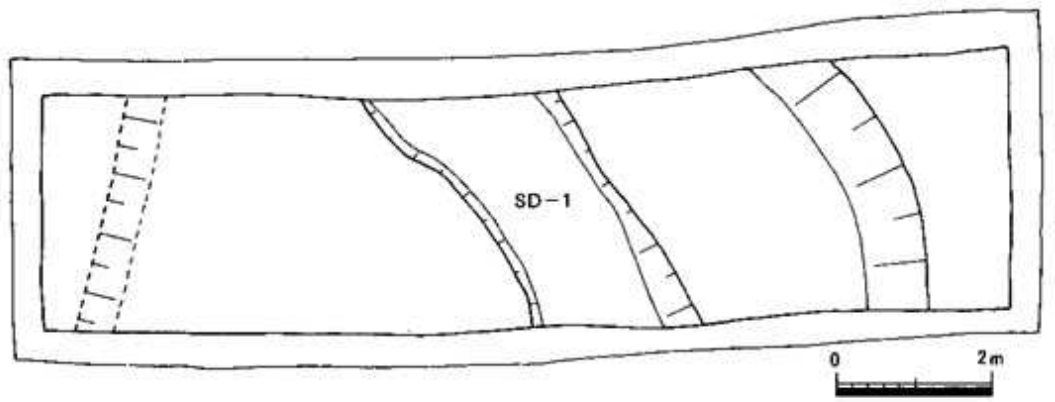


1 盛土
2 旧耕土
3 床土
4 暗灰褐色砂礫混粘質土
5 淡褐灰色粘質シルト
6 褐灰色粘質シルト
7 淡灰褐色微砂混シルト
8 褐灰色シルト
9 褐灰色粘質シルト
10 明茶灰色粘質シルト
11 淡青灰色シルト
12 青灰色粘質シルト
13 青灰色粘土混微砂
14 暗灰色粘土混微砂
15 灰青色微砂混粘土
16 青灰色粘土混粘土
17 青灰色粘土
18 暗灰色粘土
19 暗灰色粘質土
20 灰黒色粘土
21 暗灰色シルト混粘土
22 暗灰青色粘土
23 暗灰色粘質シルト
24 青灰色粘土
25 暗青灰色粘土
26 灰色細砂混微砂

第3図 北壁断面図

3）検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下3.2～3.9m（標高5.4～6.0m）付近に存在する第26層上面で古墳時代前期（庄内期～布留期）の溝状遺構（ＳＤ－１）を検出した。また、北東部の角で第20層の高まり、その下層面切り込む土坑状の窪みが断面で観察された。遺物は第20層～第22層内からコンテナ箱１箱程度が出土している。そのほか、第３層で平安時代の土器片、第13層～第15層の古墳時代後期の土器片が少量出土している。



第４図　調査区平面図

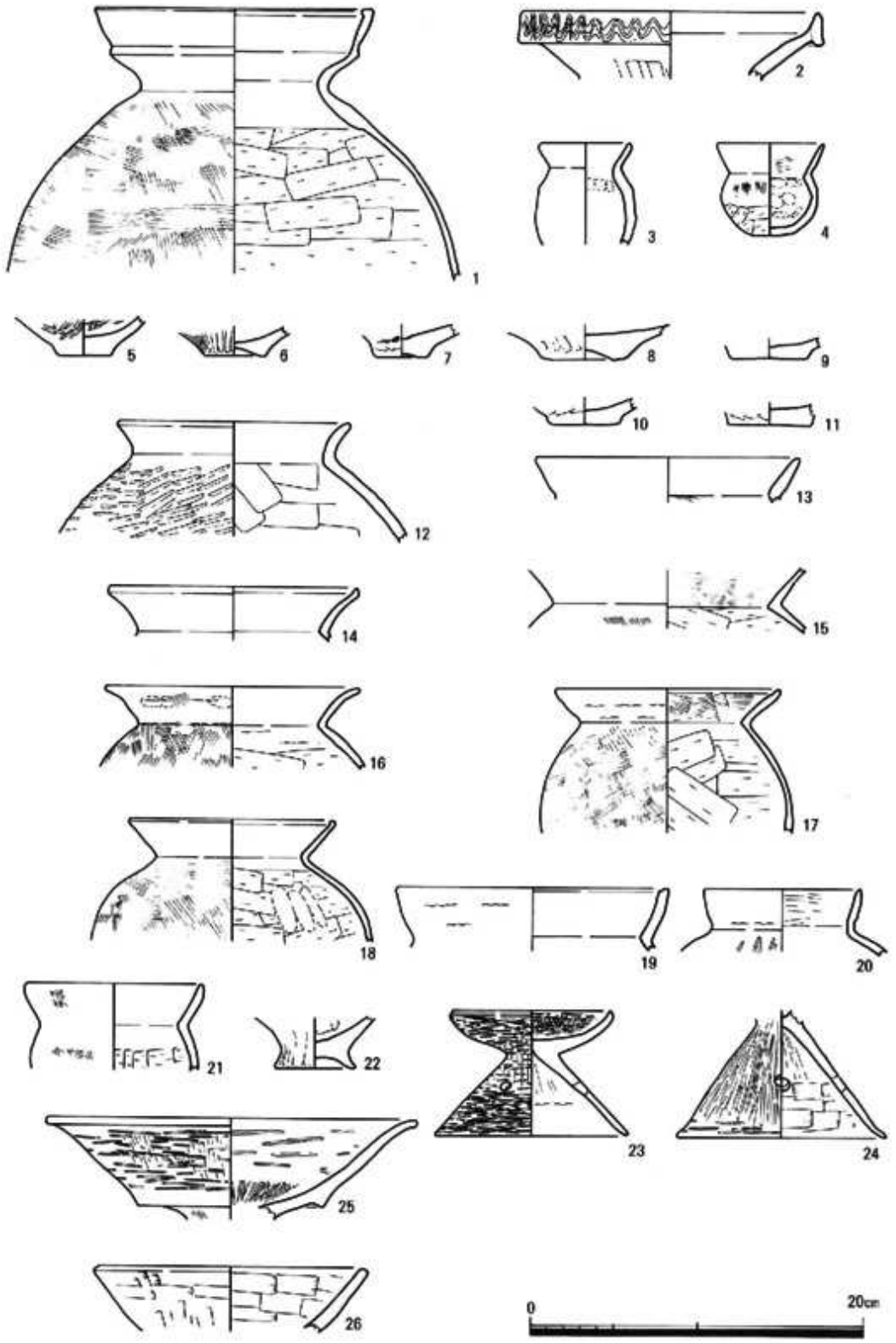
溝状遺構

ＳＤ－１

調査区の中央で検出した。北東の高まり部分から南西に落ち込み、南西角で少し上がっている。深さは60cmで、最深部面の標高は約（T.P.＋5.4m）を測る。堆積土は暗灰色粘質土・灰黒色粘土・暗灰青色粘土である。遺物は灰黒色粘土より布留式古相に比定される小型丸底壺・器台・布留式甕などの破片が少量出土している。また、北部溝底より木製品１点を出土した。全長89cmで丸木を4分1にカットしたものである。径7～8cmで片側端部に長さ20cmにわたり、一辺2.5cm及び3.5cmの方形に加工し、握りやすいように細く加工を施している。この木製品の用途等については現在のところ不明である。

4）遺構に伴わない出土遺物

第２層・第10層・第20層内で出土した。第２層は平安時代後期に比定される土師器が少量含まれている。第10層は古墳時代後期に比定される土器片がごく少量含まれている。第20層は古墳時代前期に比定される土師器を少量出土した。図示できたものは26点である。古墳時代前期に比定される二重口縁壺（１）・壺（２）・小型壺（３）・小型丸底壺（４）・壺（５～11）・甕（12～20）・鉢（21・22）・器台（23・24）・高杯（25・26）である。



第5図　遺構に伴わない出土遺物実測図

5）出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量	調整・技法	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
1 三	壺 土師器	口径 16.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケナデ（8本/cm）、内面胴部ナデ・他ヘラケズリ	外：淡灰茶色 内：灰黒色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・チャート）	良好	2/5	煤付着
2 三	同上	口径 17.4	口縁部外面ヨコナデ後波状文（5条）、内面ヨコナデ。体部外面ヨコナデ・ヘラナデ、内面ナデ	淡灰茶色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・チャート）	良好	口縁1/6	
3 三	小型壺 土師器	口径 5.2 最大径 6.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ナデ・指頭圧痕残存	淡黄灰茶色	2mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・石英）	良好	1/2	
4 三	同上	口径 6.2 器高 5.6	口縁部内外面ヨコナデ・ハケナデ。体部外面上部ハケナデ、下部ヘラケズリ、内面ナデ・指頭圧痕	外：乳灰茶色 内：乳橙茶灰色	2mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・石英）	良好	2/3	黒斑有り
5	壺 土師器	底径 2.8	体部内外面ヘラミガキ。底部外面ヨコナデ	外：淡黄橙色 内：灰黒色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）	良好	底部完形	
6	同上	底径 3.4	体部外面ヘラミガキ、底部ナデ、内面ヘラナデ・工具痕を有す	外：淡灰色 内：乳灰茶色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英）	良好	底部2/3	
7	同上	底径 3.0	体部外面ヘラミガキ・ヘラ押さえ、底部ナデ。内面ヘラナデ・工具痕を有す	淡灰黄色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英）	良好	底部ほぼ完形	
8	同上	底径 4.8	体部外面ハケナデ後ヘラナデ、底部指押さえ。内面ヘラナデ	淡黄灰色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・黒雲・石英・チャート）	良好	底部完形	
9	同上	底径 4.4	体部外面ヨコナデ、底部ナデ。内面ヘラケズリ	外：黒灰茶褐色 内：淡橙黄茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む（長石・石英）	良好	底部ほぼ完形	
10	同上	底径 4.0	底部外面ヨコナデ、底部ナデ。内面ヘラナデ・工具痕を有す	外：淡灰茶色 内：乳灰茶色	3mm以下の砂粒を微量に含む（長石・石英）	良好	底部ほぼ完形	
11	同上	底径 5.0	体部外面ヘラナデ、底部ヘラミガキ。内面ヘラナデ	淡黒灰色	1mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英）	良好	底部完形	
12 三	壺 土師器	口径 13.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タタキ（3本）、内面ヘラナデ	外：暗灰茶色 内：淡黄灰色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母・石英）	良好	口縁1/10	煤付着
13	同上	口径 15.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ハケナデ	淡灰茶色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英・黒雲）	良好	口縁1/8	黒斑有り
14	同上	口径 14.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ	淡灰茶褐色	4mm以下の砂粒を多量含む（角閃石・長石・雲母）	良好	口縁1/8	煤付着
15	同上		口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ。体部外面ハケナデ、内面ヘラケズリ	灰黄褐色	1mm以下の砂粒を微量に含む（長石・石英・雲母）	良好	口縁1/6	
16 三	同上	口径 15.0	口縁部外面ハケナデ・指頭圧痕・接合痕残存、内面ハケナデ。体部外面ハケナデ（7本）、内面上部ナデ・接合痕残存。他ヘラケズリ	外：淡灰茶褐色 内：暗茶褐色	4mm以下の砂粒を多量含む（角閃石・長石・石英・雲母・赤褐色酸化粒）	良好	口縁1/6	
17 三	同上	口径 13.4	口縁部外面ヨコナデ・接合痕残存、内面ハケナデ。体部外面タタキ（5本）後ハケナデ（8本）、内面ヘラケズリ	淡黄灰褐色	3mm以下の砂粒を少量含む（角閃石・長石・雲母）	良好	口縁完形	
18 三	同上	口径 12.0	口縁部外面ヨコナデ、内面横ナデ。体部外面ハケナデ（6本）、内面胴部ナデ。他ヘラケズリ・指ナデ	淡黄灰色	3mm以下の砂粒を少量含む（角閃石・雲母・石英・チャート）	良好	口縁・体部1/8	
19	同上	口径 16.0	口縁部外面ヨコナデ・接合痕残存、内面ヨコナデ。体部内面ナデ	外：淡灰色 内：淡茶灰色	1mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・石英）	良好	口縁1/8	
20	同上	口径 9.2	口縁部外面ヨコナデ・接合痕残存、内面ハケナデ。体部外面ヘラミガキ、内面ナデ	淡茶灰色	2mm以下の砂粒を微量に含む（長石・石英・チャート）	良好	口縁1/5	
21		口径 10.4	口縁部外面ヨコナデ、一部ハケナデ、内面ヨコナデ。体部外面ハケナデ、内面上部ナデ。他ヘラケズリ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒を微量に含む（長石・石英・雲母）	良好	口縁1/8	
22	同上	口径 9.4 底径 11.4 器高 7.6	外面ヘラナデ、底部ナデ。内面ヘラナデ（工具痕有り）	乳茶灰色	7mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・石英・角閃石）	良好	底部ほぼ完形	
23 三		底径 12.4	外面ヘラケズリ後ヘラミガキ・接合痕残存、内面体部放射状ヘラミガキ後水平にヘラミガキ、底部しぼり目・ナデ・淡白痕残存、一方孔有り	暗灰赤茶褐色	1mm以下の砂粒を微量に含む（長石・黒雲・角閃石）	良好	ほぼ完形	
24 三	同上	底径 12.4	胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、四方孔有す	淡黄灰茶色	2mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・チャート）	良好	胴部ほぼ完形	
25 三		口径 22.0	体部外面ハケナデ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	暗黄灰茶色	2mm以下の砂粒を微量に含む（長石・黒雲・赤褐色酸化粒）	良好	体部1/2	
26	同上	口径 15.6	体部外面ヘラ押さえ後ヘラナデ、内面ヘラナデ	明茶灰色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・チャート）	良好	体部1/5	

3．まとめ

今回の発掘調査は小面積で、しかも掘削深度が深いなどの諸条件の中の調査であり、詳細に遺跡状況を把握することが困難であった。しかし、古墳時代前期の溝状遺構など遺構の検出。コンテナ箱にして2箱分の遺物を出土することができた。以下、周辺の調査成果と今回の調査結果について記す。

周辺の調査状況では調査区から南東部約150ｍ地点で当調査研究会が実施している第1次（TK82－1）調査地がある。この調査では古墳時代後期に比定される集落遺構（竪穴住居・土坑・溝など）を検出、さらに南東部へ250～300ｍ地点では第2次（TK89－2）・第3次（TK92－3）調査地があり、その調査成果では弥生時代前期～中期の墓域・古墳時代後期の墓域・平安時代の土坑などが検出されている。また調査区から南西部へ約100ｍ地点で同年度、市教育委員会が下水道工事に伴う調査で実施した結果、古墳時代前期の遺物を含む土層を検出している。調査地敷地内では遺構確認調査の結果、調査区北部で河川跡と考えられる砂層が検出されている。これらの周辺調査と当調査区の成果から総合すると当調査区で検出した古墳時代前期の時期のものは、南西側への広がりが想定されるが、東部と北部にはこの時期の遺構の広がりがあまりないものと考えられる。南部については未調査であり、今後の調査にゆだねる。

今回の調査で特筆できることは調査区北東部で確認された第20層の高まりである。堆積状況や埋没状況から推測すると古墳の墳丘の可能性が強い。また、調査区中央で検出された溝状遺構は墳丘を巡る周濠の一部と考えられる。しかし、前文でも述べたように検出深度が深く、調査面積が狭いため拡張することが不可能であり、その詳細なことが掴めず、古墳として取り扱わなかった。今後、隣接地で調査を行う機会があれば、これらの検出遺構が多少となり、明白になると考える。

また、今回の調査では断面観察のみであったが上層（第3層）で検出された層内より平安時代中期頃の黒色土器・土師小皿などが含まれていた。これらの遺物や堆積状況からみて、当地周辺には集落域の存在を示唆するものであり、この時代についても注意を払わなければならないであろう。

参考文献

高萩千秋　1989「Ⅱ竹渕遺跡（第1次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告23

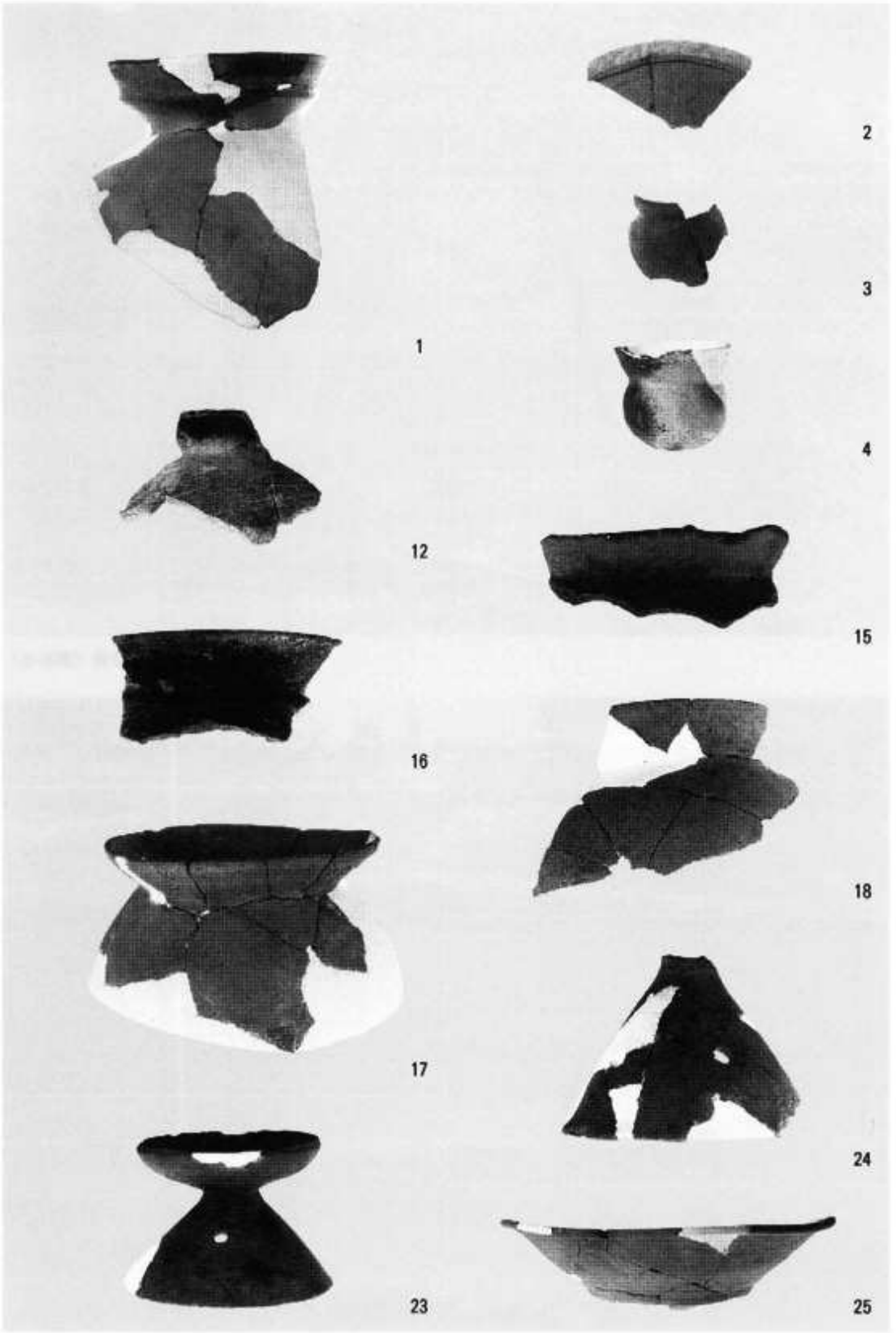
坪田真一　1992「Ⅲ竹渕遺跡（第2次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』（財）八尾市文化財調査研究会報告35

原田昌則　1993「19.竹渕遺跡第3次調査（TK92-3）」『平成4年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』

調査区全景（西から）

調査区北東部北壁（南から）

図版二



Ⅲ　竹渕遺跡第５次調査（ＴＫ95－５）

例　言

1．本書は、大阪府八尾市竹渕４丁目33－１で実施した共同住宅建築工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する竹渕遺跡第５次調査（ＴＫ95－５）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋179－３号　平成７年８月29日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が岸田 貢氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成７年９月25日から10月４日（実働８日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は135㎡を測る。調査においては垣内洋平・岸田靖子・西田真紀が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成８年９月30日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－岸田　遺物レイアウト－原田　図面トレース－北原清子　遺物写真撮影－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……25

2．調査概要……26

1）調査の方法と経過……26

2）基本層序……27

3）検出遺構と出土遺物……29

4）出土遺物観察表……35

3．まとめ……37

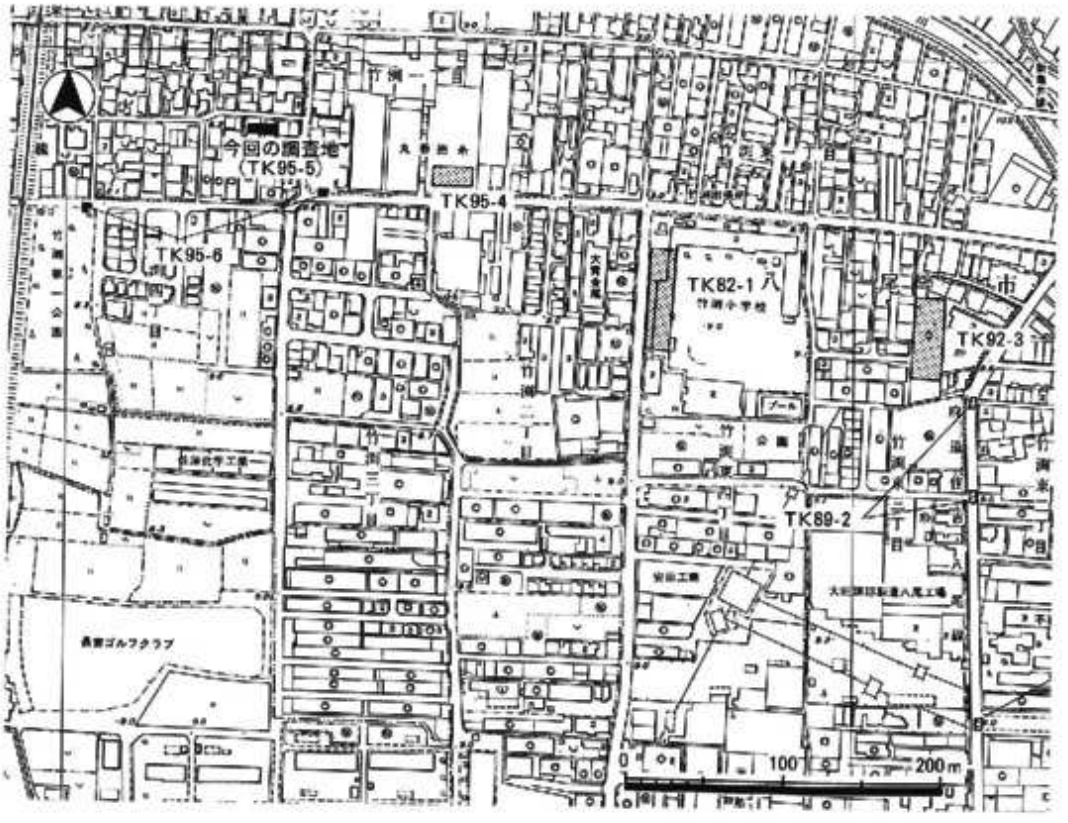
Ⅲ　竹渕遺跡第５次調査（ＴＫ95－５）

１．はじめに

竹渕遺跡は八尾市西部の竹渕、竹渕１～５丁目、竹渕東１～４丁目に広がる弥生時代前期～平安時代に至る複合遺跡である。地理的には平野川の左岸一帯に広がる沖積地上の標高９ｍ付近に位置している。

当遺跡周辺では、東に亀井遺跡、北東に久宝寺遺跡、南東に城山遺跡（大阪市）、北に加美北遺跡・加美遺跡（大阪市）が存在している。

当遺跡は、昭和57年度に八尾市教育委員会により実施された、市立竹渕小学校の校舎建て替え工事に伴う遺構確認調査で発見された遺跡である。この調査結果を受けて当調査研究会が実施した第１次調査（ＴＫ82－１）では、古墳時代後期の居住域に関連した遺構・遺物が検出され、当該時期の集落の存在が明らかとなった。その後、平成元年度には竹渕東２丁目で公共下水道工事に伴う第２次調査（ＴＫ89－２）が実施され、弥生時代前期～中期の遺構・遺物が検



第１図　調査地周辺図

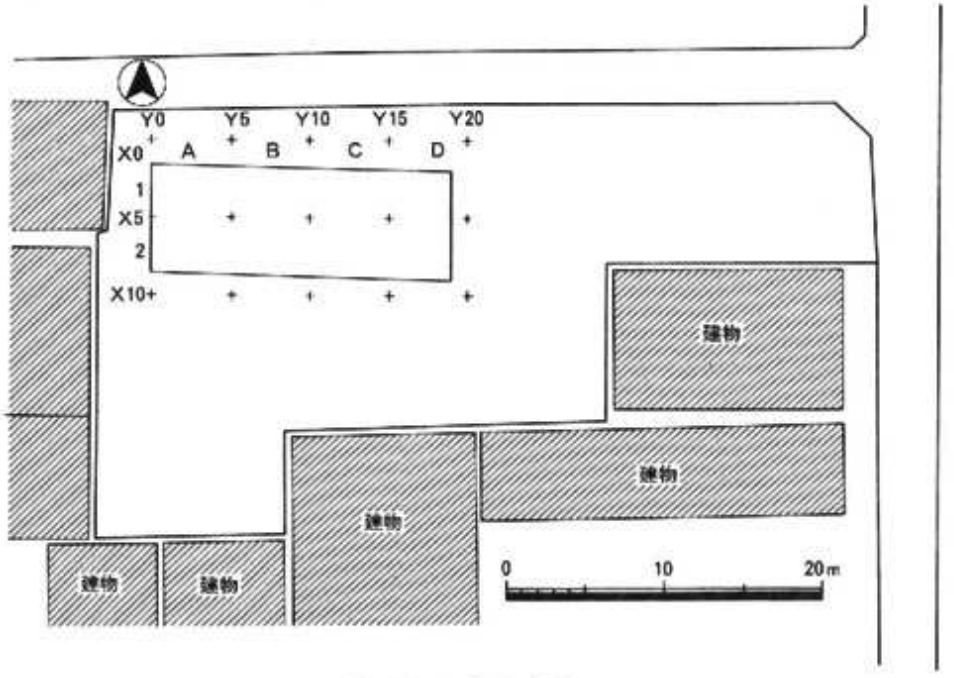
出されているほか、平成４年度に竹渕東３丁目80－３で行われた工場建設に伴う第３次調査（ＴＫ92－３）では、弥生時代前期の土坑・古墳時代後期の方墳・平安時代中期の土坑などが検出されている。さらに、竹渕１丁目223－１他で平成７年度に行った第４次調査（ＴＫ95－４）では、古墳時代前期（布留式古相）の溝状遺構が検出されている。

今回の発掘調査は、竹渕４丁目33－１で計画された共同住宅建築工事に伴うもので、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、事業者・八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会との三者間で取りかわした協定書締結後、現地調査を実施した。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建築に先だって実施したもので、建物の建築予定地に東西幅19m、南北幅７ｍの調査区を設定した。しかし、市教育委員会による遺構確認調査で調査最終深度が現地表下3.0ｍ に達し、しかも多量の湧水が予想されたため、隣家への影響等を考慮した調査方法を選択した結果、下幅で東西幅15m、南北幅３ｍ程度の調査規模となった。調査の地区割りは、調査地の北西隅のＸ０・Ｙ０地点を基点として東西20m、南北10mにわたって設定した。一区画の単位は５ｍ四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｄ）、南北方向は算用数字（北から１～２）で示し、地区の表示は１Ａ～２Ｄ区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～Ｘ10）、南北線（Ｙ０～Ｙ20）の交点の数値を使用した。



第２図　調査区設定図

掘削に際しては、現地表下2.5m前後までを機械掘削した後、以下0.5m前後については層理にしたがって人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下2.4～2.8m（標高6.0～5.7m）で古墳時代中期末から後期初頭の遺物を包含する第９層の存在が確認されたほか、第10層・第11層上面（標高5.8～5.7m ）では、古墳時代中期末から後期初頭に比定される土坑６基（ＳＫ－１～ＳＫ－６）、小穴５個（ＳＰ－１～ＳＰ－５）を検出した。なお、第４層上面を構築面とする焼土坑を１基検出している。遺物の総量はコンテナ２箱程度である。

２）基本層序

調査地の層序については、古墳時代中期末の遺物包含層である第９層が形成された後、調査地一帯は水性粘土である第８層が厚く堆積しており、その上層は極細粒砂～粗粒砂を主体とする河川堆積上層である第７層を挟んで上層まで比較的安定した砂質シルトが堆積していた。遺構は第10層・第11層上面で古墳時代中期末～後期初頭に比定される土坑・小穴が検出されたほか、第４層上面を構築面とする平安時代中期以降に比定される焼土坑が北壁面で確認されている。また、北壁のＹ15.5地点では第11層から第８層上面に達する噴砂痕が確認されている。ここでは、普遍的に存在した11層を摘出して基本層序とする。

第０層　客土。層厚0.3～0.7m。上面の標高はT. P＋8.5m前後である。

第１層　Ｎ５／　灰色砂質シルト。旧耕土。層厚0.1～0.2m。

第２層　10GY６／１緑灰色砂質シルト。床土。層厚0.05～0.1m。

第３層　2.5Y ６／２灰黄色砂質シルト。層厚0.4m前後。

第４層　2.5Y ７／４浅黄色砂質シルト。層厚0.2～0.45m。上面で焼土坑を確認。

第５層　2.5Y ６／３にぶい黄色砂質シルト。層厚0.2～0.3m。

第６層　５Y ６／１灰色極細粒砂。層厚0.2～0.3m。

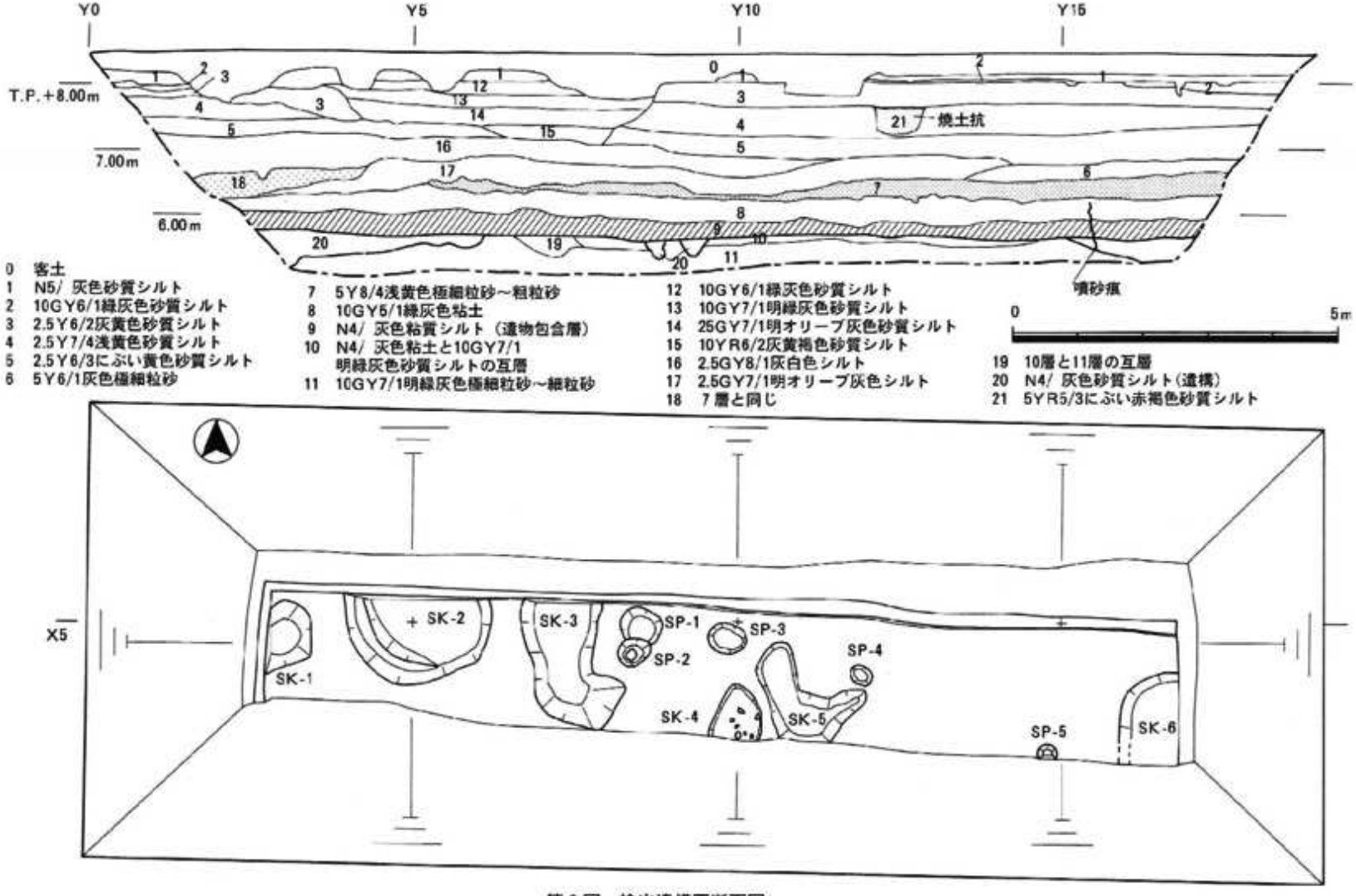
第７層　５Y ８／４浅黄色極細粒砂～粗粒砂。層厚0.1～0.4m。河川堆積層。

第８層　10GY５／１緑灰色粘土。層厚0.2～0.4m。上部には7.5GY明緑灰色細粒砂が堆積している。無遺物層。

第９層　Ｎ４／　灰色粘質シルト。層厚0.1～0.4m。炭を含む不均質な土層。５世紀後半から６世紀初頭を中心とする遺物を包含する。

第10層　Ｎ４／　灰色粘土と10GY ７／１明緑灰色砂質シルトの互層。層厚0.1～0.2m。不均質な土層で５世紀後半から６世紀初頭の遺物を少量含んでいる。上面が遺構検出面である。

第11層　10GY ７／１明緑灰色極細粒砂～細粒砂。層厚0.6m以上。河川の氾濫に起因する土層で、上面の一部が遺構検出面である。



0 客土
1 N5/ 灰色砂質シルト
2 10GY6/1緑灰色砂質シルト
3 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
4 2.5Y7/4浅黄色砂質シルト
5 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト
6 5Y6/1灰色極細粒砂
7 5Y8/4浅黄色極細粒砂～粗粒砂
8 10GY5/1緑灰色粘土
9 N4/ 灰色粘質シルト（遺物包含層）
10 N4/ 灰色粘土と10GY7/1明緑灰色砂質シルトの互層
11 10GY7/1明緑灰色極細粒砂～細粒砂
12 10GY6/1緑灰色砂質シルト
13 10GY7/1明緑灰色砂質シルト
14 25GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト
15 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト
16 2.5GY8/1灰白色シルト
17 2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト
18 7層と同じ
19 10層と11層の互層
20 N4/ 灰色砂質シルト（遺構）
21 5YR5/3にぶい赤褐色砂質シルト

第3図　検出遺構平断面図

3）検出遺構と出土遺物

・第10層、第11層上面検出遺構

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

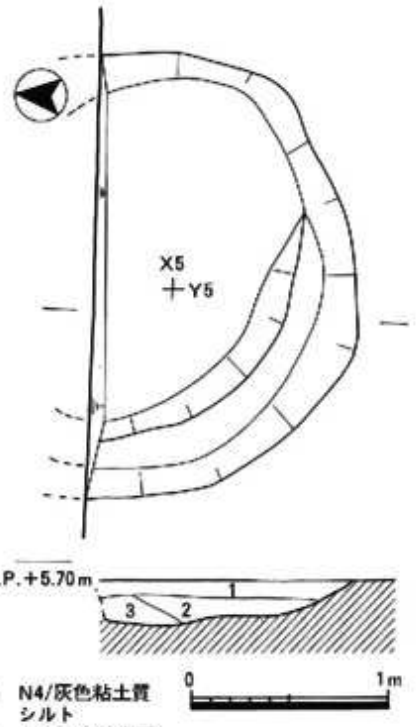
調査区の西端で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分からみて楕円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅0.7ｍ、南北幅1.1ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は炭を含むやや不均質な緑灰色シルトの単一層である。遺物は古墳時代中期末から後期初頭に比定される土師器・須恵器の小片が少量出土したが図化し得たものはない。

ＳＫ－２

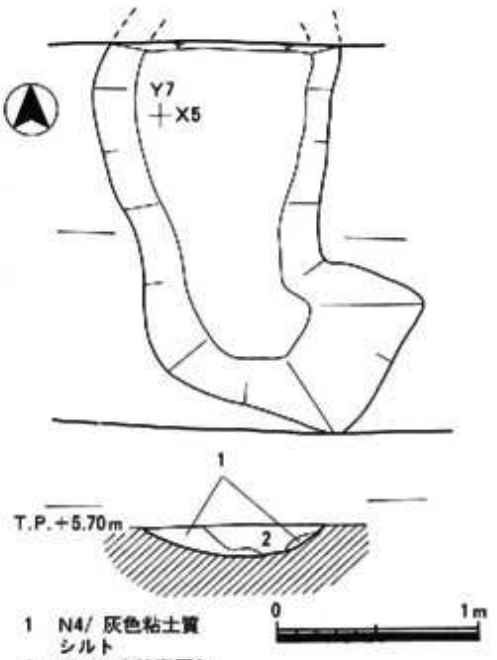
ＳＫ－１の東に隣接している。北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分では半円形を呈している。検出部分で東西幅2.26ｍ、南北幅1.35ｍ、深さ0.23ｍを測る。埋土は粘土質シルトを主体とする３層で構成されている。遺物は古墳時代中期末から後期初頭に比定される土師器甕、須恵器杯蓋、韓式系土器の小片が極少量出土している。そのうち図化し得たものは土師器鉢１点（１）である。（１）は小片ではあるが、口縁部の形状や全体に丁寧な作りで器壁が薄い点から、韓式系土器の平底鉢と推定される。なお、内外面の調整にハケナデを使用する点は、平底鉢のなかでも新しい様相を示すものと推定される。

ＳＫ－３

１・２Ｂ区で検出した。不定形を呈する土坑で、北端は調査区外に至る。検出部分で東西幅0.95ｍ、南北幅2.0ｍ、深さ0.18ｍを測る。埋土は掘形の形状に沿って２層が堆積している。遺物は古墳時代中期末から後期初頭に比定される土師器甕の小



第４図　ＳＫ－２平断面図

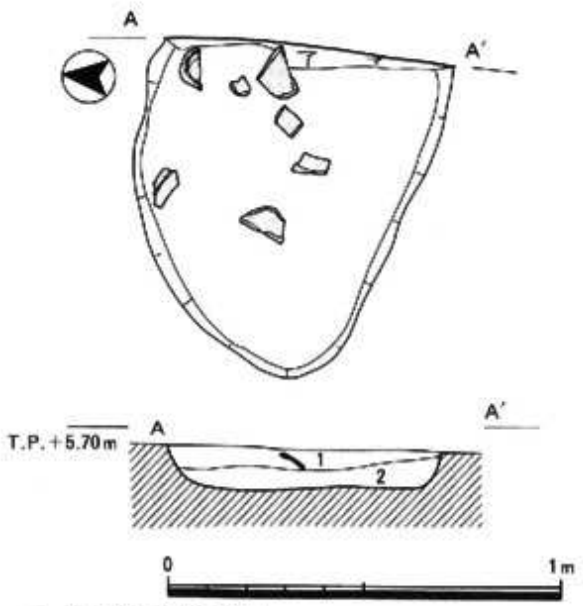


第５図　ＳＫ－３平断面図

片が極少量出土したほか、山モモの種子が出土している。図化し得たものは土師器甕1点（5）である。（5）は口縁部の1/12程度の小片である。口縁部中位が強いヨコナデにより明確な段を有している。白灰色の色調で、胎土中に0.5mm程度の砂粒が多量に含まれている。

SK－4

2B・C区で検出した。南部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.75m、南北幅0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は上層の灰色粘土質シルトと下層の暗青灰色粘土質シルトの2層から成る。遺物は上層から古墳時代中期末から後期初頭に比定される土師器甕、須恵器杯身・杯蓋・高杯、製塩土器の小片が少量出土している。図化し得たものは6点（2・7・8～11）である。その内訳は土師器甕1点（2）・壺1点（7）、須恵器杯蓋2点（8・9）・杯身2点（10～11）である。土師器甕（2）は「く」の字状に屈曲する口縁部を有するもので、口縁端部は内傾した後、肥厚気味に丸く終る。口縁部内面はやや単位の粗い横方向のハケナデ、外面も同様の調整具を使用した縦方向のハケナデが想定される。（7）は球形の体部に上外方に小さく伸びる口頸部が付く土師器短頸壺である。口頸部内面中位にヨコナデによるやや深めの凹線が一周している。（8・9）は須恵器杯蓋で、遺存率は（8）が1/3程度、（9）が1/4程度である。（8）は平らに近い天井部を持つもので、稜は鋭く口縁部はやや内湾気味に垂直方向に下り端部は平らで内傾する面を有している。（9）は口縁部が垂直方向に下り、端部付近で短く外反している。（10・11）は須恵器杯身で共に1/2程度遺存しているが、（11）は立ち上がりを欠いている。（10）は丸味がありやや深目の底体部を持つもので、受部はやや上外方に短く伸びる。立ち上がりは内傾して伸び、内傾する端部に沈線を有している。各部の数値は口径10.5cm、器高5cm、受部径12.8cm、立ち上がり高1.6cmを測る。底部外面に灰かぶりが認められる。（10・11）共に底部外面のヘラケズリの方向は時計回りである。図化した須恵器類は5世紀後半に比定されるTK23型式に対比されよう。

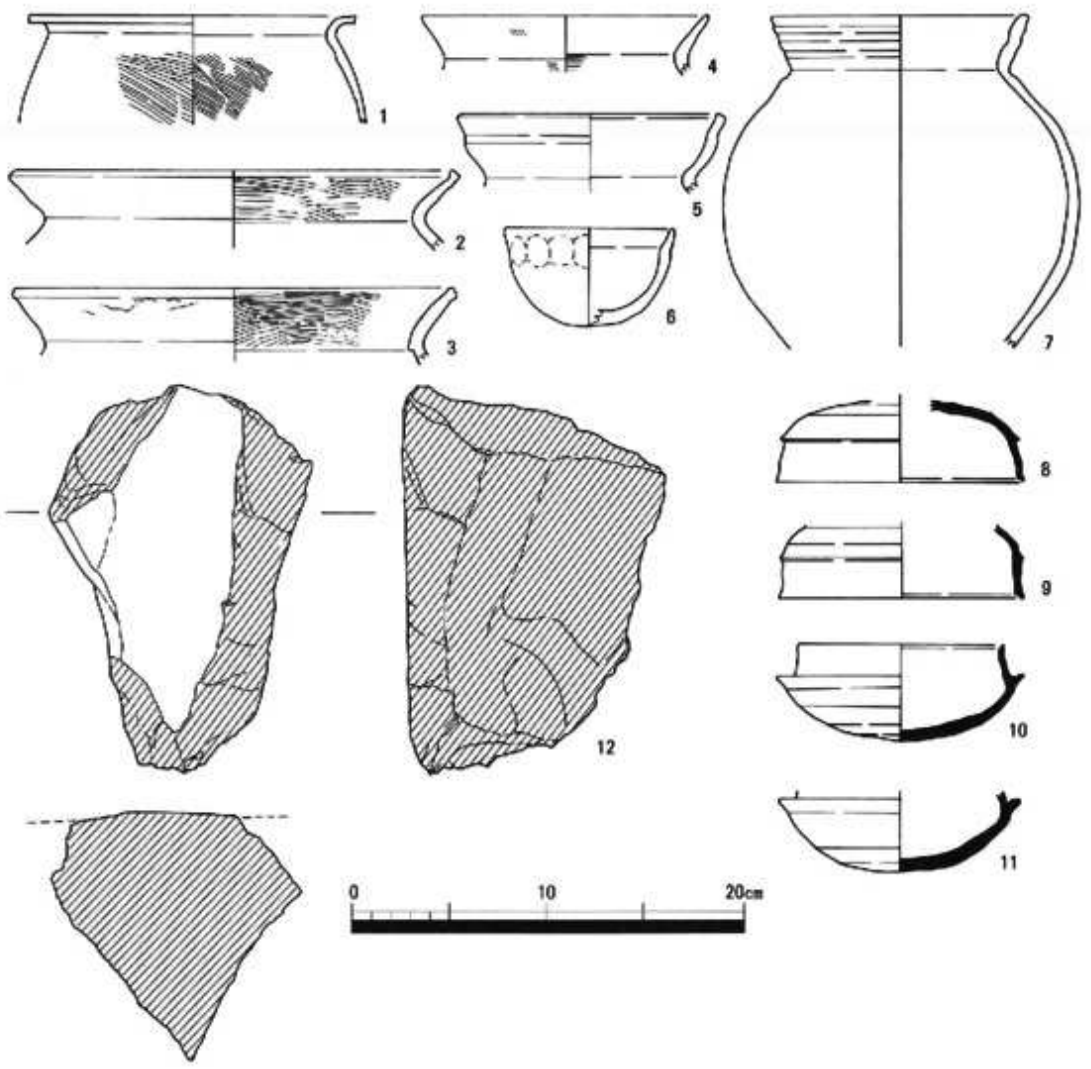


1　N4/ 灰色粘土質シルト
2　10BG4/1暗青灰色粘土質シルト

第6図　SK－4平断面図

SK－5

1・2C区で検出した。不定形を呈する土坑である。東西幅1.45m、南北幅1.5m、深さ0.1mを測る。埋土はSK－4と同様の2層から成る。遺物は古墳時



第７図　ＳＫ－１（１）、ＳＫ－３（５）、ＳＫ－４（２・７・８～11）、ＳＫ－６（３・６）、
ＳＰ－１（12）、ＳＰ－２（４）出土遺物実測図

代中期末から後期初頭に比定される土師器甕、須恵器甕の小片が極少量出土している。

ＳＫ－６

調査区南東隅で検出した。南部および東部が調査区外に至るため、全容は不明である。検出部分で東西幅0.9ｍ、南北幅1.1ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土はＳＫ－４と同様である。遺物は古墳時代中期末から後期初頭に比定される土師器甕・鉢、須恵器杯蓋・杯身、製塩土器が極少量出土している。土師器甕（３）・土師器鉢（６）の２点を図化した。（３）は土師器甕の口縁部の小片で1/8程度が遺存している。口縁部内面に横方向のハケナデが施されている。（６）は小型の鉢で、手づくね成形のため全体に作りは雑である。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－１

２Ｂ地区で検出した。円形を呈するもので、南部でＳＰ－２に切られている、東西径0.5ｍ、南北径0.45ｍ、深さ0.23ｍを測る。上層の灰色粘土質シルトと下層の暗青灰色粘土質シルトの２層から成る。底部に根石の可能性がある石材が存在している。遺物は根石に使われた石材のほか土師器の小片が１点のみ出土している。石材１点（12）を図化した。縦20cm、横13cm、厚さ13cm程度の大きさで、検出時点では図化した側面の平坦部分を上にして設置されていた。上面に使用痕跡を示す研磨痕が認められ、本来は台石として使用されたものが後に根石に転用されたようである。石材は安山岩である。

ＳＰ－２

円形を呈するもので、北部ではＳＰ－１を切っている。検出部分で東西径0.65ｍ、南北径0.47ｍ、深さ0.26ｍを測る。埋土はＳＰ－１と同様である。遺物は土師器、製塩土器の小片が極少量と山モモの種子等が出土している。土師器甕１点（４）を図化した。（４）はやや小型の土師器甕で、口縁部の1/8程度が遺存している。体部内面にハケナデ調整が施されている。

ＳＰ－３

ＳＰ－２の東に近接している。円形を呈するもので、東西径0.55ｍ、南北径0.47ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土は灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は土師器、須恵器、製塩土器の小片が極少量出土している。

ＳＰ－４

ＳＫ－５の北東部に近接している。円形を呈するもので、東西径0.35ｍ、南北径0.3ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土はＳＰ－１と同様である。遺物は出土していない。

ＳＰ－５

２Ｃ地区の南部で検出した。南端は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西径0.3ｍ、南北径0.23ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土は暗青灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

・第４層上面検出遺構

焼土坑

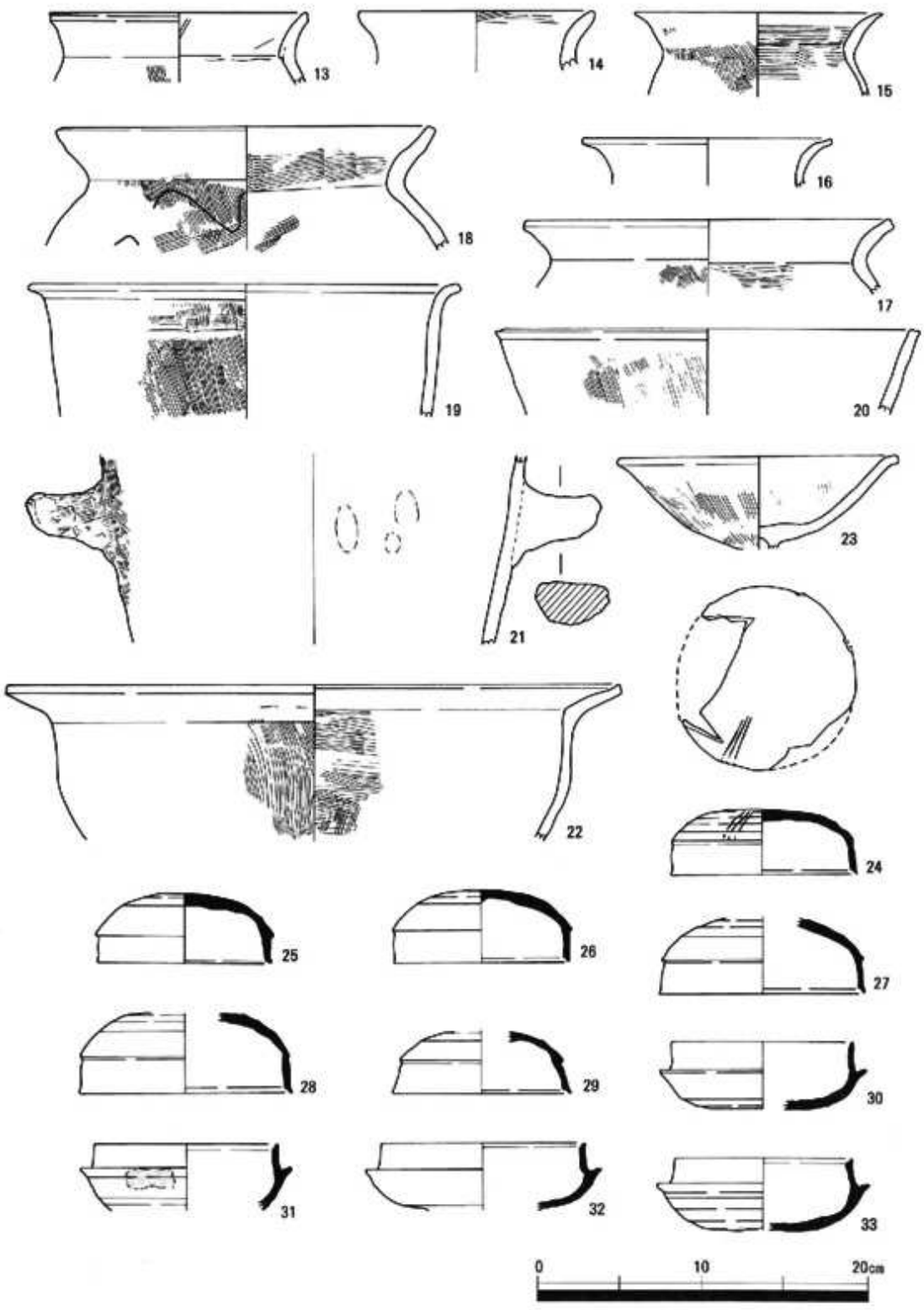
平面的には捉えられなかったが北壁のＹ12.1～Ｙ12.9地点で焼土坑を１基検出した。検出部分で「Ｕ」字形を呈するもので、上部幅0.8ｍ、下部幅0.63ｍ、深さ0.4ｍを測る。掘形の断面形に沿って火熱により焼土化したにぶい赤褐色砂質シルトが堆積した後、内部には第４層浅黄色砂質シルトが堆積していた。遺物は、底部から甘片が少量出土している。従って、火葬に関連した焼土坑であった可能性が高い。土器類が出土していないため帰属時期は限定できないが、

調査地の東約100m 地点で行われた第４次調査（ＴＫ95－４）の調査成果からみて、平安時代中期以降のものと考えられる。

４）遺構に伴わない出土遺物

第９層および第10層が古墳時代中期後半を中心とした遺物包含層であるが、量的には第９層出土のものが大半を占めている。

出土遺物の内訳は土師器・須恵器を中心とした土器類の他、山モモの種子等がコンテナ１箱程度出土している。出土した土器類は小片化したものが大半を占めている。図化した遺物は21点（13～33）である。その内訳は、土師器甕６点（13～18）・甑３点（19～21）・鉢１点（22）・高杯１点（23）、須恵器杯蓋６点（24～29）・杯身４点（30～33）である。土師器甕は６点図化した。全て口縁部を中心とした1/8～1/10程度の小片である。そのうち（13～16）が復元口径14～17cm程度の小型品で、（17・18）が復元口径22cm前後の大型品である。小型品は口縁部が緩やかに外反するもので、口縁部径と体部最大径がほぼ等しい形態が推定される。大型品は体部最大径が口縁径を陵駕するもので、小型品に比して器壁は厚い。器面調整は小型品および大型品共に、内面が横方向、外面が縦方向のハケナデ調整が行なわれている。（18）の体部上半にはヘラによる波状文が施文されている。（19～21）は甑の小片である。（19・20）が甑の口縁部で、口縁部が外反する（19）とやや内傾する面を持つ（20）がある。（21）は把手で、ほぼ水平に貼り付けられている。幅4.2cm、長さ4.9cm、厚さ2.5cmを測る。器面調整は外面が単位の密なハケナデ、内面はナデ調整が行なわれている。（22）は大型の鉢で遺存率1/12程度である。口縁部内外面ヨコナデ、体部は内面は横方向、外面は縦方向のハケナデ調整が行なわれている。（23）は椀形の杯部を有する高杯で、杯部は完存している。口径16.6cmを測る。口縁部内外面ヨコナデ、杯部内外面ハケナデを行う。須恵器杯蓋は６点（24～29）図化した。（24）が3/4以上遺存している他は、1/8～1/4程度である。天井部はおおむね平らに近い形状で、（24）を除けば稜は鋭い。口縁部は下外方に下る（29）を除けば、ほぼ垂直方向に下るものが大半を占めている。口縁端部は一様に平らで内傾している。（24）の天井部に「Ⅲ」のヘラ記号が行なわれているほか、灰かぶりが（25・26・28）に認められる。なかでも（28）は内外面に灰かぶりが見られる希なケースである。天井部のヘラケズリの方向は確認できた（25～27）の全てが時計回りである。杯身は４点（30～33）図化した。いずれも遺存率が1/4～1/8程度の小片である。受部は共に小さく斜上方に伸びるもので、立ち上がりの方向は直立する（30）以外は内傾して伸びる。口縁端部は（30）が丸く終るほかは、平らで内傾する面を持つ。（31）の底体部外面の上半に赤色顔料が塗布されている。灰かぶりが（30）の底体部に認められた。図化した須恵器類は５世紀後半を中心とするＴＫ23型式に対比されよう。



第8図　第9・10層出土遺物実測図

4）出土遺物観察表

・凡例　粒径－L 1mm以上　M0.5～1mm未満　S0.5mm未満　量－◎多量　○多い　△少ない　▲希少　赤－赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( ) 復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成 保存	残存率	備考 地区
1	三	韓式系半底鉢	(16.6) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。	灰褐色 茶褐色	やや粗	○S－L	△M	▲S		▲M		良好	口縁部1/8	SK－2
2	三	土師器甕	(22.4) —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ハケナデナデ。体部ナデ。	淡茶褐色 〃	良好	△S						良好	口縁部1/6	SK 4
3		土師器甕	(22.4) — —	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ハケナデ。	淡灰褐色 〃	良好	▲S						良好	口縁部1/8	SK－6
4		土師器甕	(14.5) —	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ	淡灰褐色 〃	精良							良好	口縁部1/8	SP－2
5		土師器甕	(13.0) —	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	白灰色 〃	やや粗	◎S M	◎S－M					良好	口縁部1/12	SK－3
6		土師器鉢	(8.5) (5.0) —	外面：口縁部指頭圧痕。体部ナデ。 内面：ナデ。	淡灰色 淡灰褐色	やや粗	◎S－L						良好	1/2	手づくね品 SK－6
7	三	土師器甕	(12.8) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナ	赤褐色 茶褐色	粗	◎S－L	◎S－L	◎S	◎S			良好	1/4	生駒西麓産 SK 4
8	三	須恵器杯蓋	(12.6) — —	外面：回転ヘラケズリ。回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰色 青灰色	良好	△S・M						堅緻	1/3	灰かぶり SK－4
9		須恵器杯蓋	(12.3) — —	外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 灰色	精良	▲S						堅緻	1/4	天井部灰かぶり SK－4
10	三	須恵器杯身	10.5 5.0 — 受部径12.8	外面：底体部1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰色 淡青灰色	精良	△M－L						堅緻	1/2	底体部外面灰かぶり SK－4
11		須恵器杯身	— — 受部径12.3	外面：底体部1/3回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 内面：回転ナデ。	淡灰色 灰色	やや粗	◎S－L						堅緻	1/2	SK－4
13		土師器甕	(15.4) —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡灰褐色 茶褐色	やや粗	◎S－L						良好	口縁部1/4	1・2B区第9層
14		土師器甕	(14.2) — —	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	赤褐色 〃	良好	△M－L					赤△L	良好	口縁部1/8	1・2A区第9層
15	三	土師器甕	(12.4) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ハケナデ。体部ハケナデ。	淡茶褐色 〃	良好	△S－L		△S				良好	口縁部1/6	1・2C区第9層
16		土師器甕	(15.0) —	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色 黄褐色	良好	△M	△M			▲L		良好	口縁部1/8	1・2B区第9層

・凡例　粒径－L 1mm以上　M0.5～1mm未満　S0.5mm未満　量－◎多量　○多い　△少ない　▲希少　赤赤－赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( ) 復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素地	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成 保存	残存	備考 地区
17	三	土師器 甕	(22.0) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ	赤褐色 淡黒灰色	良好	△S						良好	口縁部 1/8	1・2C区 第9層
18		土師器 甕	(22.1) —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。体部上半に1条の波状文。 内面：口縁部ヒヨコナデ、中	淡灰褐色 〃	やや粗	○SIL	△M	△S				良好	口縁部 1/8	口縁部煤付着 1・2C区 第9層
19	三	土師器 甕	(25.8) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡灰褐色 〃	やや粗	○SL						良好	口縁部 1/10	1・2C区 第9層
20	三	土師器 鉢	(25.8) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡灰褐色 〃	やや粗	○S		△S				良好	口縁部 1/8	1・2A区 第9層
21	四	土師器 甕	— —	外面：乱方向のハケナデ。 内面：ナデ。	淡灰褐色 黒褐色	やや粗	○S	△M			▲M		良好	把手完存	1・2B区 第9層
22	三	土師器 鉢	(36.8) —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。	淡赤褐色 〃	やや粗	○S	▲ML	△S				良好	口縁部～体部 1/12	1・2C区 第9層
23	三	土師器 高杯	16.6 杯部高 5.2	外面：口縁部ヨコナデ。杯部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。杯部風化のため調整不明瞭。	赤褐色 〃	やや粗	○SL	△SIM	▲S				良好	杯部完存	13区 第10層
24	四	須恵器 杯蓋	11.2 4.0 —	外面：天井部2/3回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：回転ナデ。	暗青灰色 〃	精良							堅緻	3/4	天井部外面ヘラ記号1・2D区第9層
25		須恵器 杯蓋	10.4 4.2	外面：天井部2/3回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	良好	△SIL						堅緻	1/4	天井部外面灰かぶり1・2B区第9層
26	四	須恵器 杯蓋	10.6 4.4 —	外面：天井部2/3回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	良好	○SIM						堅緻	1/4	天井部～口縁部外面灰かぶり1・2B区第9層
27	四	須恵器 杯蓋	(12.4) —	外面：天井部2/3回転ヘラケズリ。他回転ナデ。	淡灰色 白灰色	良好	△M						良好	1/3	1・2A区 第9層
28	四	須恵器 杯蓋	(12.8) —	外面：天井部2/3回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰色 〃	精良							良好	2/3	内外面に灰かぶり 1・2C区 第9層
29		須恵器 杯蓋	(10.8) — —	外面：天井部2/3回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：回転ナデ。	暗灰色 〃	やや粗	○SIL						良好	1/6	1・2B区 第9層
30		須恵器 杯身	(10.8) —	外面：底体部2/3回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：回転ナデ。	暗灰色 〃	精良							良好	1/8	底体部灰かぶり 2A区 第9層
31		須恵器 杯身	(11.0) — —	外面：底体部2/3回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰色 〃	良好							良好 1/8		底体部上半赤色顔料塗布 1・2B区 第9層

・凡例　粒径－L 1㎜以上　M0.5～1㎜未満　S0.5㎜未満　量－◎多量　○多い　△少ない　▲希少　※赤－赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ()復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	遺存保存	残存率	備考 地区
32	四	須恵器 杯身	(12.2) — —	外面：底体部2/3回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰色 〃	良好	△S－L						堅緻	1/4	1・2C区 第9層
33	四	須恵器 杯身	(10.6) — —	外面：底体部4/5回転ヘラケズリ。他回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰色 〃	良好	▲M						堅緻	1/4	1・2C区 第9層

3．まとめ

今回の発掘調査は小面積であったにも拘わらず、古墳時代中期末～後期初頭・平安時代中期以降に比定される遺構・遺物が検出され、竹渕遺跡内における当該期の集落の動向を知るうえで貴重な資料を提供する結果となった。

古墳時代中期末～後期初頭の集落については、当調査地の南東約420m 地点で行われた第３次調査（ＴＫ92－３）で同時期の方墳が１基検出されているほか、南東約300m 地点で行われた第１次調査（ＴＫ82－１）では竪穴住居・土坑・溝・小穴を中心とした古墳時代後期中葉以降の居住域が検出されている。なかでも、第１次調査（ＴＫ82－１）で検出されたＳＤ－１からは土師器・須恵器類が多量に出土しており、これらの集落形成を推進した氏族の安定した生活基盤を一端を示すものと理解されている。今回の発掘調査で検出した遺構群は、第１次調査（ＴＫ82－１）で検出された集落よりわずかに古い時期（古墳時代中期末～後期初頭時期）の集落であることから、古墳時代後期中葉段階に当調査地付近から第１次調査（ＴＫ82－１）地付近に集落が移動したことが明らかとなった。

平安時代中期以降の集落については、当調査地の東約100m 地点で行われた第４次調査（ＴＫ95－４）で当該期の遺物包含層の存在が確認されている程度で不明な点が多い。

一方、北壁のＹ15.5付近で検出した噴砂痕については、第11層から第８層に達するもので、５世紀後半から６世紀初頭の遺物を包含する第９層を切ることから、６世紀初頭以降の地震によるものと推定され、記紀にみる推古７年（599）の地震に対応する可能性が考えられる。

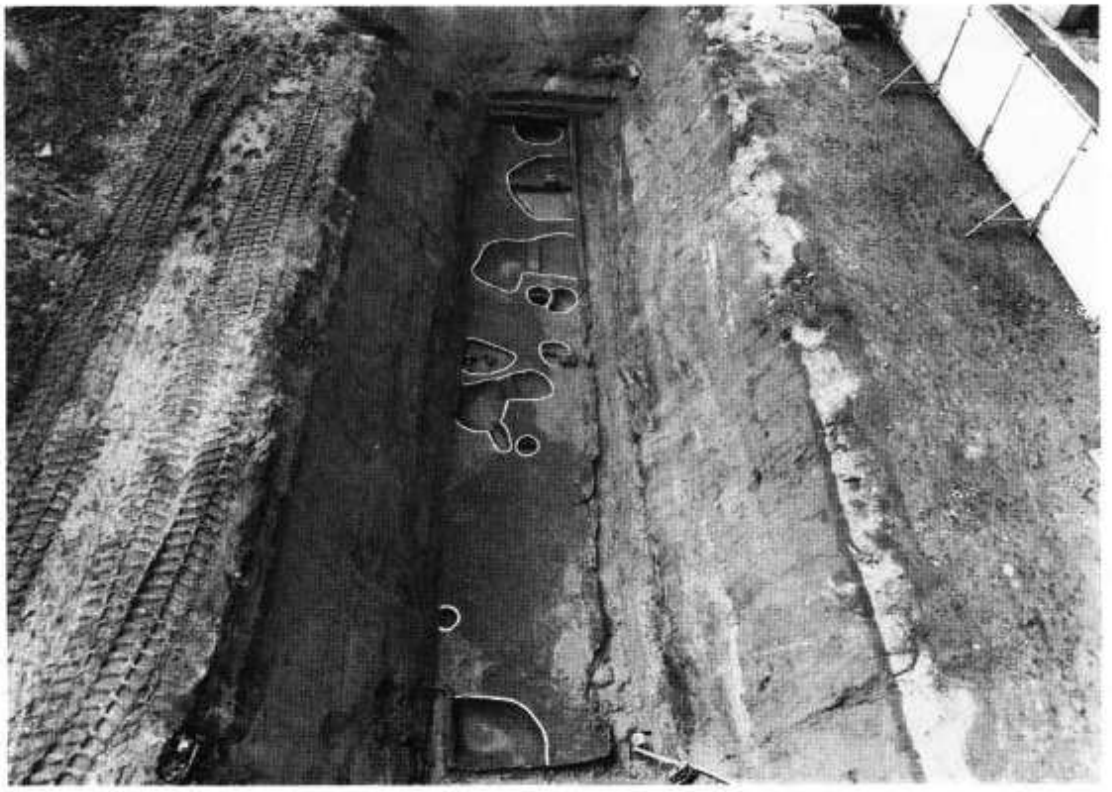
写真１　北壁（Ｙ15.5付近）検出噴砂跡

参考文献

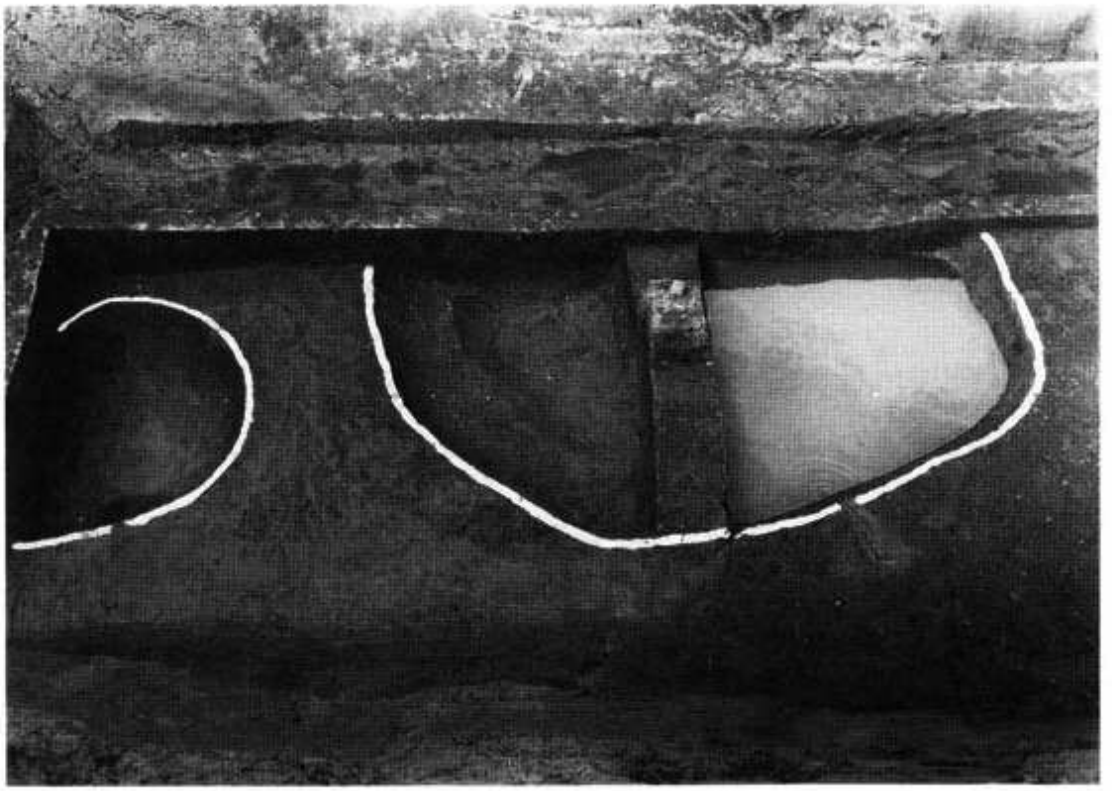
原田昌則　1993「ＸＶ竹渕遺跡（第３次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八市文化財調査研究会報告23

高萩千秋　1989「Ⅱ竹渕遺跡（第１次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告39

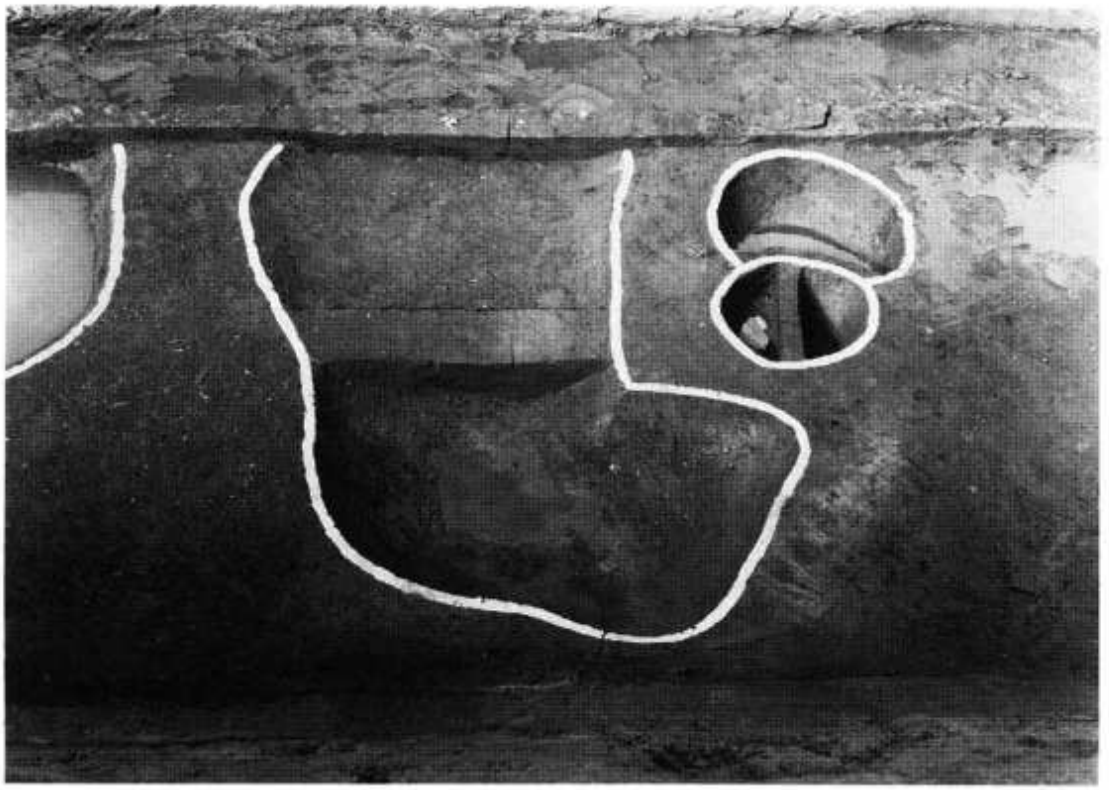
高萩千秋　1996「16. 竹渕遺跡第４次調査（ＴＫ95－４）」『平成７年度　（財）八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会



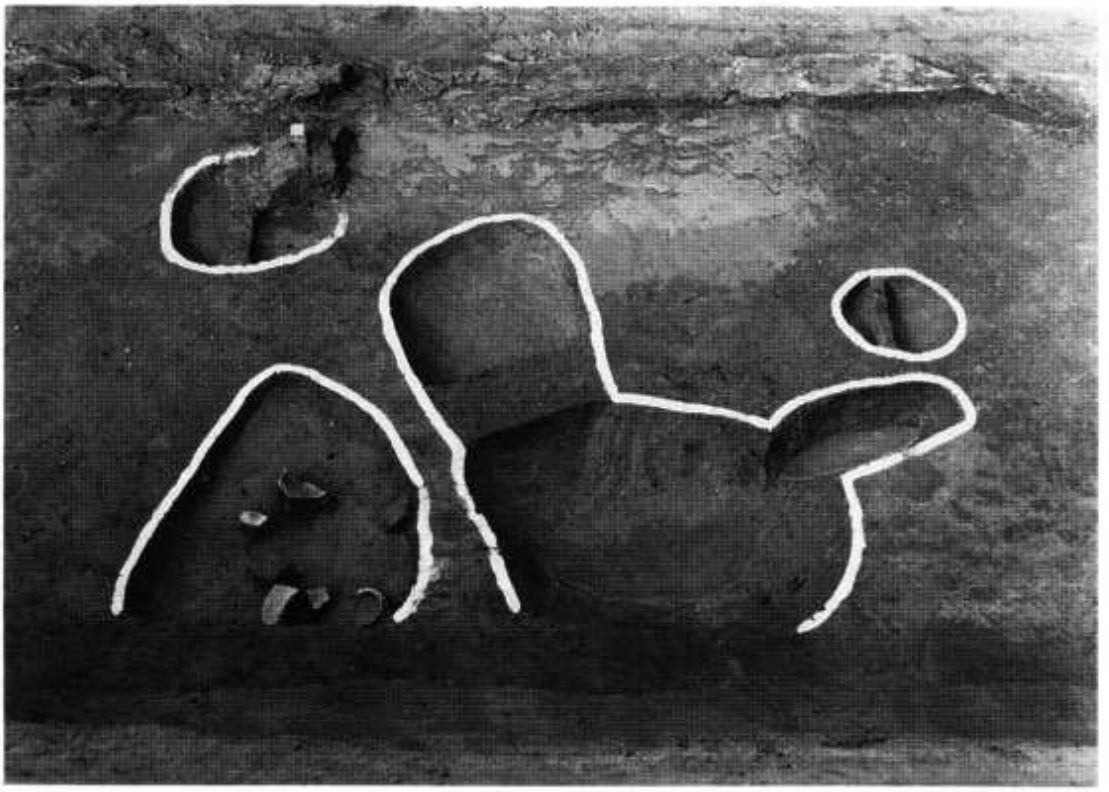
調査区全景（東から）



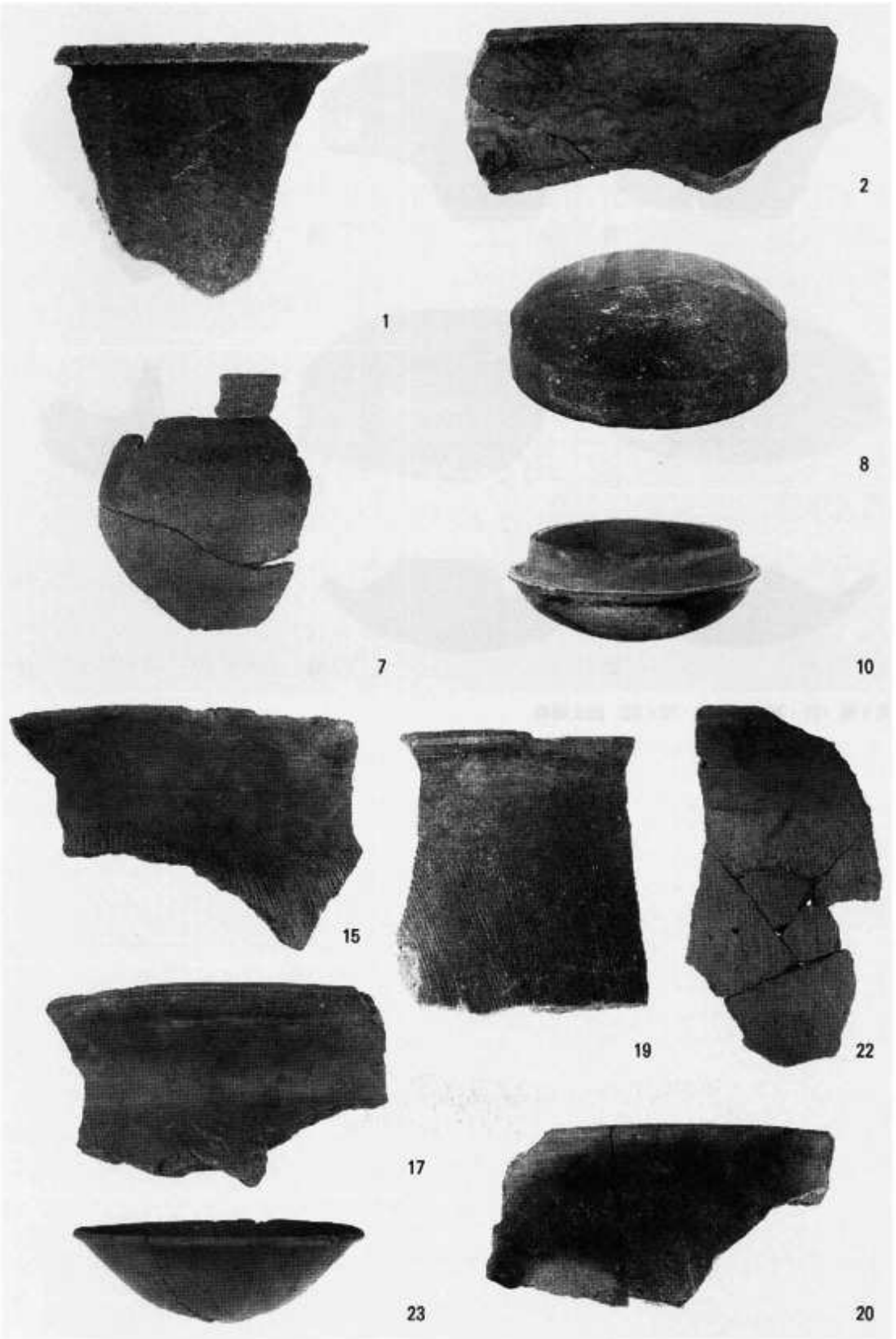
SK－1・SK－2検出状況（南から）



SK－3・SP－1・SP－2検出状況（南から）

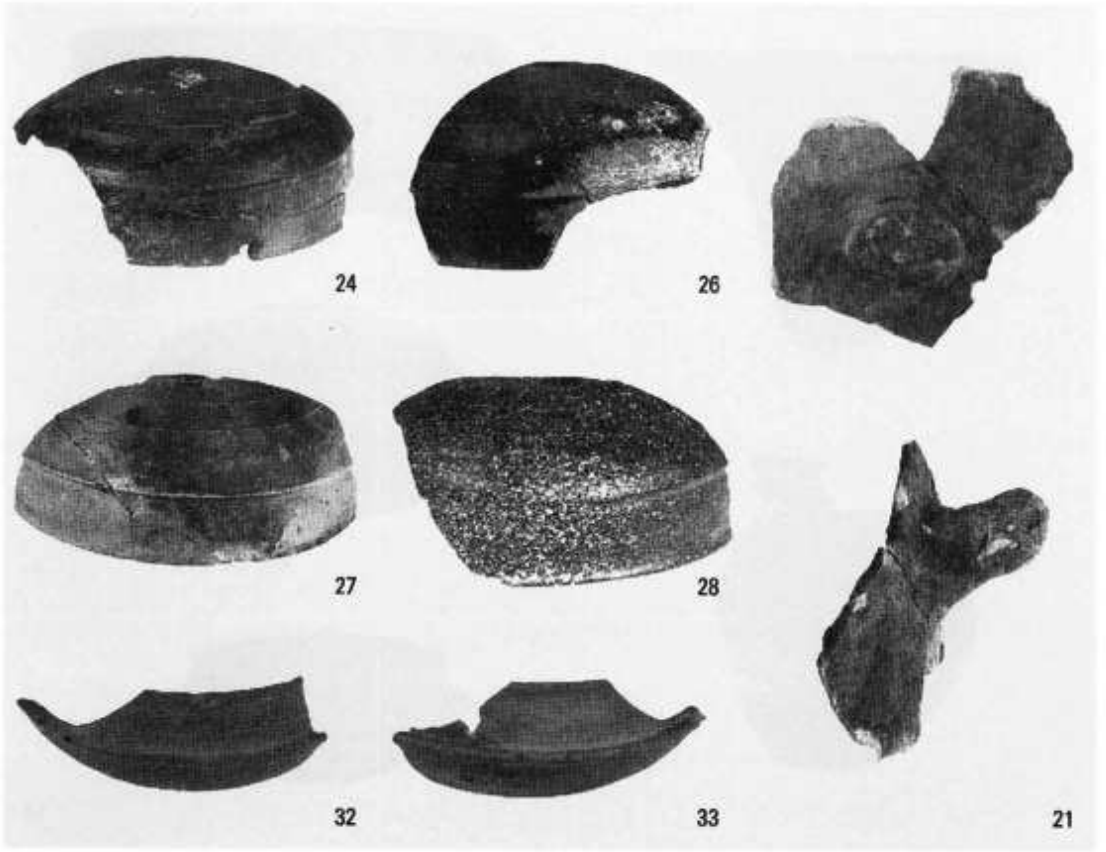


SK－4・SK－5・SP－3・SP－4検出状況（南から）



SK－1（1）、SK－4（2・7・8・10）、第9層（15・17・19・20・22）、第10層（23）出土遺物

図版四



第9層（21・24・26～28・32・33）出土遺物

Ⅳ　東郷遺跡第49次調査（ＴＧ95－49）

例　言

1．本書は、大阪府八尾市光町２丁目20番、22番で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する東郷遺跡第49次調査（ＴＧ95－49）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋727－３号　平成７年３月16日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が岡田徳一氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成７年６月14日から６月23日（実働８日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は140㎡を測る。調査においては垣内洋平・岸田靖子・西田真紀が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成８年９月30日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－沢村妙子　図面トレース－北原清子。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……43

2．調査概要……44

　1）調査の方法と経過……44

　2）基本層序……46

　3）検出遺構と出土遺物……46

　4）出土遺物観察表……52

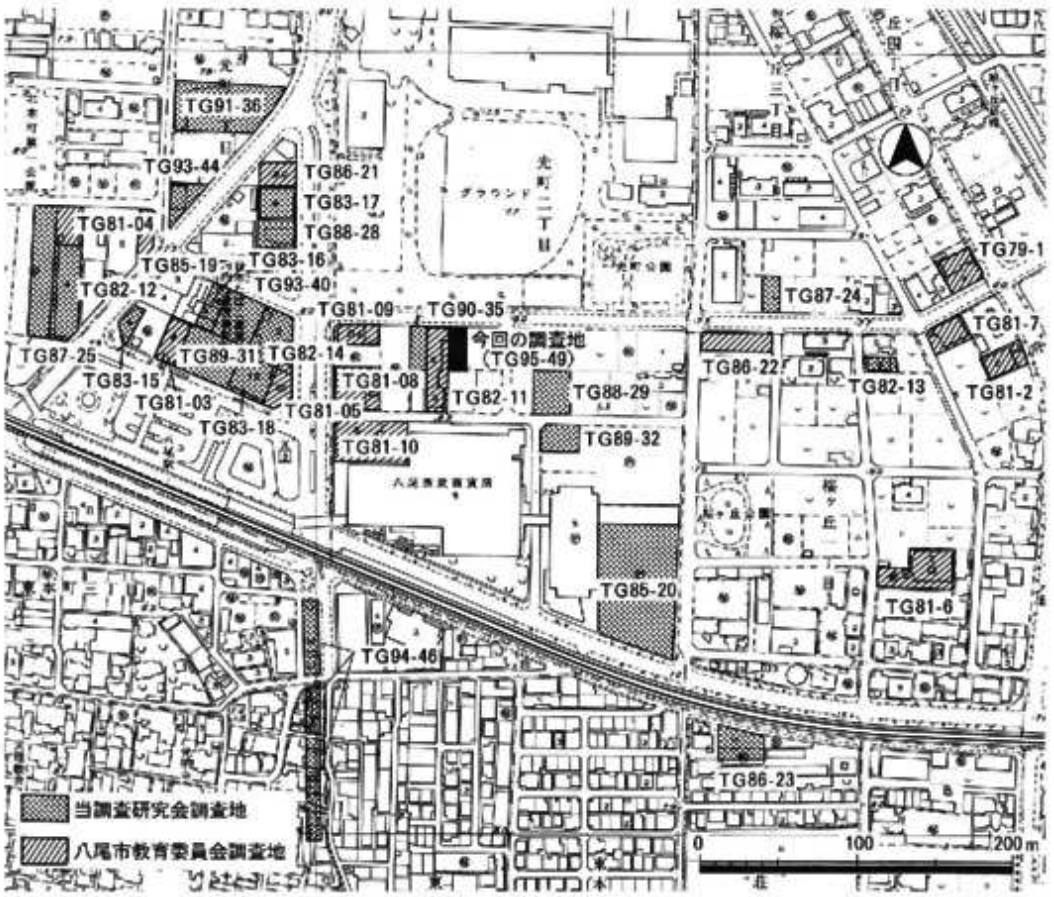
3．まとめ……53

Ⅳ　東郷遺跡第49次調査（ＴＧ95－49）

1．はじめに

東郷遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地の標高８～９ｍに展開する弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市中央部の本町１・７丁目、北本町２丁目、東本町１～５丁目、光町１・２丁目、桜ケ丘１～３丁目、荘内町１・２丁目一帯の東西1.3km、南北0.9kmがその範囲とされている。東郷遺跡周辺では南東に小阪合遺跡、南に成法寺遺跡、西に久宝寺遺跡、北に萱振遺跡が位置している。

本遺跡は、昭和46年に八尾市東本町２丁目の光明寺東側道路で行われた水道工事に際して、奈良時代の墨書人面土器が出土したことに端緒を発している。その後、発掘調査により遺跡の実態が明らかにされるのは、昭和55年の近鉄八尾駅の現地点への移転以降のことで、駅の北部を中心に急速な市街化の進行に伴う開発行為が顕在化したことによるものである。さらに近年においては、やや沈静化した近鉄八尾駅北部から開発行為が周辺に拡大する傾向が顕著で、発



第1図 調査地周辺図

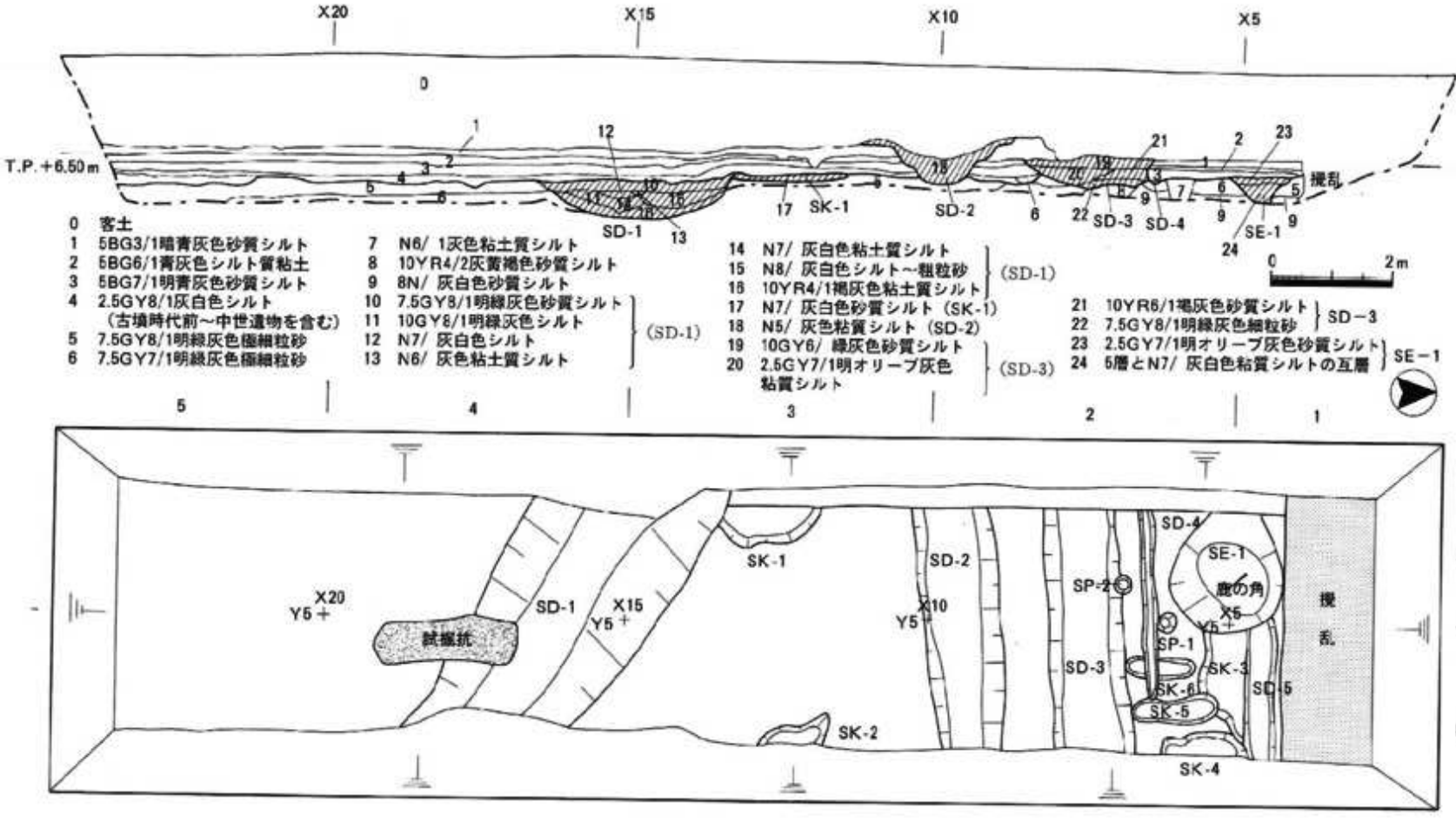
掘調査件数も増加しており、八尾市域遺跡のなかで最も発掘調査件数が多く、遺跡の実態が比較的明らかな遺跡の一つと認識されている。これまでの発掘調査で本遺跡が、弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが確認されている。なかでも、近鉄八尾駅の北部を中心とする古墳時代前期（庄内式期・布留式期）～古墳時代後期に至る集落の動態や、遺跡の東部で検出された飛鳥時代後半（７世紀中葉）の創建とされる衆郷廃寺の存在は特筆に値するものである。

このような情勢下、八尾市光町２丁目20、22番において、岡田徳一氏から共同住宅の建設を行う旨の届出が市教育委員会文化財課へ提出された。申請地点は遺跡推定範囲ほぼ中央部に位置し、西隣では昭和57年度に行った第11次調査（ＴＧ82－11）で、古墳時代前期の竪穴住居３棟を中心とする居住域の一部が検出されており[註1]、これらの居住域の広がりが申請地にまで及ぶものと推定された。これらの既往調査の結果から、市教育委員会では、当該地の掘削工事に際して発掘調査が必要であると判断し、事業者と協議を重ねた結果、工事部分で遺跡が破壊される部分を対象として、発掘調査を実施することが両者間で合意された。以上の経緯を踏まえ、発掘調査を実施するに至ったもので、八尾市教育委員会・事業者・（財）八尾市文化財調査研究会の三者協定に基づき、（財）八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて発掘調査を行うことになった。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に先立って実施したもので、建築予定建物に沿って東西幅６ｍ、南北幅23ｍの調査区を設定した。なお、調査地内での残土処理の関係から調査区を南区と北区に二分する方法をとった。調査地の地区割りについては、調査地の北西隅のＸ０・Ｙ０地点を基点として東西10ｍ、南北25ｍにわたって設定した。一区画の単位は５ｍ四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ・Ｂ）、南北方向は算用数字（北から１～５）で示し、地区の表示は１Ａ～５Ｂ地区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～Ｘ25）・南北線（Ｙ０～Ｙ10）の交点の数値を使用した。掘削に際しては、現地表下約1.7ｍ前後までを機械掘削した後、以下の0.3ｍについては、人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、現地表下1.7～1.9ｍ（標高6.3～6.1ｍ）付近に存在する第５層上面で弥生時代中期の土坑１基（ＳＫ－１）、古墳時代前期（庄内式期）の土坑１基（ＳＫ－３）・溝１条（ＳＤ－１）、鎌倉時代の井戸１基（ＳＥ－１）、近世の土坑４基（ＳＫ－２・ＳＫ－４～ＳＫ－６）・溝４条（ＳＤ－２～ＳＤ－５）・小穴２個（ＳＰ－１・２）を検出した。遺物は遺構内および第２層～第４層からコンテナ箱１箱程度が出土している。



第２図　検出遺構平断面図

2）基本層序

調査地点付近は今回の調査でも明らかなように、弥生時代以降の堆積が比較的緩慢な地域であったようで、客土を除けば旧耕土以下約0.6m付近に弥生時代中期の遺構の存在が認められている。このような堆積状況や、各時期の遺構密度が粗いことも相俟ってこの地点では良好な包含層を形成するに至っていない。ここでは、普遍的に存在した5層を基本層序とした。

第0層　客土。層厚1.4m前後。上面の標高はT.P.＋7.6m。

第1層　5BG3／1暗青灰色砂質シルト。層厚0.1～0.2m。旧耕土。

第2層　5BG6／1青灰色シルト質粘土。層厚0.1m。床土。

第3層　5BG7／1明青灰色砂質シルト。層厚0.1～0.25m。酸化鉄が斑点状に沈着している。中世～近世の遺物が極小量含まれている。

第4層　2.5GY8／1灰白色シルト。層厚0.1～0.2m。古墳時代前期～中世に比定される遺物が極小量含まれている。

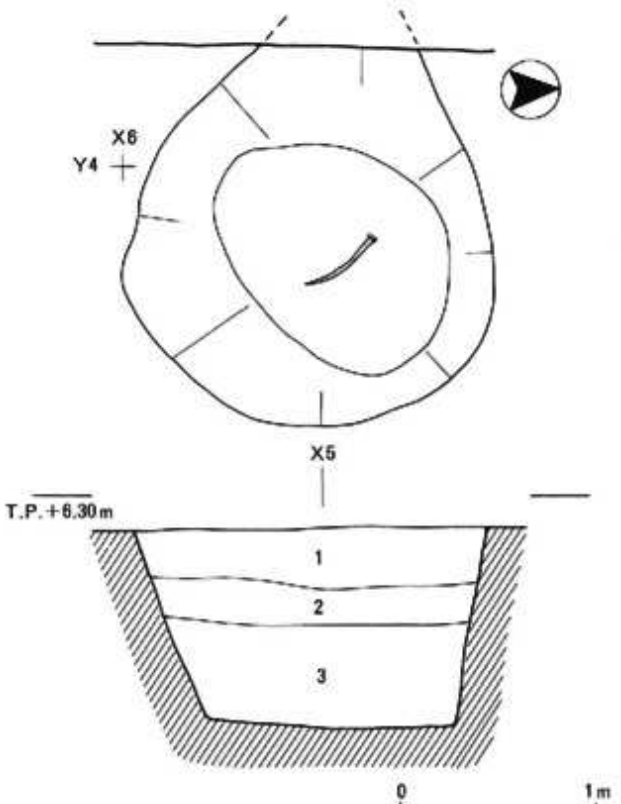
第5層　7.5GY8／1明緑灰色極細粒砂。層厚0.2～0.3m。遺構検出面。

3）検出遺構と出土遺物

井戸（ＳＥ）

ＳＥ－１

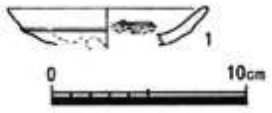
調査区北西部で検出した。上面の形状が東西方向に長い楕円形を呈するもので、西部は調査区外に至るため不明である。検出部分で東西径1.95m、南北径1.85m、深さ１.0mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は不均質な3層がほぼ水平に堆積しており、最下層は粗粒砂が優勢な湧水層に達している。遺物は最下層から鹿の角が出土したほか、上層からは土師器小皿、瓦器小皿の小片が極小量出土している。時期的には鎌倉時代に比定されるものと推定されるが



1　N8/ 灰白色砂質シルトと10YR5/2灰黄褐色粘土質シルトの互層
2　N8/ 灰白色砂質シルトと2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土質シルトの互層（土師器小皿出土）
3　N7/ 灰白色シルトとN7/ 灰白色粘土質シルトの互層（鹿の角出土）

第3図　ＳＥ－１平断面図

詳細は不明である。井戸としたが、埋土の堆積状況からみれば掘削直後に埋め戻されたようで、しかも鹿の角が最下部から出土していることから、井戸以外の性格を有する遺構の可能性が考えられる。そのうち図化し得た遺物は瓦器小皿１点（１）である。小片のため不明な点が多いが、形態からみておおむね12世紀後半前後の所産と推定される。



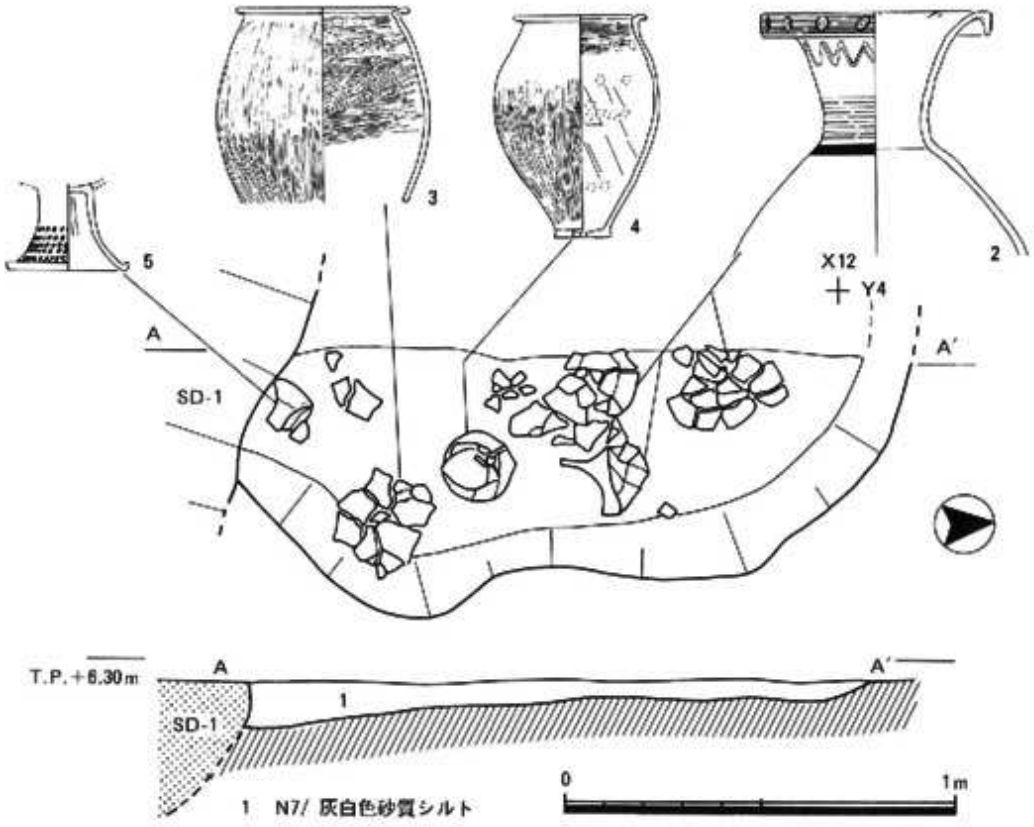
第４図　ＳＥ－１出土遺物実測図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

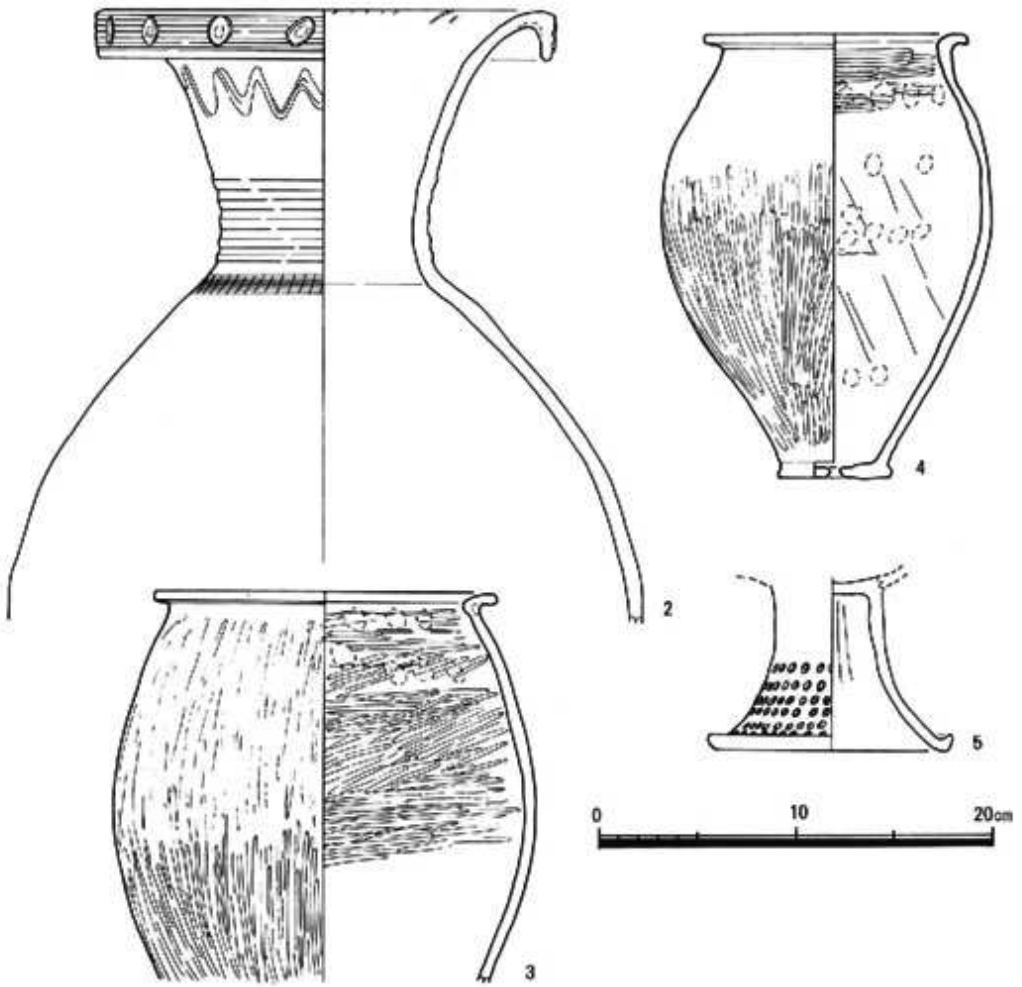
３Ａ地区で検出した。南部がＳＤ－１に切られており、西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.7m、南北幅1.6m、深さ0.1mを測る。埋土は灰白色砂質シルトの単一層である。遺物は弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）に比定される壺・甕・高杯等が出土している。全て底面に張り付く形で出土しており、一括性の高い土器群と言える。

そのうち図化し得た遺物は広口長頸壺１点（２）、甕１点（３）、底部有孔甕１点（４）、台付鉢（５）の４点（２～５）である。（２）は大型の広口長頸壺である。全体に保存状況は不



第５図　ＳＫ－１平面図および遺物出土状況

良であり、器壁面の剥離が著しい。口縁部の形態は端部が上部に垂下するもので、端面は多条の凹線文と円形浮文で飾られている。頸部外面は下部が4条からなる幅広の凹線文、上位が波状文が施文されているほか、頸部内面の上半は不明瞭ではあるが列点文が一周するものと推定される。体部外面上半は簾状文が施文されているが、以下については器面剥離のため不明である。焼成は不良で赤褐色の色調を呈する。形態や施文方法の特長や、胎土中に結晶片岩を含むことから紀伊地域のなかの紀北産と考えられる。（3）は大型甕で底部は欠損する以外は約1／2が残存している。体部外面は保存状態は不良で器壁面の調整は不明瞭である。生駒西麓産である。（4）は中型の底部有孔甕で一部が欠損するものの、ほぼ全容を知る得ることが可能である。口径13.3cm、器高22.8cm、体部最大径16.5cm、底部径5.5cmを測る。生駒西麓産である。



第6図 ＳＫ－１出土遺物実測図

（5）は台付鉢の脚部で1／2以上が残存している。裾部径11.5cm、脚部高8.4cmを測る。裾部外面の中位以下に円形竹管文を多用した施文が行われている。土器群の時期については、生駒西麓産の（3～5）が広瀬和雄氏による亀井遺跡を中心とした弥生土器編年の中期6に対比され、寺沢薫・森井貞雄両氏による河内地域の弥生土器編年の河内Ⅳ－3様式に対応するものと考えられる。なお、紀北産とされる広口長頸壺（2）が上井孝之氏編年[註2]の紀伊Ⅳ－1様式に対比され[註3]、両地域の編年の併行関係においても矛盾するものでない。

SK－2

3B地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.3m、南北幅1.1m、深さ0.07mを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SK－3

調査区の北部で検出した。検出部分では不定形を呈するもので、北部がSD－5、西部がSE－1、南部がSK－5に切られている。検出部分で東西幅1.75m，南北幅0.75m、深さ0.12mを測る。埋土は灰黄褐色シルトの単一層である。遺物は古墳時代前期の土器類の小片が極少量出土している。

SK－4

SK－3の東部で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.35m、南北幅1.4m、深さ0.1mを測る。埋土は明オリーブ灰色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

SK－5

南北方向に溝状に伸びるもので、北部でSK－3を切っており、南西部でSD－4に切られている。東西幅0.35m、南北幅1.4m、深さ0.07mを測る。埋土は明オリーブ灰色シルトの単一層である。遺物は弥生土器・須恵器等の小片が極少量出土している。

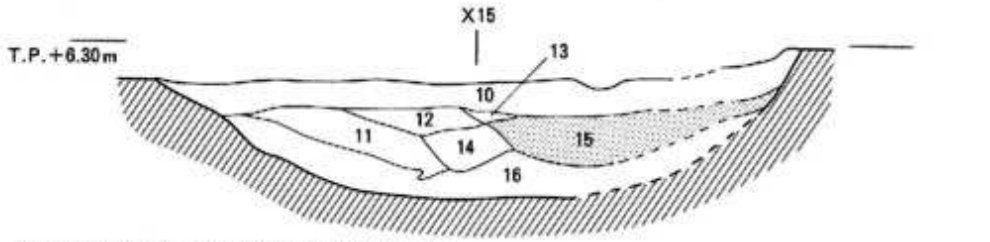
SK－6

SK－5の西側で検出した。SK－5と同様、南北方向に溝状に伸びるもので、南部の一部がSD－4に切られている。東西幅0.3m、南北幅1.1m、深さ0.07mを測る。埋土は明オリーブ灰色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

溝（SD）

SD－1

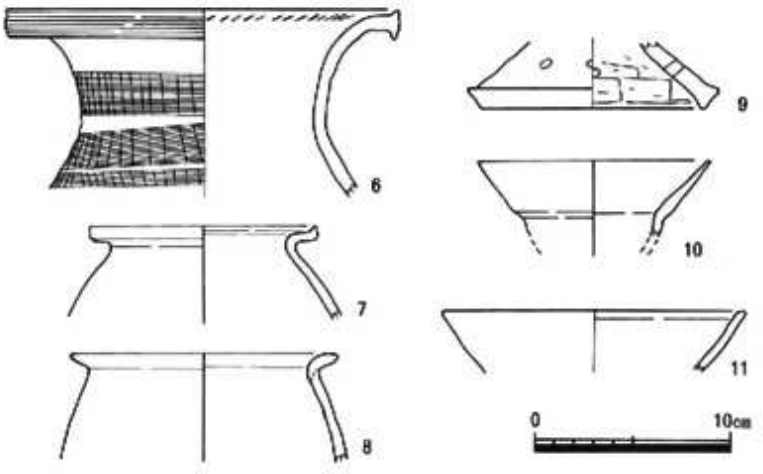
調査地の中央部から南部で検出した。北西－南東方向に伸びるもので、検出長4.4m、幅2.75m、深さ0.6mを測る。断面の形状は逆台形で底部はほぼ平坦である。埋土は7層（第10層～第16層）から成るもので、第15層で粗粒砂の堆積が認められる以外はシルト～粘土質シルトが優勢な土層が堆積している。遺物は第16層から弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の土器



10 7.5GY8/1明緑灰色砂質シルト（布留式甕出土）
11 10GY8/1明緑灰色シルト
12 N7/ 灰白色シルト
13 N6/ 灰色粘土質シルト
14 N7/ 灰白色粘土質シルト
15 N8/ 灰白色シルト～粗粒砂（小型丸底壺出土）
16 10YR4/1褐灰色粘土質シルト

第7図 SD－1西断面図

類が出土した他、第10層・第15層からは古墳時代前期（布留式古相）の土器類が極少量出土している。なお、西側に隣接する地点で行われた第11次調査（TG82－11）で検出されたSD－1と同様の溝と推定される。図化した遺物は弥生土器－壺1点（6）、甕2点（7・8）、高杯1点（9）、土師器－小型丸底壺1点（10）、布留式甕1点（11）の6点である。弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）に比定される土器群は全て最下層の第16層から出土した。（6）は短い頸部が外方向に開く広口壺である。上下に拡張する口縁部端面に3条の凹線文と口縁部内面上半に列点文が施文されているほか、頸部中位から体部にかけては簾状文が施文されている。生駒西麓産である。（7）は口縁部から体部上半にかけて残存する甕の小片である。形態的には短く伸びる頸部から屈折した後、端部が上方に小さく拡張される甕である。生駒西麓産である。（8）は口縁部が屈折するもので、端部は尖り気味に終わる。器壁面が風化しており調整等は明確でない。生駒西麓産である。（9）は高杯脚部の小片である。非生駒西麓産である。古墳時代前期（布留式古相）のものは小型丸底壺（10）が第15層、布留式甕（11）が第10層から出土している。（10）は小型丸底壺の口縁部から体部にかけての小片である。残存部分から、半円形の体部に大きく開く口縁部が付く形状が想定される。中河内における古式土師器の分類の小型壺B3に[注4]あたり布留Ⅱ期に盛



第8図 SD－1出土遺物実測図

行する器種である。(11) は布留式甕の口縁部の小片である。甕F_2に分類されるもので、(10) と同時期に盛行するものである。2点共にローリングを受けており器面調整は不明である。

SD－2

2・3A地区から2B地区にかけて東西方向に直線的に伸びるものである。構築面は第1層で、客土が行われた近年まで機能を果たしていた溝である。断面の観察では北側に上幅で約0.4mを測る里道が付随していたようである。また、この溝の両岸付近には流路方向に沿って木杭が多数打たれていた。調査では最下部を検出したに過ぎないが、断面部分では幅2.65m、深さ0.7mを測る。埋土は灰色粘質シルトの単一層である。遺物は須恵器、瓦器、国産陶器・磁器等の小片が少量出土した。

SD－3

SD－2の北側で検出した。SD－2に並行して伸びるもので、SD－2同様、第1層を構築面としている。なお、SD－3の廃絶後にSD－2が開削されたことが断面観察から明らかである。断面部分での数値は幅2.1m、深さ0.5mを測る。埋土は4層から成る。遺物は須恵器、土師器、瓦器、国産磁器等の小片が少量出土している。

SD－4

SD－3の北側で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長3.1m、幅0.2m、深さ0.05mを測る。断面形状が浅いU字状を呈するもので耕作に関連した小溝と推定される。埋土は明青灰色砂質シルトである。遺物は陶器の小片が極少量出土したが時期は不明である。

SD－5

調査区の北部で検出した。南部でSK－3を切り、西部ではSE－1に切られている。検出長2.2m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は明オリーブ灰色シルトである。遺物は出土していない。

小穴（SP）

SP－1

SE－1の南東部で検出した。円形を呈するもので、径0.3m、深さ0.27mを測る。埋土は明青灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。

SP－2

2A地区で検出した。南部でSD－3を切っている。円形を呈するもので、径0.25m、深さ0.05mを測る。埋土は青灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

4）出土遺物観察表

・凡例　粒径－L 1㎜以上　M0.5～1㎜未満　S0.5㎜未満　量－◎多量　○多い　△少ない　▲希少　赤－赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( ) 復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素地	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成 保存	残存率	備考 地区
1		土器 小皿	(10.3) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部指頭圧成形後ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヨコ方向のヘラミガキ。	暗灰色 暗灰色～灰白色	精緻	○S						良好	口縁部 1/12	SE－1
2	三	弥生土器 広口 長頸壺	23.3 － － 頸部高13.1 頸部径11.0	外面：口縁部端面4条の凹線文。頸部上半波状文、下半4条の回線文。体部上位羽状文、以下器壁剥離のため調整不明。 内面：口縁部上半刷毛目文。以下器壁剥離のため調整不明。	赤褐色 〃	やや粗	◎S－L	○S－L				片◎L	やや不良 器面の剥離著	口縁部～体部 1/3	紀伊産 SK－1
3	三	弥生土器 壺	(17.4) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半風化、下半タテ方向のヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヨコ方向のヘラミガキ。	茶褐色～赤褐色 赤褐色	やや粗	◎S－L	○L	○S	◎S－M			良好 体部上半風化	口縁部～体部 1/2	生駒西麓産 SK－1
4	三	弥生土器 底部台孔 壺	13.3 22.8 5.6 体部最大径 16.5	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半器面剥離、中位以下タテ方向のヘラミガキ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部上位ヨコ方向のヘラミガキ、以下板ナデ。底部ナデ。	赤褐色 〃	やや粗	○S－L	△S	○S	◎S－L			良好	2/3 以上	生駒西麓産 SK 1
5	三	弥生土器 台付鉢	脚部高 8.4 脚部径11.5	外面：脚部ナデ。裾部中位以下引彫竹管文。 内面：脚部ナデ。裾部ナデ。	茶褐色 〃	やや粗	○S－L	△S－M	△S	◎S－L			良好	脚部 2/3	生駒西麓産 SK－1
6	三	弥生土器 広口壺	(20.1) －	外面：口縁部端面3条の凹線文。頸部3条の羽状文。 内面：口縁部上半刷毛目文。口縁部～体部ナデ。	淡褐灰色 灰白色	やや粗	○S－L	○S－L	△S	○S			やや不良 摩滅	口縁部 1/6	生駒西麓産 SD－1 第16層
7	三	弥生土器 壺	(11.6) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	茶褐色 茶褐色～黒褐色	やや粗	△S		△S	◎S－L			良好	口縁部 1/12	生駒西麓産 SD－1 第16層
8	三	弥生土器 壺	(13.7) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	赤褐色 淡茶灰色～黒灰色	粗	◎S－L	△S	△S	○S－M			やや不良	口縁部 1/6	生駒西麓産 SD－1 第16層
9	三	弥生土器 高杯	－ － 脚径(11.4)	外面：脚部ヨコナデ。 内面：脚部ケズリの後ナデ。	赤褐色～灰白色 淡黒灰色	やや粗 良好	○S－M	○S	▲S		▲S		良好	脚部 1/6	スカシ孔2個残 SD－1
10	三	土師器 小型丸底 壺(小型 壺B1)	(11.7) － －	外面：器面摩滅のため調整不明。 内面：器面摩滅のため調整不明。	赤褐色 淡赤褐色		○S－M					赤○S	良好 全体に摩滅	口縁部 1/4	SD－1第15層
11		土師器 有段式甕 (甕F1)	(16.6) －	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色 淡赤褐色～淡茶褐色	やや粗	○S－L	○S－L	○S			赤○S	良好 全体に摩滅	口縁部 1/12	SD 1 第10層

3．まとめ

今回の調査では、弥生時代中期後半、古墳時代前期、鎌倉時代、近世に比定される遺構・遺物を検出した。

弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）に比定されるものとしては、ＳＫ－１がある。東郷遺跡内では、包含層や河川内からの出土遺物を除けば、この時期の遺構としては本調査地の西約200m地点で実施された第15次調査[註5]（ＴＧ83－15）の土坑２基が唯一であった。今回、新たにこの時期の資料を加えた結果、広範囲にわたって集落が存在する事実が明らかになった。しかし、既往調査の成果から推定すれば、遺構分布は散発的でしかも限定されていることから、短期間で小規模な集落であったと言わざるを得ない。なお、ＳＫ－１からは生駒西麓産の土器群と共に紀伊産の広口長頸壺（２）が出土しており、交流の一端や土器の併行関係を知るうえで貴重な資料を提供している。

古墳時代前期の遺構はＳＤ－１、ＳＫ－３が検出されたのみであり、遺物包含層からもこの時期の遺物出土は希薄であった。本調査地の西側に隣接する地点で行われた第11次調査[註6]（ＴＧ82－11）では竪穴住居を中核とする遺構群が検出されている事実からすれば対照的であり、当調査地付近がこの時期の集落の東端を占めていたものと推定すれば、ＳＤ－１が集落を区画する溝であった可能性が高い。

鎌倉時代の遺構としては、ＳＥ－１がある。井戸としたが、掘削直後に埋め戻されたことが堆積状況から明らかであり、さらに最下層に鹿の角が埋置されている等から井戸以外の機能を果たした遺構の可能性が高い。

近世時期の遺構としては、耕作に関連した遺構が中心で、中世時期以降の当地における土地利用を示すものとして注目される。

註記

註１　高萩千秋　1989「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度 Ⅰ東郷遺跡（第11次～第16次・第18次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告17』（財）八尾市文化財調査研究会

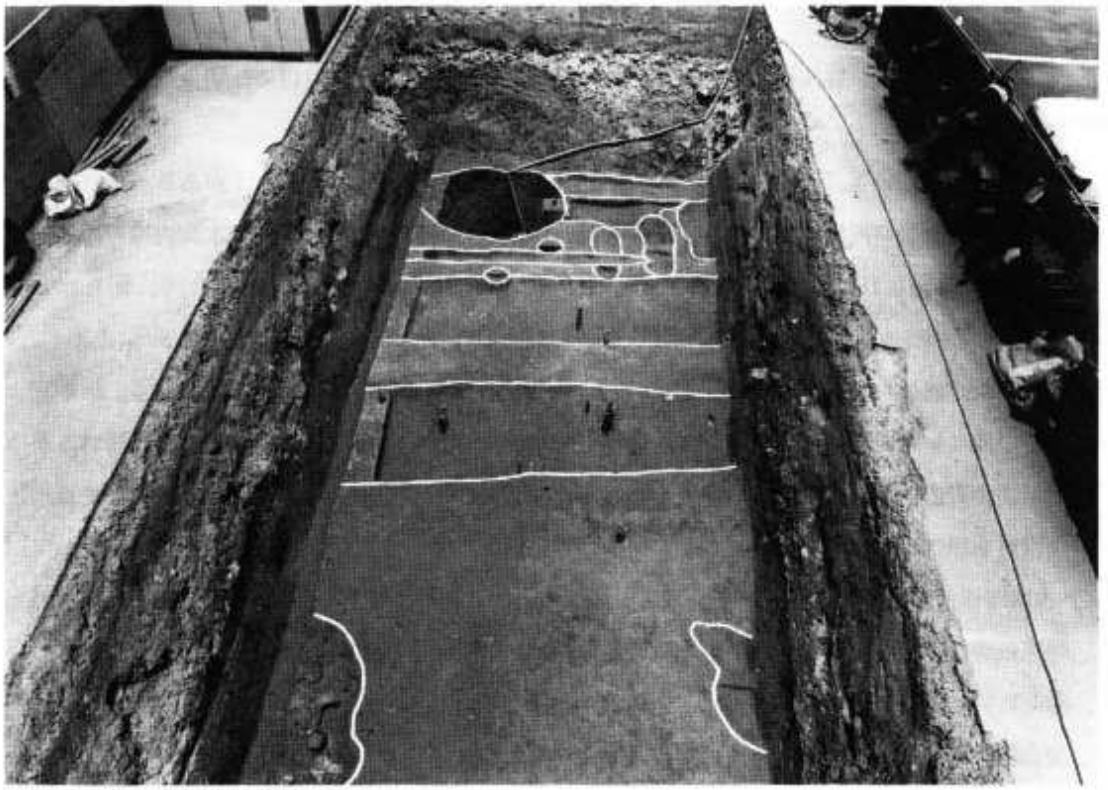
註２　寺沢 薫・森井貞雄　1989「各地域の様式 1河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社

註３　土井孝之　1989「各地域の様式 3紀伊地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社

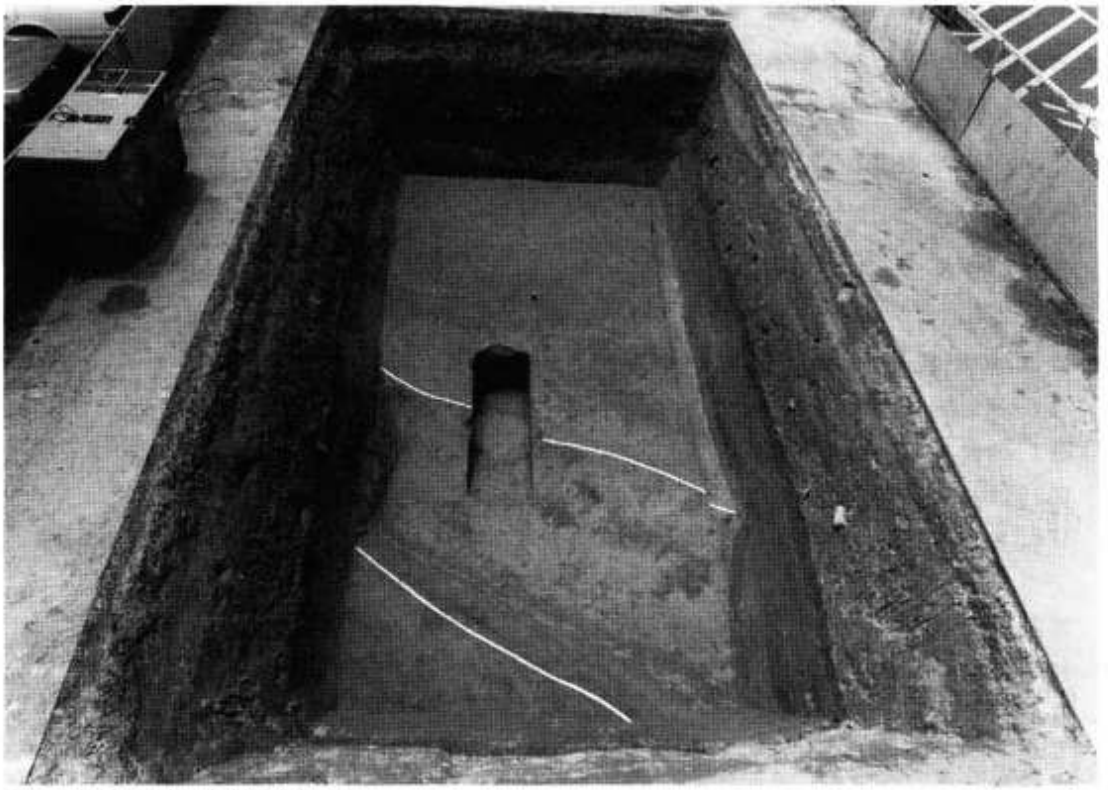
註４　服田昌則　1993「八尾市埋蔵文化財調査報告Ⅱ久宝寺遺跡（第１次調査）」『（財）八尾市文化財調査報告37』（財）八尾市文化財調査研究会

註５　前掲註１

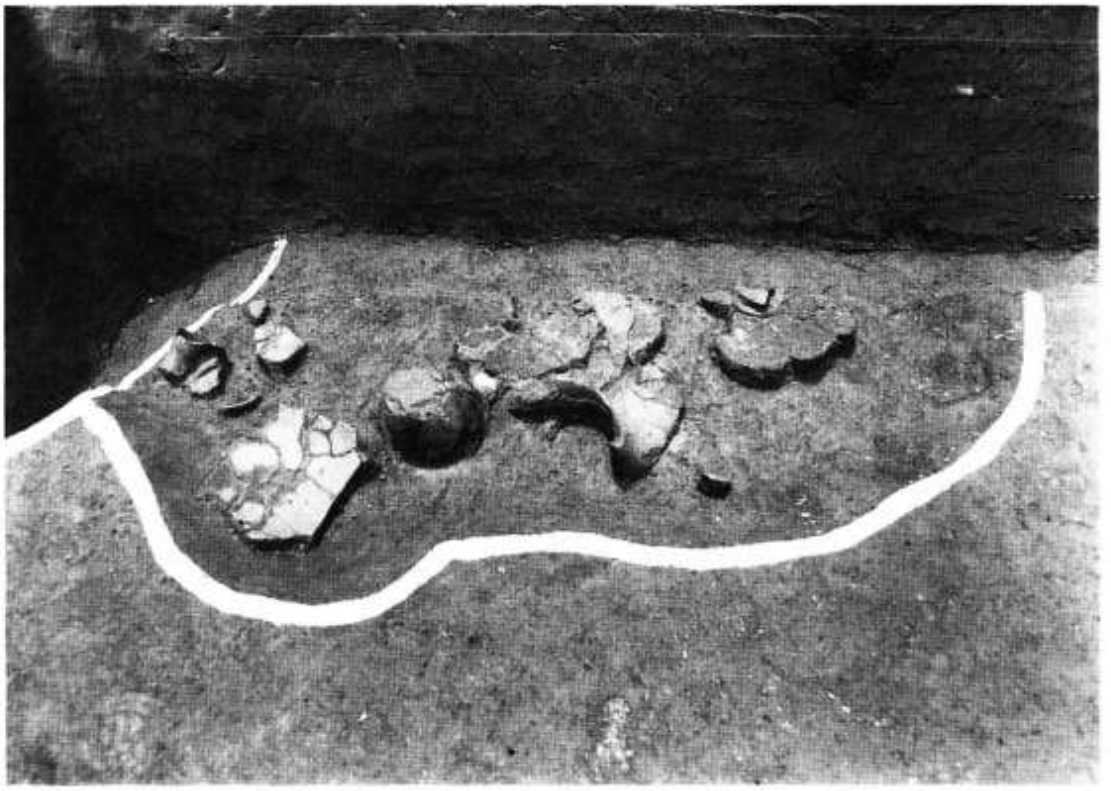
註６　前掲註１



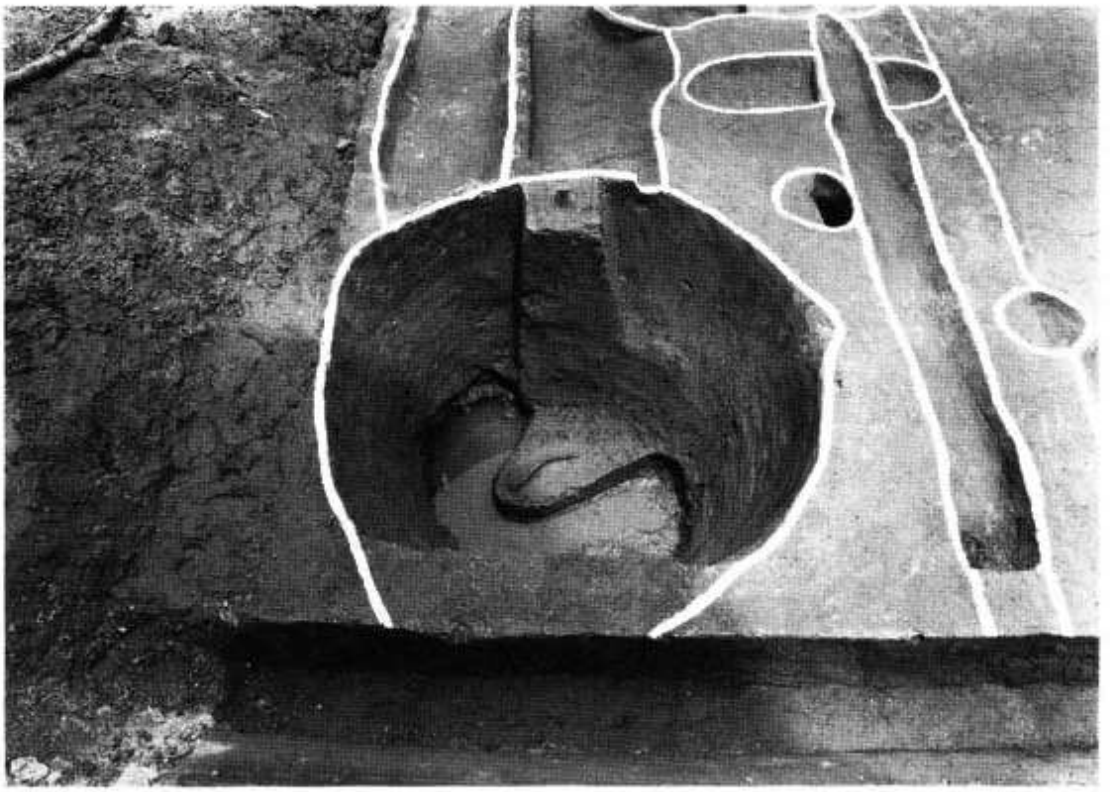
調査区北部遺構検出状況（南から）



調査区南部遺構検出状況（北から）

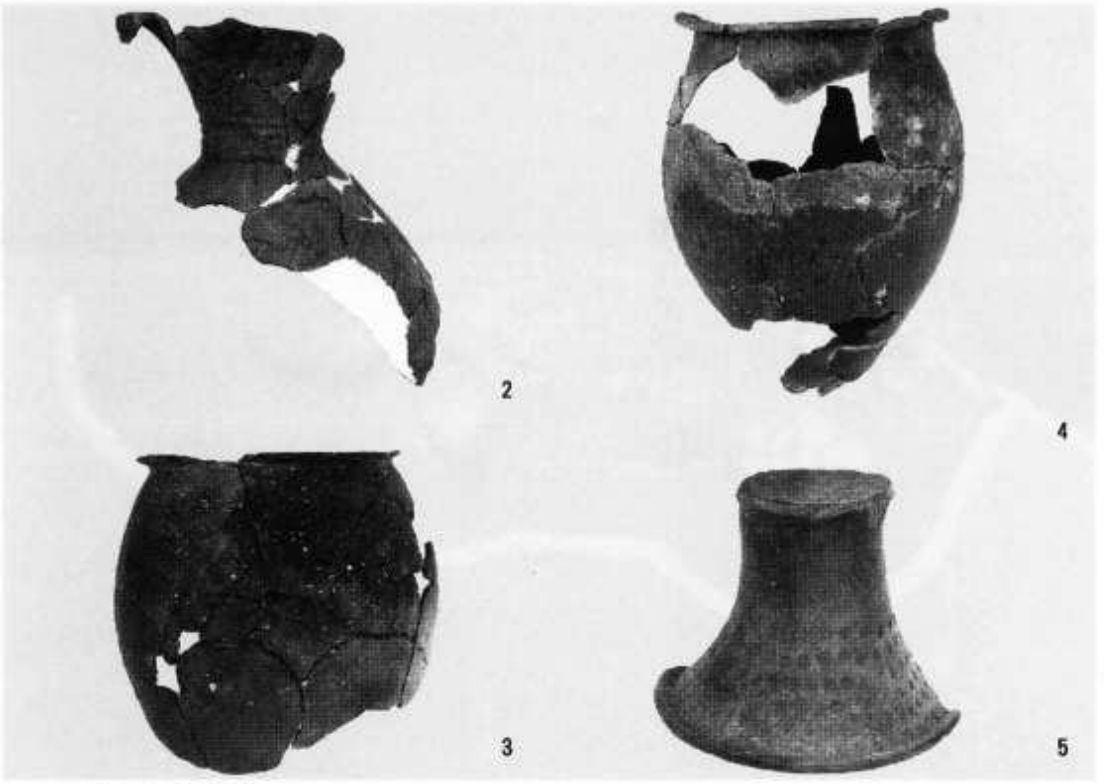


ＳＫ－１　検出状況（東から）

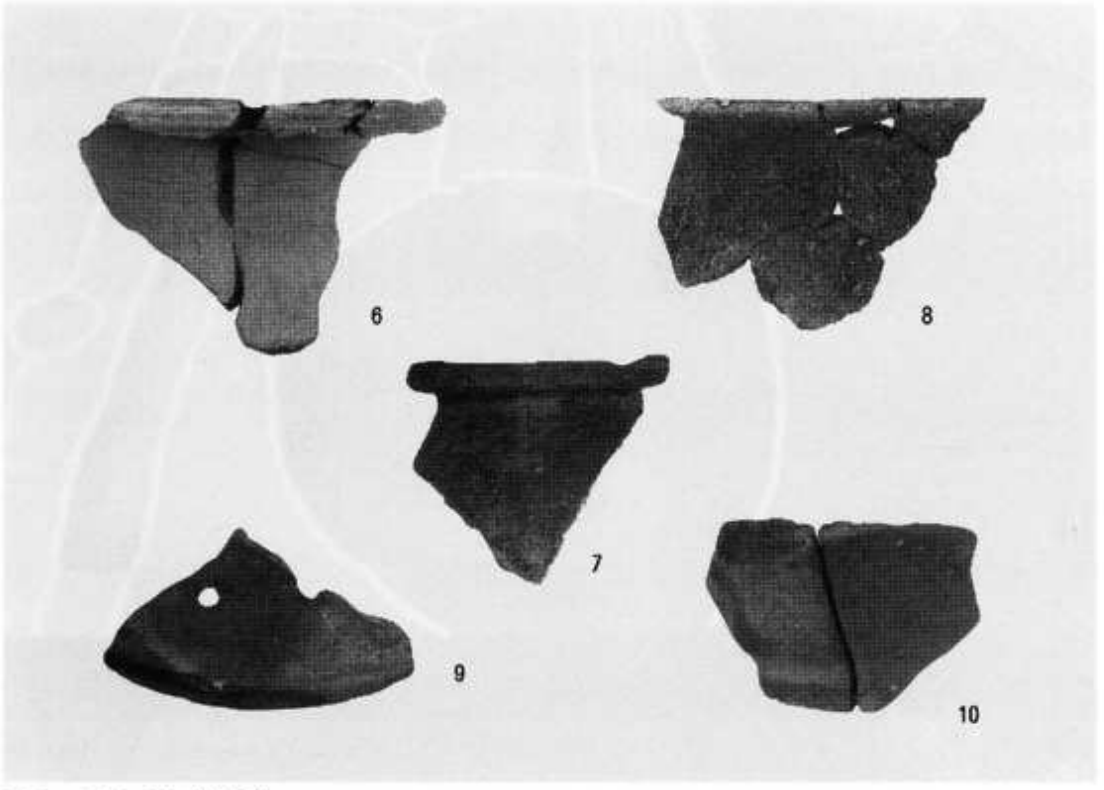


ＳＥ－１　検出状況（西から）

図版三



SK－1（2～5）出土遺物



SD－1（6～10）出土遺物

V　東郷遺跡第51次調査（ＴＧ95－51）

例　言

1．本書は大阪府八尾市東本町４丁目26番地－１の一部,35番地－３で実施した事務所新築工事に伴う発掘調査である。

1．本書で報告する東郷遺跡第51次調査（ＴＧ95－51）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋683－３号　平成７年３月13日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が桐山二郎氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年３月19日から３月28日にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は175㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中村百合・西岡千恵子・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレース－中村・西岡・市森が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……57

2．調査概要……58

　1）調査の方法と経過……58

　2）基本層序……59

　3）検出遺構と出土遺物……59

　4）遺構に伴わない出土遺物……63

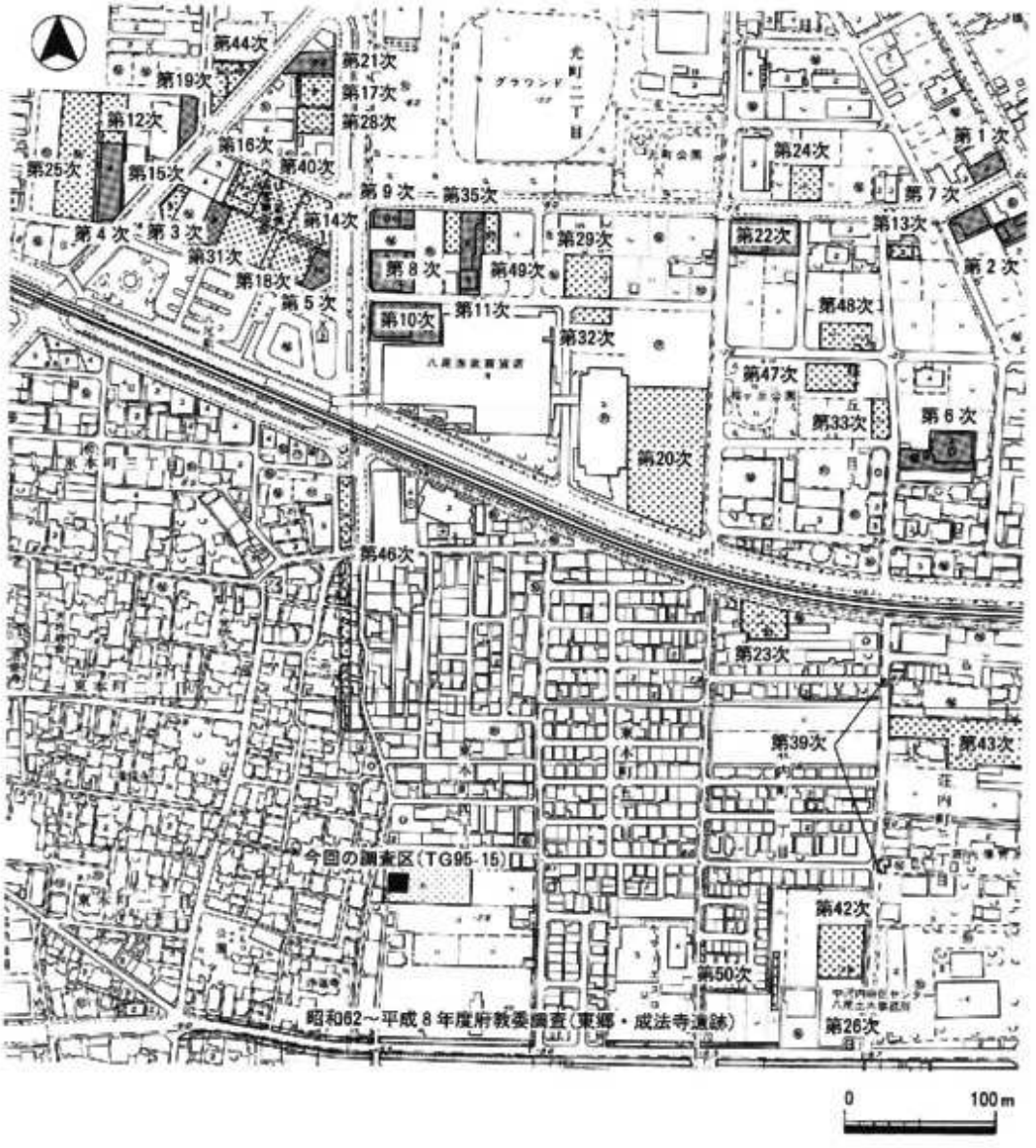
　5）出土遺物観察表……64

3．まとめ……65

V　東郷遺跡第51次調査（TG95－51）

1．はじめに

東郷遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では東本町1～5丁目、北本町2丁目、光町1・2丁目、桜ヶ丘1～4丁目、荘内町1・2丁目一帯にあたる。地形的には旧大和川の主流であった玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡の周辺には西に久宝寺遺跡、南に成法寺遺跡、北に萱振遺跡、南東に小阪合遺跡が隣接している。



第1図　調査地位置図及び周辺図

当遺跡内では現在までに八尾市教育委員会および当調査研究会によって、50件の発掘調査を実施している。その結果、弥生時代中期～近世に至る複合遺跡であることが判明している。特に古墳時代初頭～前期の集落構成に関する遺構や他地域との活発な交流を示す遺物の出土などが確認されている。

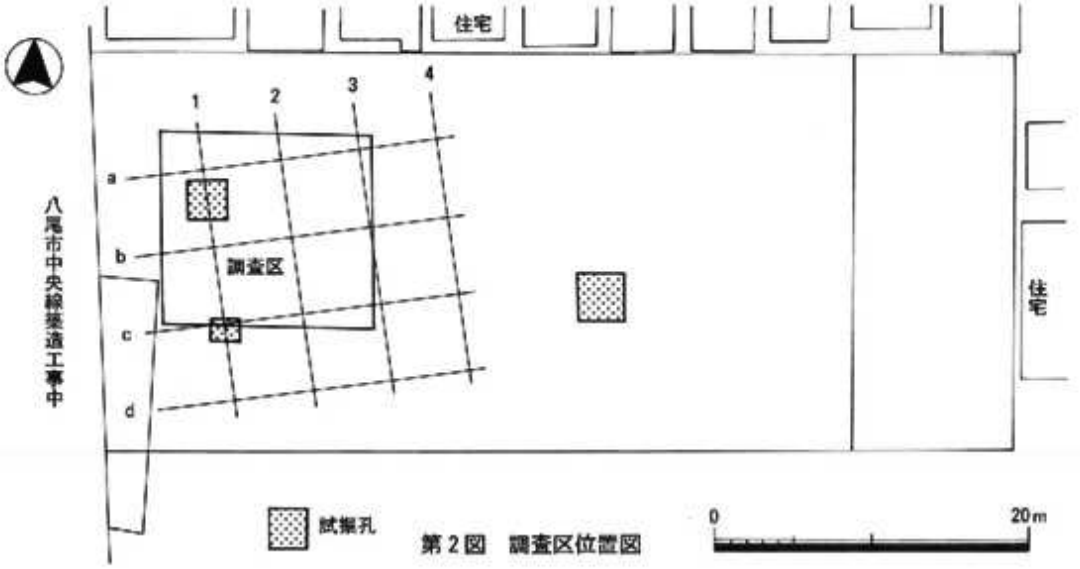
今回の発掘調査は当遺跡範囲の南部付近に位置する東本町４丁目内の貸事務所新築工事に伴なうもので、当調査研究会が当遺跡内で実施する第51次調査である。調査地の近隣では、平成６年度に実施した当調査研究会第46次調査（ＴＧ94－46）が北西側（約100ｍ）位置する。その調査では古墳時代前期～近世に比定される土坑・溝等を検出している。また、遺跡名が異なるが南側（約100ｍ）の成法寺遺跡での調査では、大阪府教育委員会が昭和62年度から府道平野高安線拡幅工事に伴なう発掘調査を断続的に実施している。その結果、弥生時代中期の方形周溝墓（甕棺）、古墳時代前期の集落遺構・周溝墓などを検出している。

２．調査の概要

１） 調査の方法と経過

今回の調査は、建物基礎工事によって破壊される部分に縦12.5ｍ×横14ｍ（面積約175㎡）調査区を設定した。掘削の方法は市教委の遺構確認調査結果をもとに、現地表（T.P.＋8.6ｍ）下0.4ｍ前後の土層を機械により排除した後、以下0.15ｍ前後の土層について人力掘削および精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。さらに、調査対象面の調査が終了後、調査区中央付近に下層確認トレンチを設定し、深部の地層状況を確認した。

地区割りについては、西に任意の基準点を設定し、南北軸を磁北に合わせ、調査区範囲を包括できる南北20ｍの範囲に５ｍ角の方眼を作成し、記録保存を実施した。



第２図　調査区位置図

2）　基本層序

第1層　耕土（層厚15cm）。耕作土である。調査前まで水田稲作としており、周辺地より、0.8m前後低い。

第2層　灰色細砂混粘質土（層厚10cm前後）。耕作土の床土。

第3層　灰色粘質土（層厚5～40cm）。褐色の斑点がみられる。中世の耕作土である。南西部が厚く堆積する。

第4層　明褐灰色粘質土（層厚30cm前後）。調査区の北東部のみでみられる土層である。

第5層　茶褐色粘質土（層厚0～10cm）。古墳時代初頭の包含層である。調査区の南西部では第3層により削平されており、存在しない。

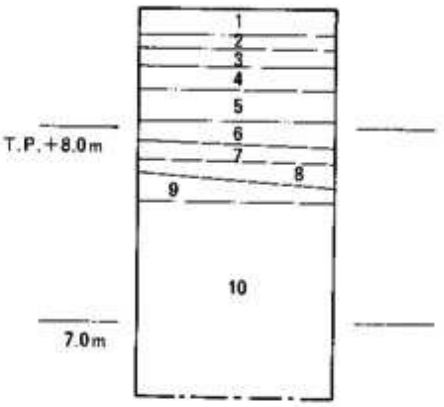
第6層　青灰色粘質土～淡茶灰色粘質土（層厚15cm前後）。古墳時代初頭～中世の遺構検出面。

第7層　淡茶灰色粘質シルト（層厚15cm前後）。

第8層　青灰色シルト（層厚10～20cm）。

第9層　灰色粘土（層厚10～20cm前後）。粘着性の強い粘土である。

第10層　青白色微砂（層厚100cm以上）。あまり不純物を含まないきれいなシルト層である。下部付近から地下水が吹き出し、トレンチの壁面崩壊が著しくなり、これより以下の土層についての観察はできなかった。

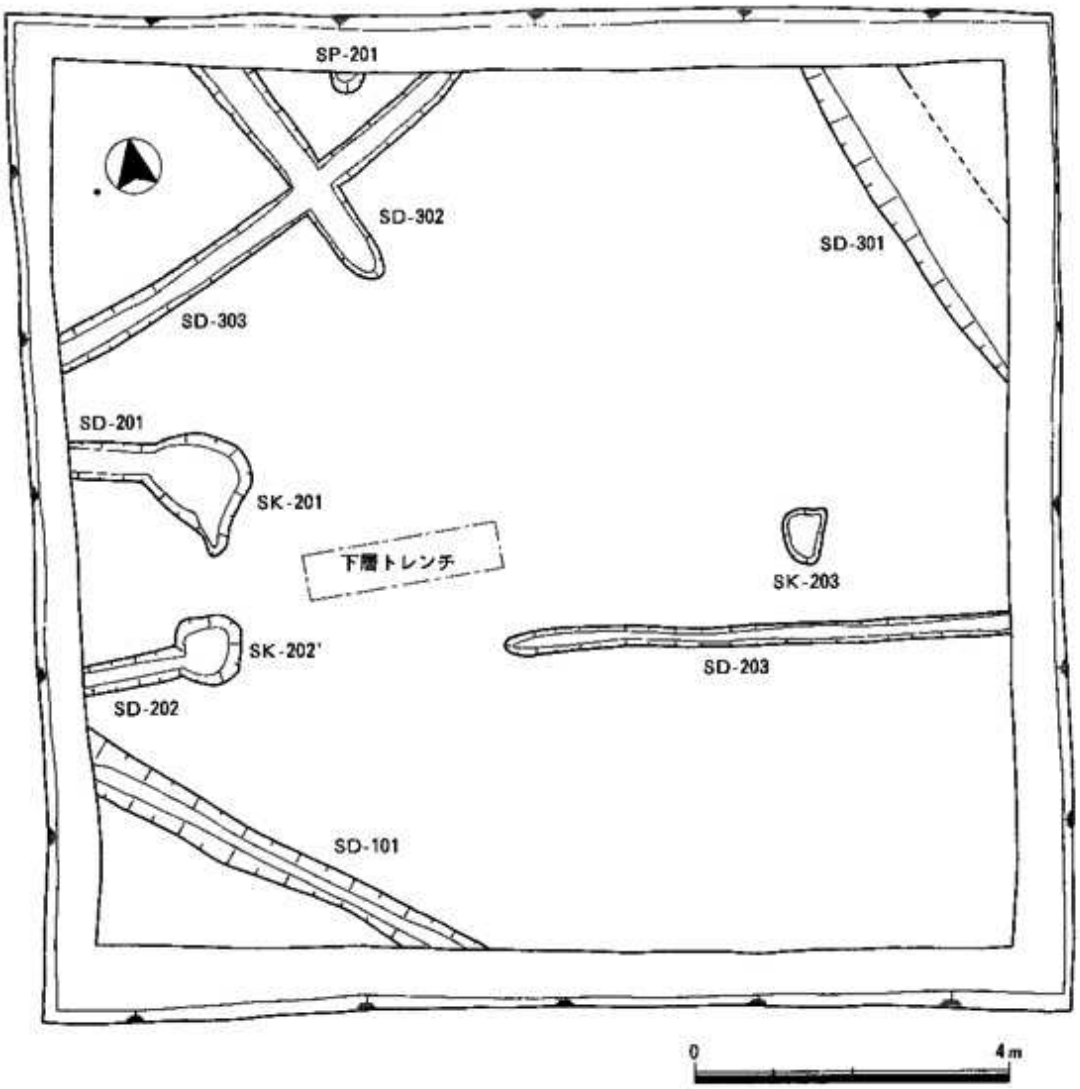


1　耕土
2　床土（灰色細砂混粘質土）
3　灰色粘質土（褐色斑点有り）
4　明褐灰色粘質土
5　茶褐色粘質土
6　青灰色粘質土～淡茶灰色粘質土
7　淡茶灰色粘質シルト
8　青灰色シルト
9　灰色粘土
10　青白色微砂

第3図　基本層序柱状図

3）検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下0.5～0.6m（標高8.0～8.1m）の第6層上面で古墳時代初頭の溝3条（SD－301～303）、第4層上面で鎌倉時代後期の土坑3基（SK－201・202）・溝2条（SD－201・202）・小穴1個（SP－201）を検出した。第3層上面で溝1条（SD－101）を検出した。遺物は遺構及び包含層内からコンテナ箱にして約2箱分を出土した。以下、検出した遺構について記す。



第4図　検出遺構平面図

古墳時代初頭の検出遺構

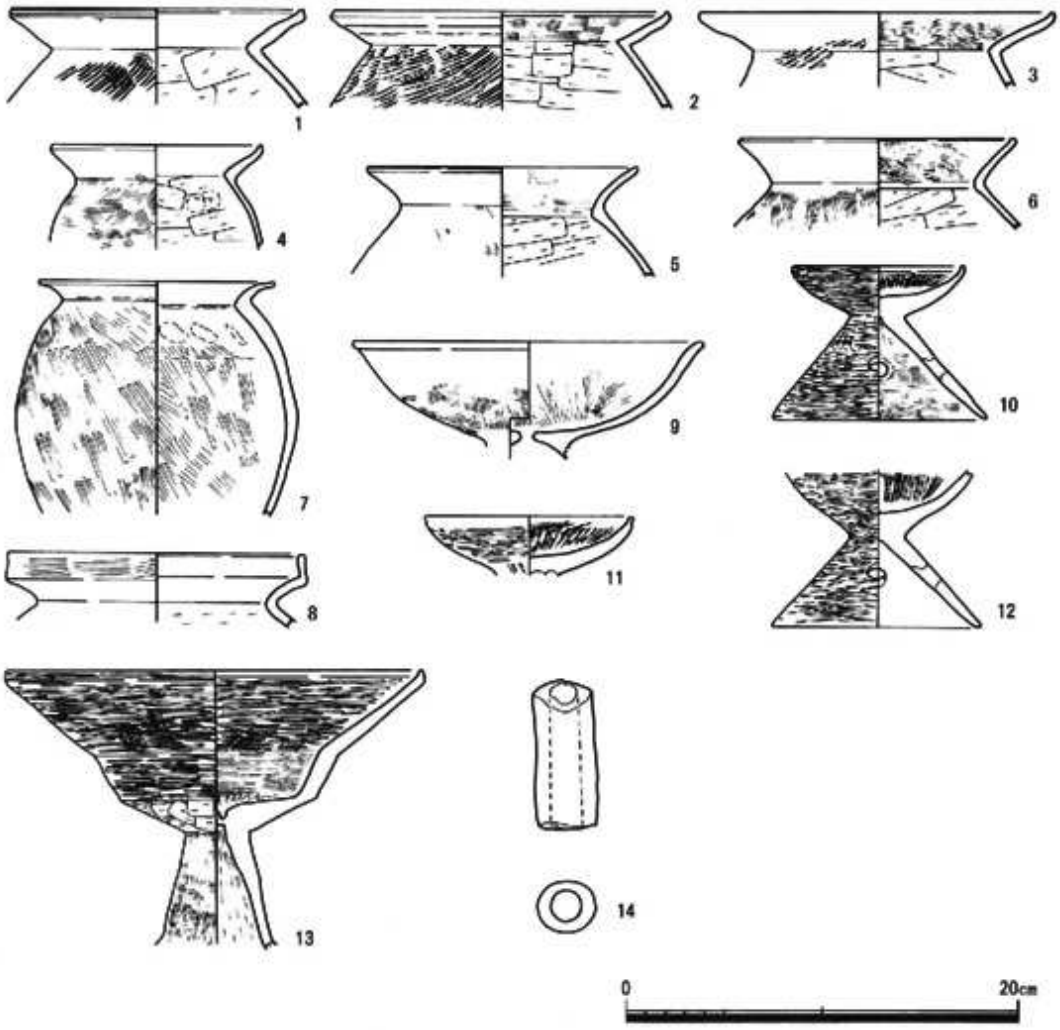
溝（ＳＤ）

ＳＤ－301

調査区の北東部（2b区）で検出した溝で、南東－北西の方向に伸び調査区外に至る。検出面は第6層上面からの切り込みで、検出長約4.0m、幅約2.0m、深さ約0.7mを測る。堆積土は大きく3つ大別できる。上層は暗褐色細砂混粘質土、中層は灰茶色シルト・淡灰茶色細砂・淡茶灰色シルト・青灰色粘質シルトである。下層は暗灰青色細砂混粘土で植物遺体および土器片が多く含まれる層である。これらの堆積状況から言えることは、この溝が機能したある時期は滞水した状態ないしはゆっくりとした水の流れであったことが下層の堆積状況から確認できる。

その後、溝は流れが早くなったのかそれとも洪水によるものなのかは不明であるが短期間に埋没した土層の堆積状況がみられる。上層は溝がほぼ埋没し浅く残った部分に水が溜り、ゆっくりと埋まっていったものと思われる。

遺物は下層より古墳時代初頭（庄内式新相）に比定される庄内式甕（1～6）・四国地方の甕（7）・吉備地方の甕（8）と台付有孔鉢（9）・器台（10～12）・高坏（13）・土錘（14）などを出土している。土器は磨滅痕がみられないことや完形に近いものも出土しており、近接地で破棄されたものと考えられる。



第5図　SD-301出土遺物実測図

ＳＤ－302

調査区の北西部（2a・b区）で検出した南西－北東の方向に伸びる溝である。南東は途切れ、ＳＤ－303がクロスする。北西は調査区外に至る。検出面は第５層上面からの切り込みで検出長約4.0ｍ、幅0.4～0.6ｍ、深さ約0.1ｍを測る。堆積土は暗褐灰色粘質土である。遺物は庄内期の土器の小片をごく少量出土している。

ＳＤ－303

調査区の北西部（2a・b区）で検出した南東－北西の方向に伸びる溝である。検出面は第５層上面からの切り込みで、検出長約8.0ｍである。中央付近でＳＤ－302がクロスする。南東・北西ともに調査区外に至る。幅0.35～0.5ｍ、深さは約0.1ｍを測る。堆積土は暗褐灰色粘質土でＳＤ－302と同一土層である。遺物は庄内期の土器の小片をごく少量出土している。

鎌倉時代後期の検出遺構

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－201

調査区の北西部（1b区）で検出した土坑である。平面形は南部に突起のある楕円形を呈し、西側で溝（ＳＤ－201）が伸びる。検出部の規模は径1.2～1.4ｍ、深さ0.3ｍを測る。断面は逆台形を呈し、淡灰色粘土が堆積する。遺物は土坑内部から平瓦の小片を１点少量出土している。

ＳＫ－202

調査区ＳＫ－201（1c区）の南部で検出した土坑である。平面形はほぼ円形を呈し、径0.8～0.9ｍ、深さ0.3ｍを測る。断面は逆状形を呈する。西側で溝（ＳＤ－202）が伸びている。堆積土は淡灰色粘土である。遺物は内部から鎌倉時代以降の平瓦片を少量出土している。

ＳＫ－203

調査区東部付近（2c区）で検出した土坑である。平面形はやや楕円形を呈し、径0.5～0.8m、深さ約0.2ｍを測る。断面は浅い皿形を呈する。堆積土は淡灰色粘土である。遺物は出土していないがＳＫ－201と同一層であり、同時期のものと思われる。

ＳＰ－201

調査区北部（2a区）で検出した。平面形は円形を呈し、径0.3ｍ、深さ0.3ｍを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は淡灰色粘土(褐色の斑点有り)である。遺物は出土していないがＳＫ－201と同一層であり、同時期のものと思われる。

ＳＤ－201

調査区の北西部（1b区）で検出した溝で、ＳＫ－201から西部の調査区外に伸びる。検出面は第４層上面からの切り込みで、検出長約1.7ｍ、幅0.4ｍ、深さ約0.1ｍを測る。堆積土は淡灰

色粘土である。遺物は土師器の小片をごく少量出土している。時期的には土坑（ＳＫ－201）と同時期のものと思われる。

ＳＤ－202

調査区の北西部（1c区）で検出した溝で、ＳＫ－202から西部の調査区外に伸びる。検出面は第４層上面からの切り込みで、検出長約2.0ｍ、幅0.3ｍ、深さ約0.1ｍを測る。堆積土は淡灰色粘土である。遺物は土師器の小片をごく少量出土している。時期的には土坑（ＳＫ－202）と同時期のものと思われる。

ＳＤ－203

調査区の北西部（2･3c区）で検出した東西方向に伸びる溝である。西は調査区内で途切れ、東は調査区外に至る。検出面は第４層上面からの切り込みで、検出長約7.0ｍ、幅約0.2ｍ前後、深さ約0.05ｍ前後を測る。堆積土は淡灰色粘土で、第３層の中世耕作土とほぼ同一土層である。遺物は出土していないが、土坑（ＳＫ－201・202）と同時期のものである。この溝は耕作に関連する鋤溝などの性格のものと思われる。

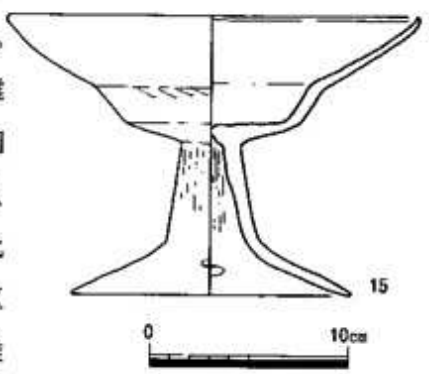
近世の検出遺構

ＳＤ－101

調査区の南西部（1c区）で検出した南東－北西方向に伸びる溝である。検出面は第３層上面の中世耕作土からの切り込みである。溝の両方向とも調査区外に至る。検出長約7.0ｍ、幅0.6～0.8ｍ、深さ約0.2ｍを測る。堆積土は灰色粘質土・乳灰色微砂～細砂の互層である。遺物は出土していないが中世耕作土の上面より切り込んでおり、それ以降の時期のものと考えられる。また、この溝は堆積状況からみるがぎりでは氾濫により短時間でできたものと思われる。

４）遺構に伴わない出土遺物

第３層・第５層で出土した。第３層は中世の耕作土である。この土層内よりごく少量の土器片が出土している。土器片はほとんど磨滅を受けており、器種の判別が困難なものが大半である。判別できたものでは古墳時代前期の土師器壺・甕、古墳時代後期～奈良時代の須恵器蓋坏、鎌倉時代以降の平瓦である。第５層は古墳時代前期に比定される土師器が含まれる層である。この土層は調査区南部は第３層の耕作土に削平されており、北部のみの堆積である。遺物は古墳時代前期に比定される土師器を出



第６図　遺構に伴わない出土遺物実測図

5）出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	口径 器高	調整・技法	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
1 三	甕 土師器 SD−301	口径	14.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ後ハケナデ、内面ヘラケズリ	暗灰褐色	2mm以下の砂粒を微量に含む（長石・雲母・角閃石）	良好	口縁1/5	
2 三	同上	口径	17.0	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ハケナデ、体部外面タタキ（7本／cm）後ハケナデ、内面ヘラケズリ	暗灰褐色	6mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石）	良好	底部1/6	
3 三	同上	口径	18.0	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ハケナデ、体部外面タタキ、内面ヘラケズリ→指頭圧痕	暗灰茶褐色	3mm以下の砂粒を微量に含む（長石・雲母）	良好	口縁1/4	
4 三	同上	口径	10.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ハケナデ、体部外面タタキ後ハケナデ、内面ヘラケズリ	外：淡灰褐色 内：淡灰黄茶色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・角閃石・黒雲）	良好	口縁1/5	
5 三	同上	口径	13.8	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ハケナデ、体部外面タタキ後ハケナデ、内面ヘラケズリ	暗茶灰褐色	2mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石）	良好	口縁1/5	
6 三	同上	口径	13.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ハケナデ、体部外面タタキ後ハケナデ、内面ヘラケズリ	淡茶灰褐色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石）	良好	口縁1/4	
7 三	同上	口径	15.0	口縁部外面ヨコナデ・ヨコナデ、内面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ	淡灰茶色	3mm以下の砂粒を微量に含む（長石・雲母・角閃石）	良好	口縁1/5	
8 三	同上	口径	15.0	口縁部外面ヨコナデ・ヨコナデ、内面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ	外：淡灰茶色～明茶色 内：淡灰茶色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・角閃石・雲母）	良好	底部1/2	
9 三	台付有孔鉢 土師器 SD 301	口径	17.6	坏部内外面ハケナデ、坏部底部に焼成後穿孔（径8mm）	乳黄灰色	2mm以下の砂粒を微量に含む（長石・雲母・赤褐色酸化粒）	良好	坏部1/2	
10 三	器台 土師器 SD 301	口径 器高	14.0	坏部外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ・放射状暗文、脚部外面ヘラミガキ、内面ハケナデ	外：暗灰茶色～暗赤褐色 内：灰茶褐色	5mm以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母）	良好	完形	
11 四	同上	脚部径	10.6	坏部外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ・放射状暗文、脚部外面ヘラミガキ、内面ハケナデ	暗茶灰色	5mm以下の砂粒を少量含む	良好	坏部のみ	
12 四	同上	脚部径	10.8	坏部外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ・放射状のヘラミガキ、脚部外面ヘラミガキ、内面ハケナデ、四方孔のスカシ	乳褐灰色	5mm以下の砂粒を少量含む（赤褐色酸化粒）	良好	坏端部欠損	
13 四	高杯 土師器 SD 301	口径	21.2	坏部外面ハケナデ後ヘラミガキ、底面ヘラケズリ、内面ハケナデ後ヘラミガキ・放射状のヘラミガキ、脚部外面ヘラミガキ、内面ナデ	外：淡茶灰色～灰茶褐色 内：淡橙灰色～灰色	5mm以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母）	良好	脚部欠損	
14 四	土錘 土師器 SD−301	長さ 径	14.0 3.0	ナデ	乳茶灰褐色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・赤褐色酸化粒）	良好	一部欠損	
15 四	高杯 土師器 包含層	口径 器高 脚部径	20.6 14.3 14.0	内外面磨耗の為調整不明	淡茶褐色	0.5mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英・チャート）	良好	ほぼ完形	

上している。調査区北西部の試掘孔では完形に近い土器が東西方向に並んだ状態で確認されている。本調査でも試掘孔の北西側で高坏（15）のほぼ完形に近い状態で出土している。

3．まとめ

今回の調査区では古墳時代初頭～近世の遺構・遺物を検出することができた。古墳時代初頭のものは中世の耕作土により調査区の大半が削平を受けた状態で検出した。調査区では北東部が一番削平が少なかった部分である。逆に最も削平されていたのは南西部である。検出した古墳時代初頭のベース面高で比較すると北東部が標高約8.2m、南西部が標高約7.9mを測り、約0.3mの高低差があった。それは削平によるものなのかは明確にできないが、調査区南西部では古墳時代初頭の遺構および遺物は検出しなかった。周辺の調査では東部約300mの当調査研究会第26次（TG89－26）・第42次（TG93－42）の調査、南部約100mの成法寺遺跡で昭和62年度から断続的に行われている府道拡張工事に伴う府教委調査で同時期の集落遺構などを検出しているが、北西部約100mの当調査研究会第46次調査（TG94－46）や当調査地で実施した市教委の遺構確認調査ではごく一部で確認された程度であり、当地付近は居住域とは考えにくい。今回の調査で検出した溝から完形に近い土器・焼成後に穿孔した土器が含まれており、集落域内に位置しているものと考えられる。これらのことから、当地周辺は墓域ないしは集落の中心よりはずれた位置にあたるところであると思われる。

それ以降、古墳時代中期～平安時代の時期については削平を受けたものかは不明であるが、今回の調査では確認できなかった。中世以降からは生産域として水田耕作の土地利用が現在まで続いていたものと思われる。

参考文献

山上　弘　1989.3「成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ」－八尾市高美町所在－　大阪府教育委員会

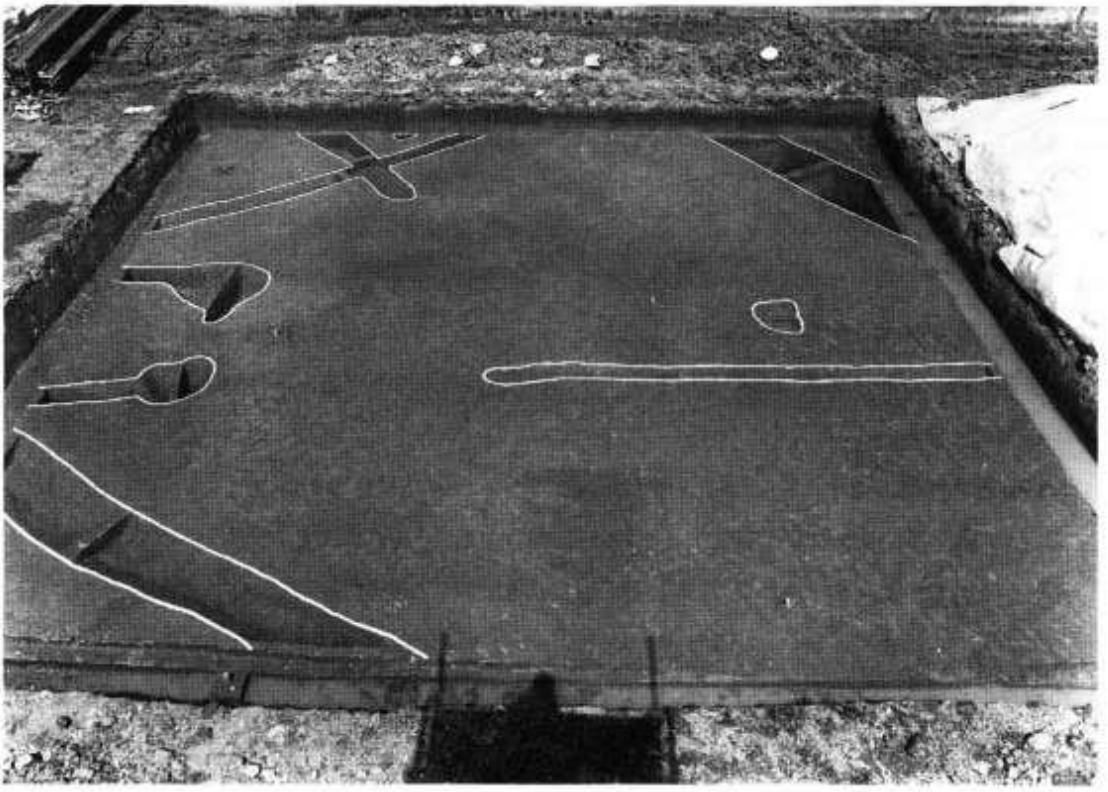
亀島重則　1990.3「成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅴ」大阪府教育委員会

高萩千秋　1988「15. 東郷遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』（財）八尾市文化調査研究会報告16　（財）八尾市文化調査研究会

岡田清一　1995　（財）八尾市文化財調査研究会「Ⅱ　東郷遺跡（第42次調査）」『東郷遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』（財）八尾市文化調査研究会

岡田清一　1995　（財）八尾市文化財調査研究会「Ⅲ　東郷遺跡（第45次調査）」『東郷遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』（財）八尾市文化調査研究会

西村公助　1995　（財）八尾市文化財調査研究会「Ⅳ　東郷遺跡（第46次調査）」『東郷遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』（財）八尾市文化調査研究会



調査区全景（南から）

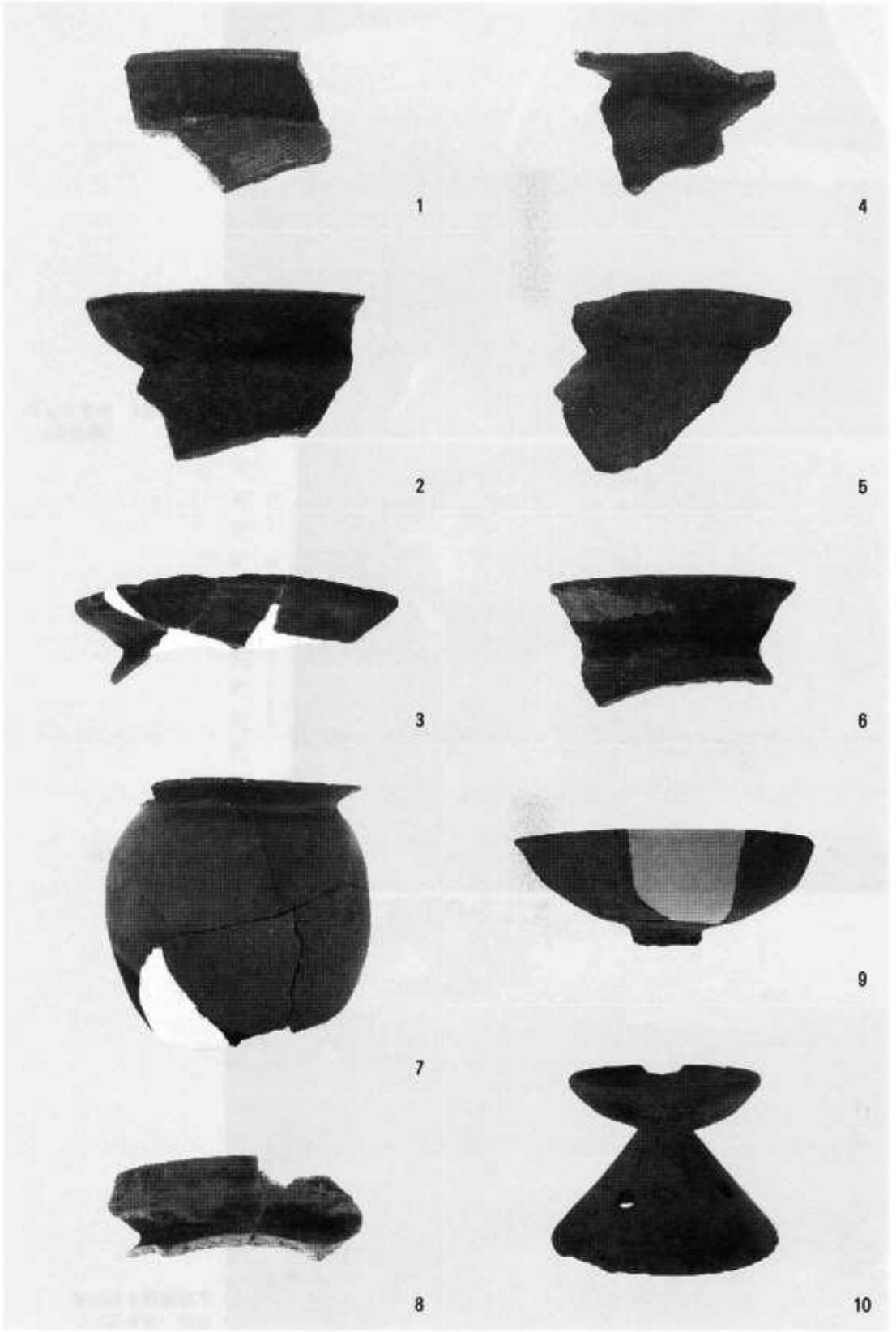
調査区北西部（南西から）

SD－301　セクション
（南から）

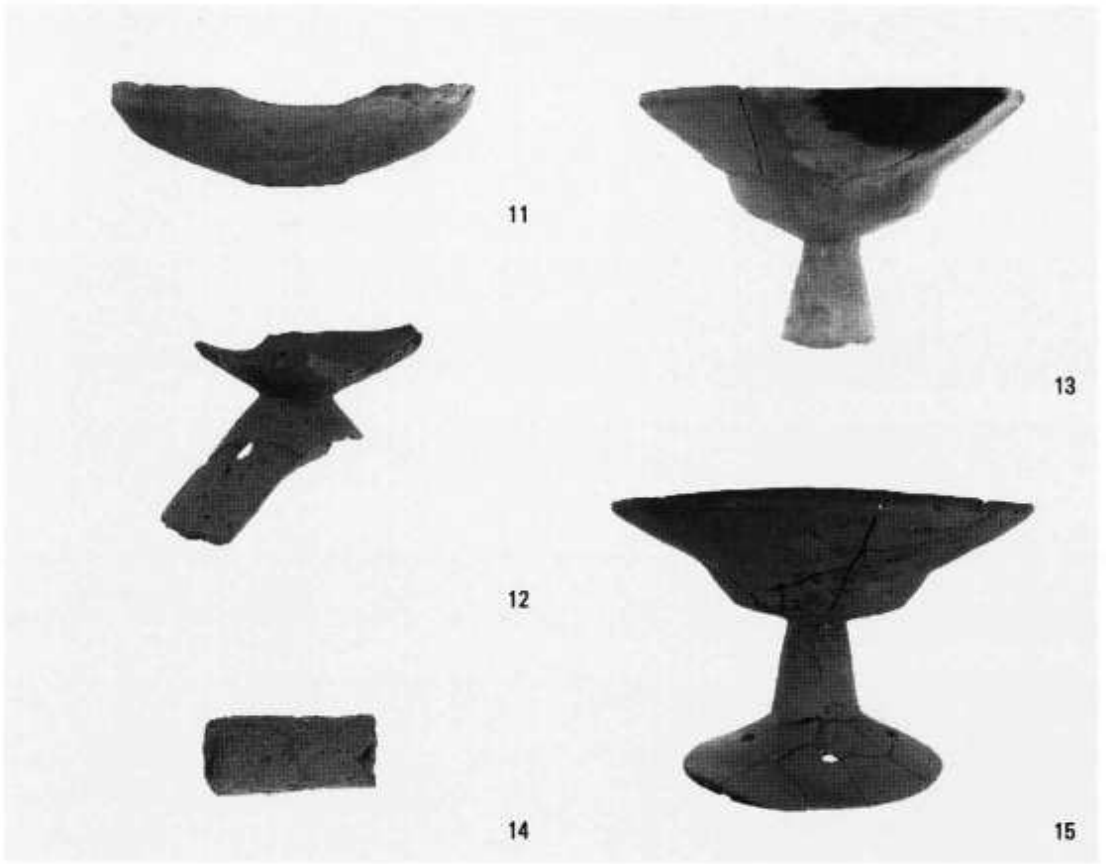
包含層出土高杯
（南から）

下層確認トレンチ
北壁（南から）

図版三



SD－301出土遺物



SD－301（11～14）、包含層（15）出土遺物

Ⅵ　中田遺跡第31次調査（ＮＴ95－31）

例　言

1．本書は、大阪府八尾市刑部１丁目183．184で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する中田遺跡第31次調査（ＮＴ95－31）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋149－３号　平成７年10月26日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が田中政子氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成７年11月６日から11月15日（実働８日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は120㎡を測る。調査においては垣内洋平・岸田靖子・中西明美・西村和子・松井三千子が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成８年９月30日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－岸田靖子・北原清子・沢村妙子・西田真紀・辻野優子、図面トレース－北原、図版レイアウトおよび遺物写真撮影原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……71

2．調査概要……73

　1）調査の方法と経過……73

　2）基本層序……73

　3）検出遺構と出土遺物……75

　4）出土遺物観察表……81

3．まとめ……82

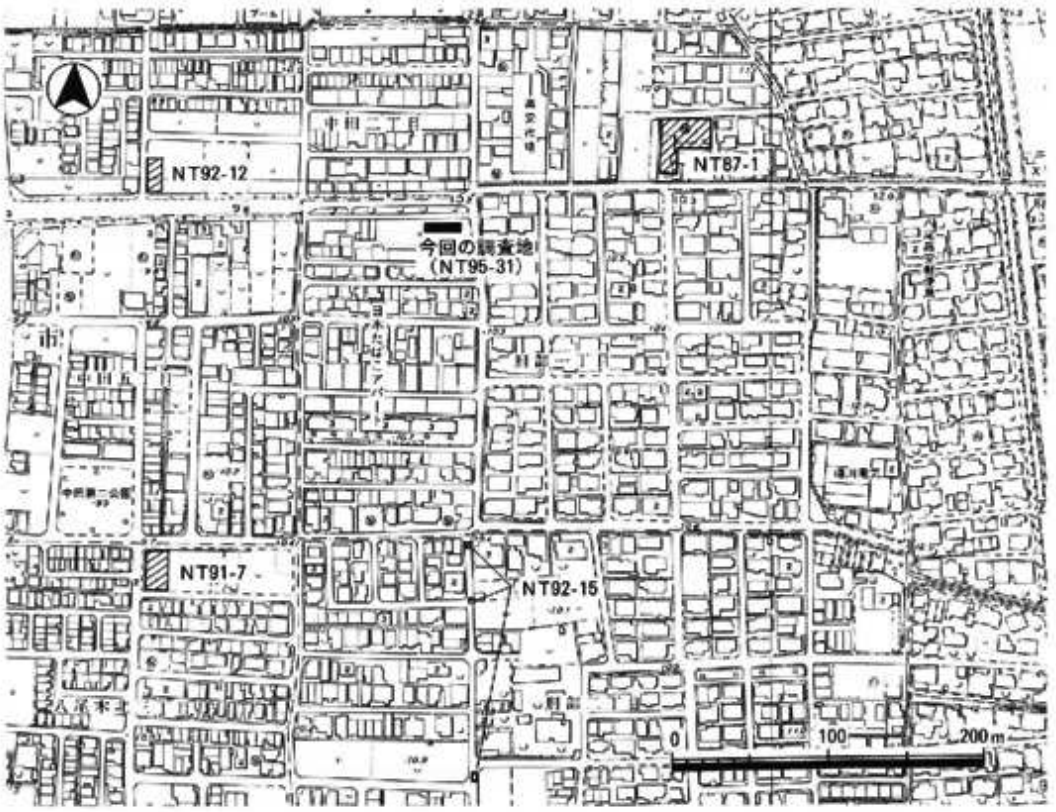
Ⅵ　中田遺跡第31次調査（ＮＴ95－31）

１．はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田１～６丁目、刑部１～４丁目、八尾木１～６丁目付近の東西1.1km・南北0.8kmがその範囲とされている。

地理的には、河内平野内を北流した旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川の両河川に挟まれて、南北方向に広がりを持つ低位沖積地上の南部に位置している。なお、遺跡内の微地形を示せば、遺跡範囲の東端部付近が玉串川左岸に形成された自然堤防にあたり、この付近が最も標高が高くT.P.＋12m程度を測るもので、そこから西部に向かって下がっており、標高が最も低い地点は、遺跡範囲中央部を南北方向に流下する楠根川付近でT.P.＋10.7～9.5mを測る。

当遺跡周辺は、これらの地理的条件を背景として、各時期の遺跡分布が密な地域であることが指摘されており、考古学的な資料の蓄積が比較的多い地域と認識されている。当遺跡周辺の遺跡を列挙すれば、南に東弓削遺跡（弥生中期～鎌倉）、西に矢作遺跡（弥生後期～鎌倉）、北西

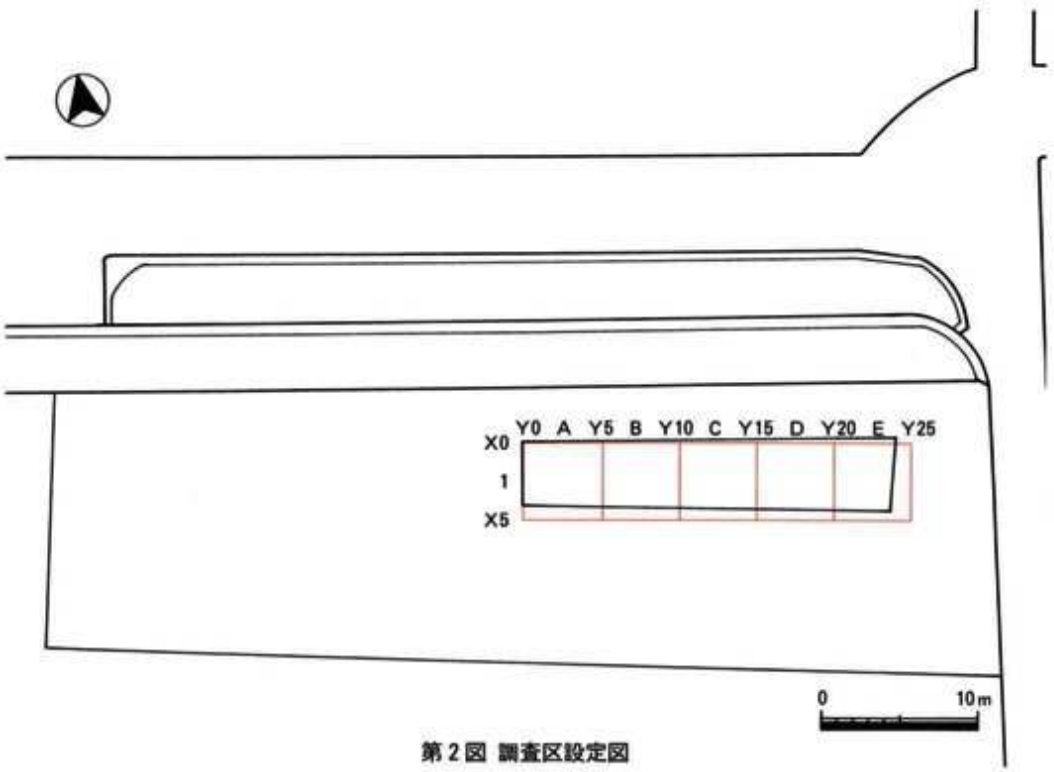


第１図 調査地周辺図

および北に成法寺遺跡（弥生後期～室町）・小阪合遺跡（弥生中期～室町）が近接する位置に存在している。

当遺跡発見の端緒は、昭和46年に大阪府教育委員会により実施された安中～教興寺線道路工事に伴う調査によるもので、それ以降も、八尾市教育委員会・当調査研究会により断続的に発掘調査が実施されており、当遺跡が弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが認識されている。

このような情勢下、八尾市刑部１丁目183．184において、田中政子氏から共同住宅の建設を行う旨の届出が市教育委員会文化財課へ提出された。申請地である八尾市刑部１丁目付近は、中田遺跡の北東部にあたり、昭和62年度に当調査研究会が八尾市中田２丁目29・39で実施した第１次調査（ＮＴ87－１）で、弥生時代後期を中心とした居住域の広がりが確認されている。当該地は第１次調査（ＮＴ87－１）地の西約120ｍ地点に位置することから、遺構・遺物の有無を確認するため、平成７年10月18日に八尾市教育委員会文化財課により遺構確認調査が実施された。その結果、現地表下1.7ｍ付近に弥生時代後期～古墳時代の土器片を包含する土層の存在が確認され、事業の実施に際しては遺構・遺物の状況を把握することが必要であると判断された。以上の経緯を踏まえ、発掘調査を実施するに至ったもので、八尾市教育委員会・事業者・（財）八尾市文化財調査研究会の三者協定に基づき、（財）八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて発掘調査を行うことになった。



第２図 調査区設定図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に先だって実施したもので、建物の建築予定地に東西幅 24m、南北幅５mの調査区を設定した。調査の地区割りは、調査地の北西隅のＸ０・Ｙ０地点を基点として東西25m、南北５mにわたって設定した。一区画の単位は５m四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｅ）、南北方向は算用数字（北から１）で示し、地区の表示は１Ａ～１Ｅ区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～５）、南北線（Ｙ０～Ｙ25）の交点の数値を使用した。掘削に際しては、現地表下1.7m前後までを機械掘削した後、以下0.2mについては層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下1.9m前後（標高8.7m前後）に存在する第９層上面で弥生時代後期の土坑３基（ＳＫ－１～ＳＫ－３）、古墳時代前期初頭（庄内式古相）の土器集積１ヶ所（ＳＷ－１）、古墳時代後期の土坑２基（ＳＫ－４・ＳＫ－５）・溝５条（ＳＤ－１～ＳＤ－５）を検出した。遺物の総量は、遺構内および包含層出土遺物を含めてコンテナ３箱程度である。

2）基本層序

調査地全域にわたって、比較的安定した土層堆積が観察された。ここでは、普遍的に存在した９層を摘出して基本層序とした。

第０層　客土。層厚0.9m前後。上面の標高はT.P.＋10.6m前後。

第１層　Ｎ６／　灰色砂質シルト。層厚0.1～0.2m。旧耕土。

第２層　7.5ＧＹ７／１明緑灰色小礫まじり砂質土。層厚0.1～0.3m。床土。調査区の中央部より西では欠損している。

第３層　7.5ＧＹ７／１明緑灰色小礫まじり砂質シルト。層厚0.1m。

第４層　Ｎ８／　灰白色極細粒砂。層厚0.1～0.25m。

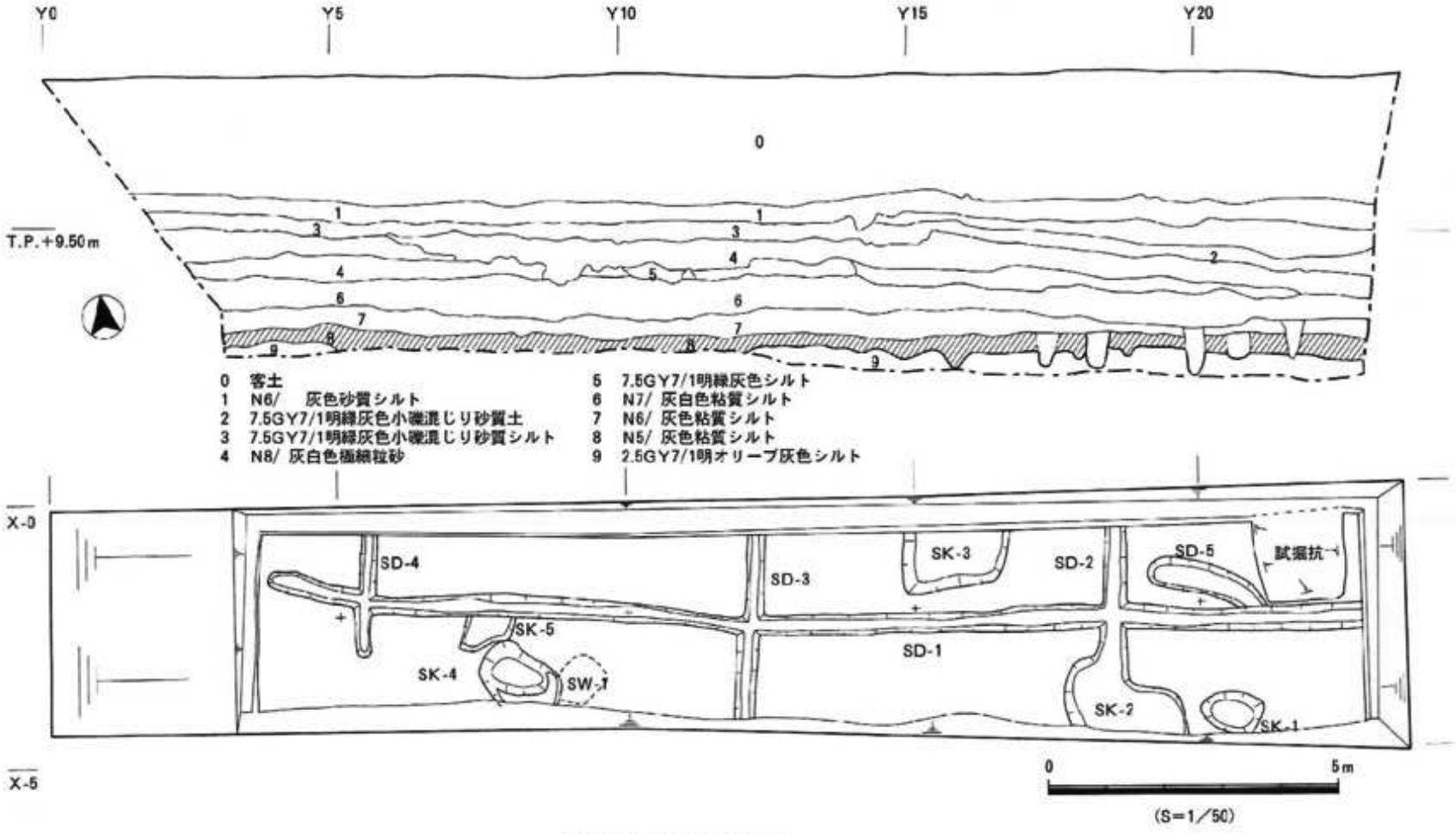
第５層　7.5ＧＹ７／１明緑灰色シルト。層厚0.1～0.15m。

第６層　Ｎ７／　灰白色粘質シルト。層厚0.15～0.3m。中世時期の水田耕土の可能性が高い。平安時代後期から鎌倉時代の遺物を極少量包含する。

第７層　Ｎ６／　灰色粘質シルト。層厚0.1～0.2m。古墳時代前期～後期の遺物を包含する。古墳時代後期の遺構構築面。

第８層　Ｎ５／　灰色粘質シルト。層厚0.1～0.2m。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を包含する。

第９層　2.5ＧＹ７／１明オリーブ灰色シルト。層厚0.2m以上。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の遺構構築面。



第3図 検出遺構平断面図

3）検出遺構と出土遺物

第9層上面を調査対象面とした結果、弥生時代後期の土坑3基（ＳＫ－１～ＳＫ－３）、古墳時代前期初頭（庄内式古相）の土器集積1ヶ所（ＳＷ－１）、古墳時代後期の土坑2基（ＳＫ－４・ＳＫ－５）・溝5条（ＳＤ－１～ＳＤ－５）を検出した。ただし、古墳時代後期の遺構については、第7層上面が本来の構築面である。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

１Ｅ区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅1.1m、南北幅0.6m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色粘土の単一層である。遺物は弥生時代後期に比定される土器類の小片が極少量出土している。

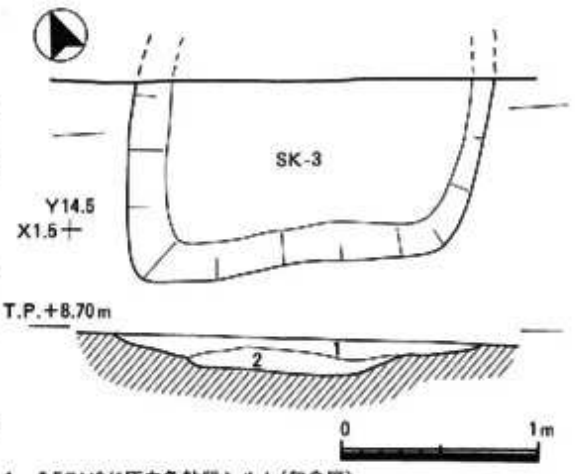
ＳＫ－２

ＳＫ－１の西で検出した。北西部がＳＤ－２により切られているほか、南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅2.1m、南北幅1.2m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色粘土の単一層である。遺物は弥生時代後期に比定される土器類の小片が極少量出土している。

ＳＫ－３

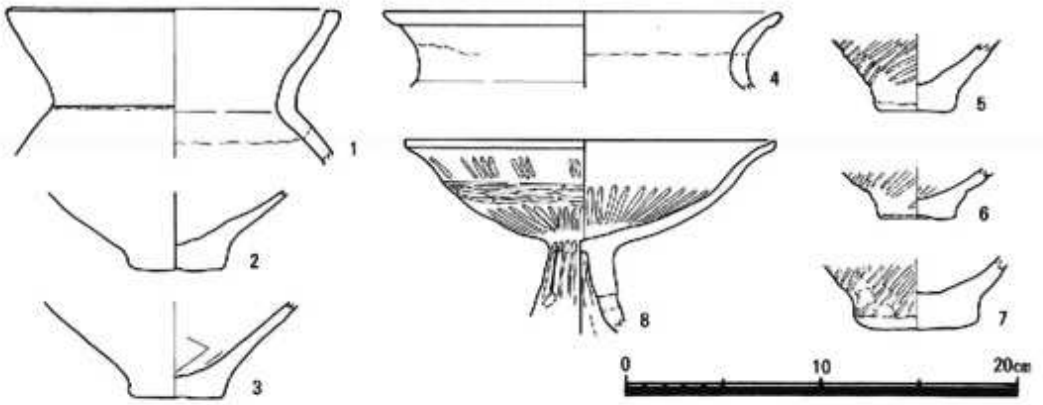
１Ｃ区西部から１Ｄ区にかけて検出した。北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.9m、南北幅1.0m、深さ0.19mを測る。埋土は上層の灰白色粘質シルトと下層の明緑灰色シルトの2層が、皿状の遺構断面に沿ってほぼ水平に堆積している。遺物は上層を中心に弥生時代後期後半に比定される土器類が多数出土しているが大半が小片であった。

図化し得たものは8点（１～８）である。その内訳は弥生土器壺3点（１～３）、甕4点（４～７）、高杯1点（８）である。（１）は頸部が外傾気味に伸びた後、中位からさらに外反して伸びる口縁部が付く広口壺の口縁部である。生駒西麓産である。（２・３）は壺底部で、（２）が生駒西麓産である。（４）は甕の口縁部である。復元口径19.8cmを測る。（５～７）は甕底部で、（５・６）が底径4cm前後の小型品、（７）が底径5.7cmの大型品に分類される。（６）の底部はドーナツ底を呈する。いずれ



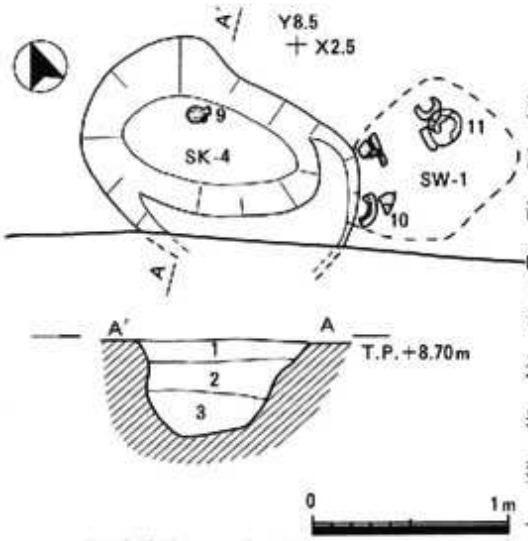
1　2.5GY8/1灰白色粘質シルト（包含層）
2　10GY7/1明緑灰色シルト（包含層）

第4図　ＳＫ－３平断面図



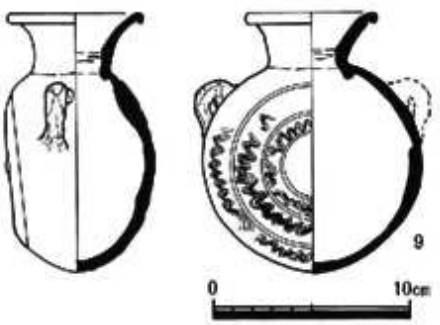
第5図 ＳＫ－３出土遺物実測図

も生駒西麓産である。（８）は中型の高杯で裾部が欠損している。非生駒西麓産で胎土中に大粒のチャートが散見される。



1　N5/ 灰色粘質シルト（提瓶出土）
2　10GY7/1明緑灰色粘質シルト
3　N5/ 灰白色粘質シルト

第6図 ＳＫ－４・ＳＷ－１平断面図



第7図ＳＫ－４出土遺物実測図

ＳＫ－４

１Ｂ区の南部で検出した。南部が調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分では楕円形を呈するもので、南部に三日月状のテラス部分を有する。検出部分で東西幅1.45ｍ、南北幅1.2ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は粘質シルトを主体とする３層がほぼ水平に堆積している。遺物は第１層から６世紀後半に比定される須恵器提瓶（９）が１点出土している。（９）は小型の須恵器提瓶で、口縁部の一部と輪状把手の一方が欠損している他は完存している。各部位の数値は、口径6.8㎝、器高13.2㎝、体部最大径11.2㎝、体部幅7.4㎝を測る。口縁部は斜上方に外反して開くもので、端部は下方に丸く拡張されている。体部平面形状は円形を呈するが、側面形状は一方が平らで片側が半球形を呈している。半球形を呈する面は３本の沈線により円が等間隔に描かれており、中央部を除く区画間にやや雑で不鮮明な櫛描きによる波状文が施文されている。帰属時期としては、口縁端部が丸く終わる点や体部外面の波状文がこの器種とし

ては古い様相を示すことから、田辺編年のＴＫ10型式（６世紀中葉）段階に対比されよう。

ＳＫ－５

１Ｂ区で検出した。ＳＫ－４の北に隣接している。不定形を呈するもので、北部はＳＤ－１に切られている。検出部分で東西幅0.85ｍ、南北幅0.6ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰白色粘土の単一層である。遺物は出土していないが、埋土はＳＤ－１～ＳＤ－３と共通していることから、時期的には古墳時代後期が考えられる。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

調査区のほぼ中央部を東西方向に伸びるもので、ＳＫ－５を切り、ＳＤ－２～ＳＤ－４とは合流している。規模は検出長19.1ｍ、幅0.25～0.4ｍ、深さ0.05～0.15ｍを測る。埋土は灰白色粘土の単一層である。遺物は古墳時代後期に比定される土師器・須恵器の小片が少量出土している。

ＳＤ－２

１Ｄ地区で検出した。南北方向に伸びるものでＳＤ－１と合流し、南部でＳＫ－２を切っている。規模は検出長2.65ｍ、幅0.35～0.5ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土は灰白色粘土の単一層である。遺物は出土していない。

ＳＤ－３

１Ｃ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、ＳＤ－１と合流している。規模は検出長3.1ｍ、幅0.3～0.35ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土は灰白色粘土の単一層である。遺物は土師器の小片が極少量出土している。

ＳＤ－４

１Ｂ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、ＳＤ－１と合流している。規模は検出長2.1ｍ、幅0.3ｍ、深さ0.09ｍを測る。埋土は灰白色粘土の単一層である。遺物は土師器の小片が極少量出土している。

ＳＤ－５

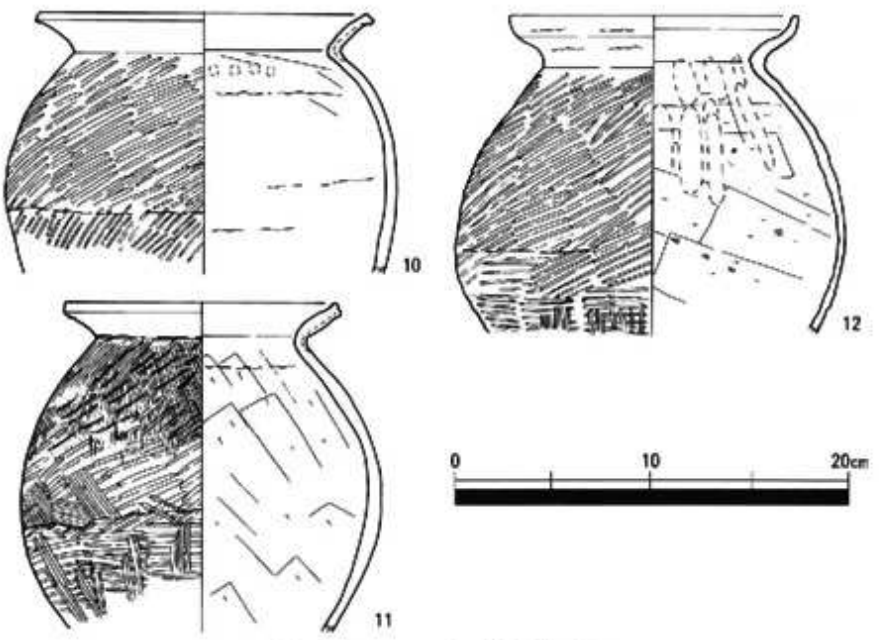
１Ｄ～１Ｅ地区で検出した。東西方向に伸びるもので、東端はＳＤ－１に切られている。規模は全長2.0ｍ、幅0.55ｍ、深さ0.07ｍを測る。埋土は灰色粘質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

写真１　調査風景（東から）

土器集積（ＳＷ）

ＳＷ－１

１Ｂ区で検出した。ＳＫ－４の東に近接しており、東西幅0.9m、南北幅0.9mの範囲に広がっている。古墳時代前期初頭（庄内式古相）に比定される甕が３個体が出土しているが、いずれも底部が欠損している。なお、明瞭な堀形が見られないことから、第９層上面の窪地に廃棄された土器群と理解されよう。甕の中で図化し得たものは３個（10～12）である。そのうち、（10）がＶ様式系甕、（11・12）が庄内式甕に分類される。（10）は口縁部が「く」の字に屈曲するもので、端部は小さく斜下方に拡張され内傾する小さく面を形成している。体部は球形で、分割成形に沿って右上がりのタタキ調整が行われている。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は風化のためやや不鮮明であるが、砂粒の動きが見られず、一部に単位幅を示す痕跡があることからヘラナデによる調整が行われたものと推定される。生駒西麓産である。（11・12）は共に最大径を中位に持つ球形の体部を有する庄内式甕である。口縁部の形態では屈曲部が丸く「く」の字状を呈することが共通するが、口縁端部の形態では、わずかに内傾する幅広の端面に凹線を施こす（11）と、口縁部上半で上方に拡張し複合口縁を呈する（12）に区別される。体部外面はともに三分割成形に沿って上位から中位が右上がり、下位が水平方向ないしは水平方向に近いタタキ調整が行われており、さらにタタキ調整の上からハケナデ調整が（11）では上位から中位、（12）では下位に施されている。なお、（11）の下位においてはタタキ調整の上から、単位が不明瞭ながら上位および中位に見られたハケナデ原体とは明らかに違う原体を使



第８図 ＳＷ－１出土遺物実測図

用した弱いナデ状の擦痕が認められた。体部内面のヘラケズリは（11・12）ともに検出部分では水平方向が基本で、屈曲部より少し下がった位置まで施されている点が共通している。共に生駒西麓産である。

今回出土した2点の庄内式甕（11・12）は、底部が欠損しており不明な点もあるが、河内型庄内式甕の成立期の様相を知るうえで重要な資料と言えよう。現在確認されている河内型庄内式甕の最古型式とされる形態および調整の特徴を以下に列記すれば、形態では口縁部が屈曲外反し端部が小さな面ないしは丸く終わる。体部は最大径を上位にもち、底部は尖り底あるいは小さな平底を呈する。調整においては、体部外面は三分割成形に沿って右上がりないしは水平方向の太めのタタキの後、ハケを粗くに施す。体部内面においては底部から屈曲部ないしはそれに近い部分までヘラケズリが行われている等の特徴があげられる。

これらの特長と本資料を比較すれば、体部の球形化と（11）に見られる口縁端部のつまみ上げによる明瞭な面を形成する点においては新しい様相が認められるものの、河内型庄内式甕の最古形態の範疇で捉えられるもので、従来から指摘されているように河内型庄内式甕の成立期における多元的な要素を本例が示している。

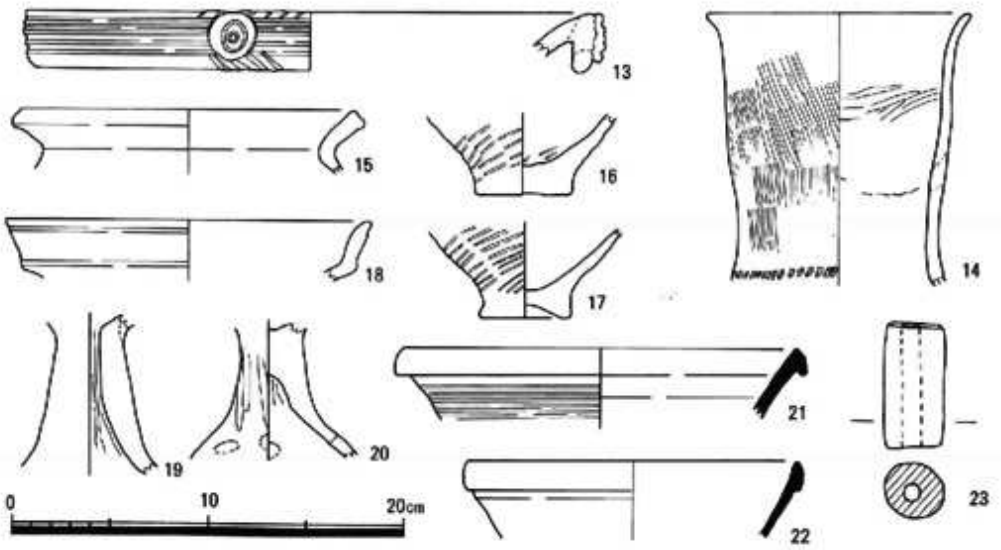
遺構に伴わない出土遺物

第6層～第8層が遺物包含層である。第8層からは弥生時代後期から古墳時代前期初頭、第7層からは古墳時代前期から後期、第6層からは平安時代後期から鎌倉時代に比定される土器類が出土している。量的にはコンテナ2箱程度が出土しているが、その内の約7割程度が第8層から出土したもので、第6層については極少量出土した程度である。全体に、小片化したものが大半を占めており、図化し得たものは概して少ない。11点（13～23）を図化した。

その内訳は弥生土器壺2点（13・14）、甕2点（15・16）、鉢1点（17）、高杯3点（18～20）、須恵器壺1点（21）、白磁碗1点（22）、土錘1点（23）である。

（13）は垂下口縁を有する広口壺ないしは広口長頸壺の口縁部の小片である。端面には4条の凹線文と円形竹管浮文のほか、上下端には刻み目文による加飾が行われている。1A区第8層出土。（14）は長頸壺の口頸部で、頸部高13.8cmを測る。口頸部下半に刻み目文が施文されている。（13・14）ともに生駒西麓産である。（15）は甕口縁部の小片である。畿内第V様式甕のなかでは、古相に位置対比されるものである。1D区第8層出土。（16）は甕の底部である。1D区第8層出土。（17）はあげ底の底部を有する小型の鉢である。1C区第8層出土。（18）は、口縁部が斜上方に外反気味に小さく伸びる高杯の口縁部の小片である。時期的には（15）に対応するものと考えられる。1C区第8層出土。（19・20）は高杯の柱状部で、（19）の杯底部は円板充填法により形成されている。（19）が1E区第8層、（20）が1A区第8層出土である。（21）は頸部が斜上方に伸びるもので、口縁端部が下方に肥厚し幅広の端面を有する須恵

器広口壺である。6世紀前半に対比されよう。1D区第7層出土。(22) は玉縁状口縁を有する中国産白磁碗の口縁部の小片である。その特長から横田・森田分類のⅣ－2類に当たるもので、11世紀中葉から12世紀初頭の時期に対比される。1E区第6層出土。(23) は管状式の土錘で完存している。長さ6.3cm、最大径2.7cm、孔径1.0cm、重さ75gを測る。1D区の第7層から出土しているため、時期的には古墳時代前期～後期が推定されるが、限定はできない。



第9図 第6層～第8層出土遺物実測図

参考文献

田辺昭三　1996『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

横田賢次郎・森田 勉　1978「太宰府出土の輸入陶磁器について一型式分類と編年を中心として一」『九州歴史資料館研究論集4』

4）出土遺物観察表

・凡例　粒径－L 1㎜以上　M0.5～1㎜未満　S0.5㎜未満　量－◎多量　○多い　△少ない　▲希少　赤赤－赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( ) 復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	ガラス	その他	焼成 保存	残存率	備考 地区
1	三	弥生土器 広口壺	(17.1) － －	外面：口頸部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口頸部ヨコナデ。体部ナデ。	茶褐色 〃	やや粗	◎S－L	△S	○S	◎S			良好	口縁部1/8	生駒西麓産 SK－3
2	三	弥生土器 壺	－ － 4.9	外面：体部および底部側斜ナデ。 内面：体部および底部ナデ。	茶褐色 〃	やや粗	○S－L	▲S	△S	◎S－L			良好 内底面磨滅	底部完存	生駒西麓産 SK－3
3	三	弥生土器 壺	－ － 4.5	内面：体部および底部横面ナデ。 内面：体部および底部ナデ。	淡赤褐色 〃	良好	○S－L	△M－L		▲M		赤▲M	良好	底部完存	SK 3
4	三	弥生土器 甕	(19.8) － －	内面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	灰褐色 〃	やや粗	○S－L	△S－M	△S	△S	▲S		良好	口縁部1/8	SK－3
5	三	弥生土器 甕	－ － 3.8	内面：体部タタキ。底部ナデ。 内面：体部および底部ナデ。	灰褐色～淡茶褐色 淡茶褐色	やや粗	○S－L	△M－L			▲M－L		良好	底部完存	SK－3
6	三	弥生土器 甕	－ － 3.8	内面：体部タタキ。底部側面ナデ。底部ナデ。底部ドーナツ底。 内面：体部および底部ナデ。一部工具痕遺存。	赤褐色 淡赤褐色	良好	△S－L	○M			▲L		良好	底部完存	SK－3
7	三	弥生土器 甕	－ － 6.0	内面：体部タタキ。底部ナデ。 内面：ナデ。	赤褐色 淡灰褐色	やや粗	○S－L	○S－L	△S	△S	▲L		良好 内底面一部剥離	底部2/3	SK－3
8	三	弥生土器 高杯	18.9 － － 体部高 5.0	内面：杯口縁部ヨコナデ後、ヘラミガキ。杯体部上半横方向、下半縦方向ヘラミガキ。柱状部縦方向ヘラミガキ。 内面：杯口縁部ヨコナデ。杯体部ヘラミガキ。柱状部シボリメ。	茶褐色 淡茶褐色	やや粗	○S－L	○S－L	△S		△S－L		良好 杯部底面一部剥離	杯部1/2	SK－3
9	三	須恵器 横瓶	6.8 13.2 体部径11.2 体部幅 7.4	内面：口縁部回転ナデ。体部3本の沈線間に波状文 内面：口縁部回転ナデ。体部ナデ。	灰白色 〃	やや粗	○S－L						堅緻	ほぼ完形	片方の把手を欠く SK－4
10	三	土師器 V様式甕	17.3 － －	内面：口縁部ヨコナデ。体部右上がりのタタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。他ナデ。	淡茶褐色 〃	やや粗	○S－L	△S－L	△S	◎S－L			やや不良 全体に磨滅	体部中位以下欠損	外面煤付着 SW－1
11	三	土師器 庄内式甕	14.2 － － 体部最大径 18.4	内面：口縁部ヨコナデ。体部中位まで右上がりのタタキ、以下水平方向タタキ（1cm/2本）後、上下から中位ハケナデ、下位単位不明のヘラナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部屈曲付近までヘラケズリ。	茶褐色 灰褐色	やや粗	△S－L		◎S－L	◎S－L			良好	体部中位以下欠損	外面煤付着 SW－1
12	三	土師器 庄内式甕	14.2 － － 体部最大径 19.9	内面：口縁部ヨコナデ。体部中位まで右上がりのタタキ、以下水平方向のタタキ（1cm/3本）。 内面：内面：口縁部ヨコナデ。体部屈曲付近までヘラケズリ。	茶褐色 〃	粗	◎S－L	△L	△S	◎S－L			良好	体部中位以下欠損	外面煤付着 SW－1
13	三	弥生土器 壺	(29.9) － －	内面：口縁部4条の沈線の後、円形竹管浮文。端面上下刻み目文。 内面：ヨコナデ。	茶褐色 〃	やや粗	○S	△S	○S－M	◎S－L			良好	口縁部1/6	1A区 第8層
14	三	弥生土器 長頸壺	(13.3) － －	内面：口縁部ヨコナデ。頸部縦方向のハケナデ、下端部キザミメ。 内面：口縁部ヨコナデ、他ナデ。	茶褐色 〃	やや粗	○S－M	△S	○S	◎S－L			良好	口頸部1/2	1B区 第8層

・凡例　粒径－L 1㎜以上　M0.5～1㎜未満　S0.5㎜未満　量　◎多量　○多い　△少ない　▲希少　赤赤－赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( ) 復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素地	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成 保存	残存率	備考 地区
15		弥生土器 甕	(17.0) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	茶褐色 黒褐色	やや粗	○SL	△M	▲S	○SM			良好	口縁部1/8	1D区 第8層
16	三	弥生土器 甕	－ 4.5	外面：体部右上がりタタキ。底部底面ナデ。 内面：体部ナデ。底部上具痕遺存	茶褐色 〃	やや粗	○SL		○S	○SL			良好	底部完存	1D区 第8層
17	三	弥生土器 鉢	－ 4.4	外面：体部右上がりタタキ。底部底面ナデ。 内面：体底部ナデ。	茶褐色 〃	やや粗	○SL	▲S	△S	◎SL			良好	底部完存	1C区 第8層
18	三	弥生土器 高杯	(18.6) －	外面：口縁部ヨコナデ他ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ他ナデ。	茶褐色 〃	良好	○SL	△M	△S	◎S			良好	口縁部1/12	1C区 第8層
19		弥生土器 高杯	－ －	外面：柱状部ナデ。 内面：柱状部シボリ目。	茶褐色～淡黒灰色 〃 茶褐色	粗	◎SL	△M	△S	○S	▲L		良好	柱状部完存	1E区 第8層
20		弥生土器 高杯	－ －	外面：柱状部ヘラミガキ。 内面：底部ナデ。	淡茶褐色 〃	良好	○SL	△M	▲L		▲M		良好	柱状部完存	1A区 第8層
21	三	須恵器 広口壺	(20.0) －	外面：口縁部回転ナデ。頸部カキ目。 内面：口縁部および体部回転ナデ。	淡灰色 〃	精良	△SL						堅緻	口縁部1/4	1D区 第7層
22	三	中国産 白磁碗	(16.8) －	外面：口縁部ナデ。体部ヘラケズリ。 内面：体部ナデ。	灰白色 〃	精良					▲M		堅緻	口縁部1/8	釉調の発色が悪い 1E区 第6層
23	三	土錘	長さ 6.3 幅 2.7 孔径 0.9 重さ 75g	外面：ナデ。 内面：両面穿孔。	灰褐色 〃	やや粗	○SL	○SL	▲M		▲M		良好	完形	1D区 第7層

3．まとめ

今回の調査では、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭および古墳時代後期を中心とした遺構・遺物を検出した。

弥生時代後期の居住域としては、当調査地の東120m地点の中田２丁目29・39で行なわれた第１次調査（ＮＴ87－１）で同時期の遺構が確認されており、同一の居住域の広がりとして包括されよう。[註1] ただ、調査地の中央部から西側においては、当該期の遺物包含層である第８層中の遺物の包含が緩慢であり、さらに西側で行なわれた試掘調査においても、包含層が確認されていないことから、当該期の集落の西端が本調査地付近であったことが想定される。

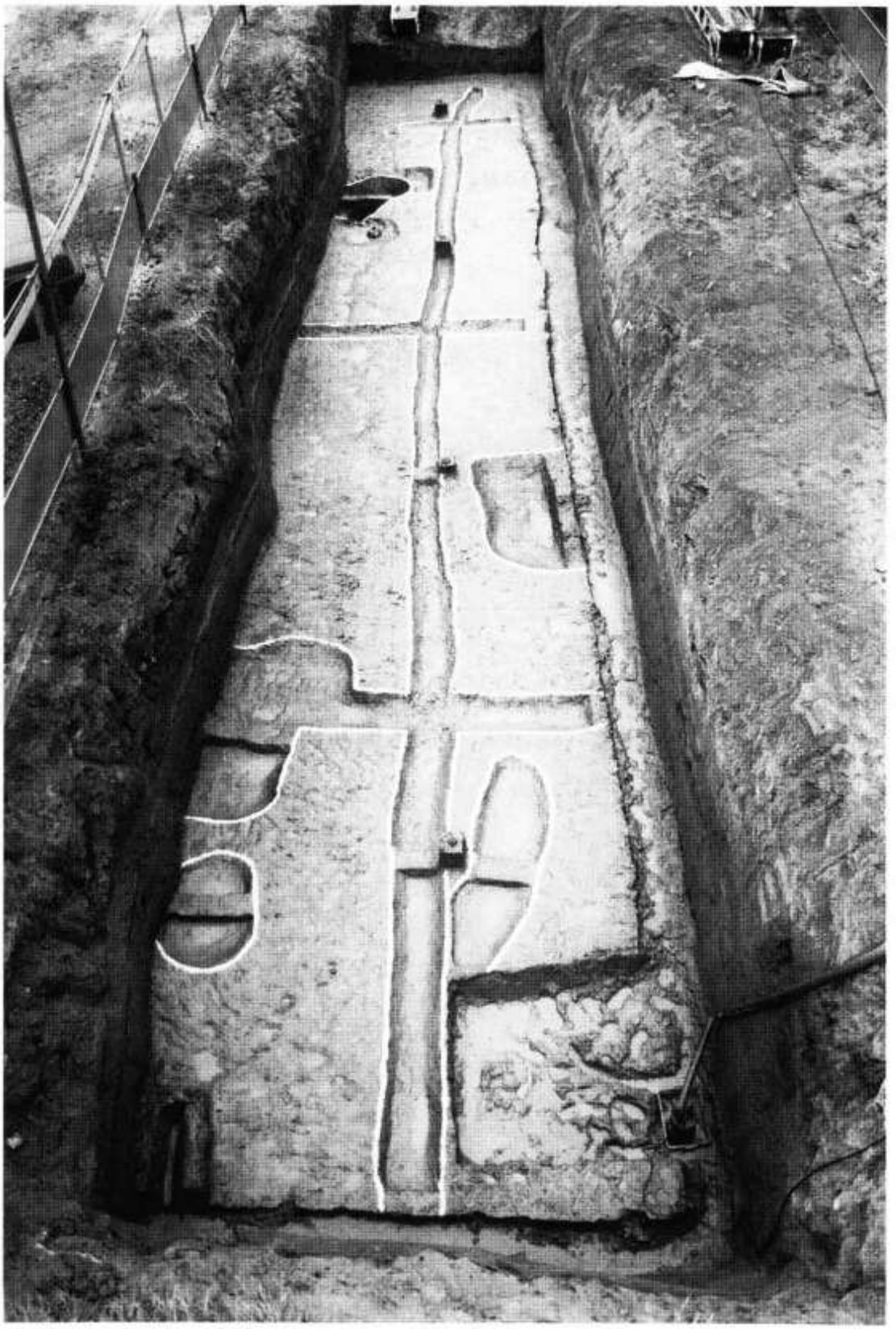
古墳時代前期初頭（庄内式古相）の遺構としてはＳＷ－１があり、２点検出された最古形態の庄内式甕については、河内型庄内式成立期における多元的要素を推定するうえで示唆に富む資料を提供している。

古墳時代後期の遺構としては、土坑・溝等を検出している。本来は第７層上面を中心に展開

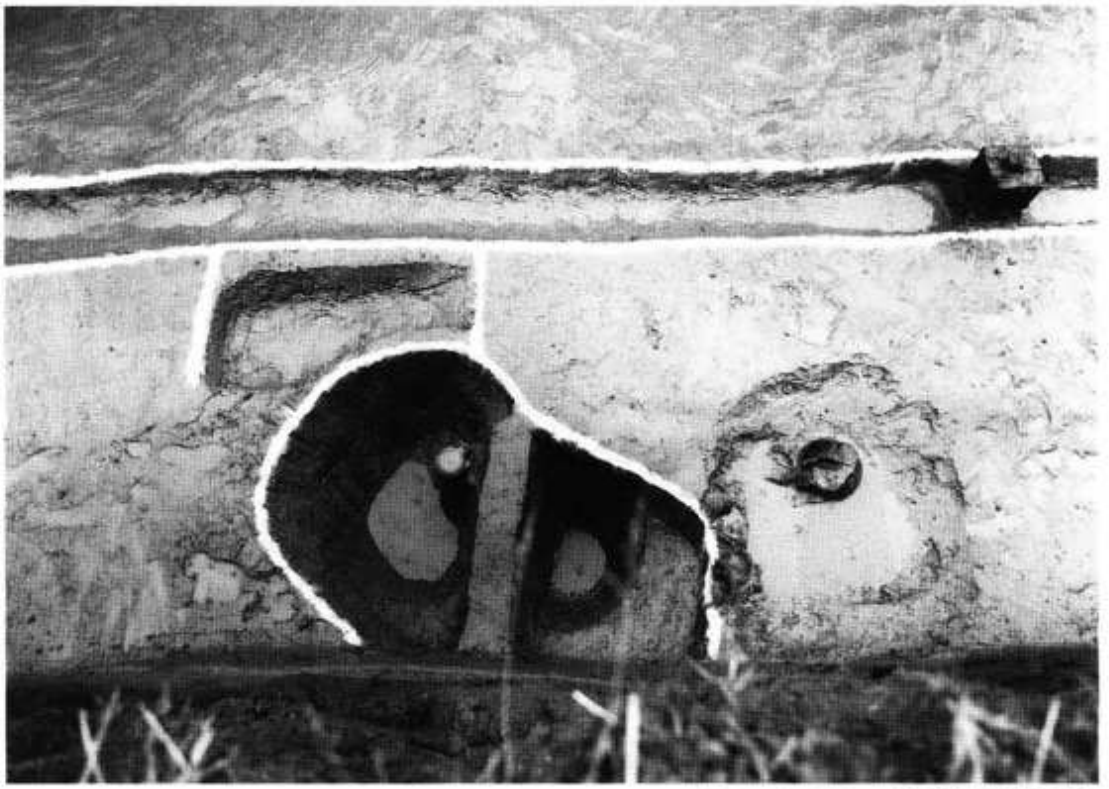
したものと推定され、今後、周辺の調査においては当該期の集落の存在にも注意をはらう必要があろう。

註記

註1　成海佳子1988「24　中田遺跡（第1次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告16　（財）八尾市文化財調査研究会



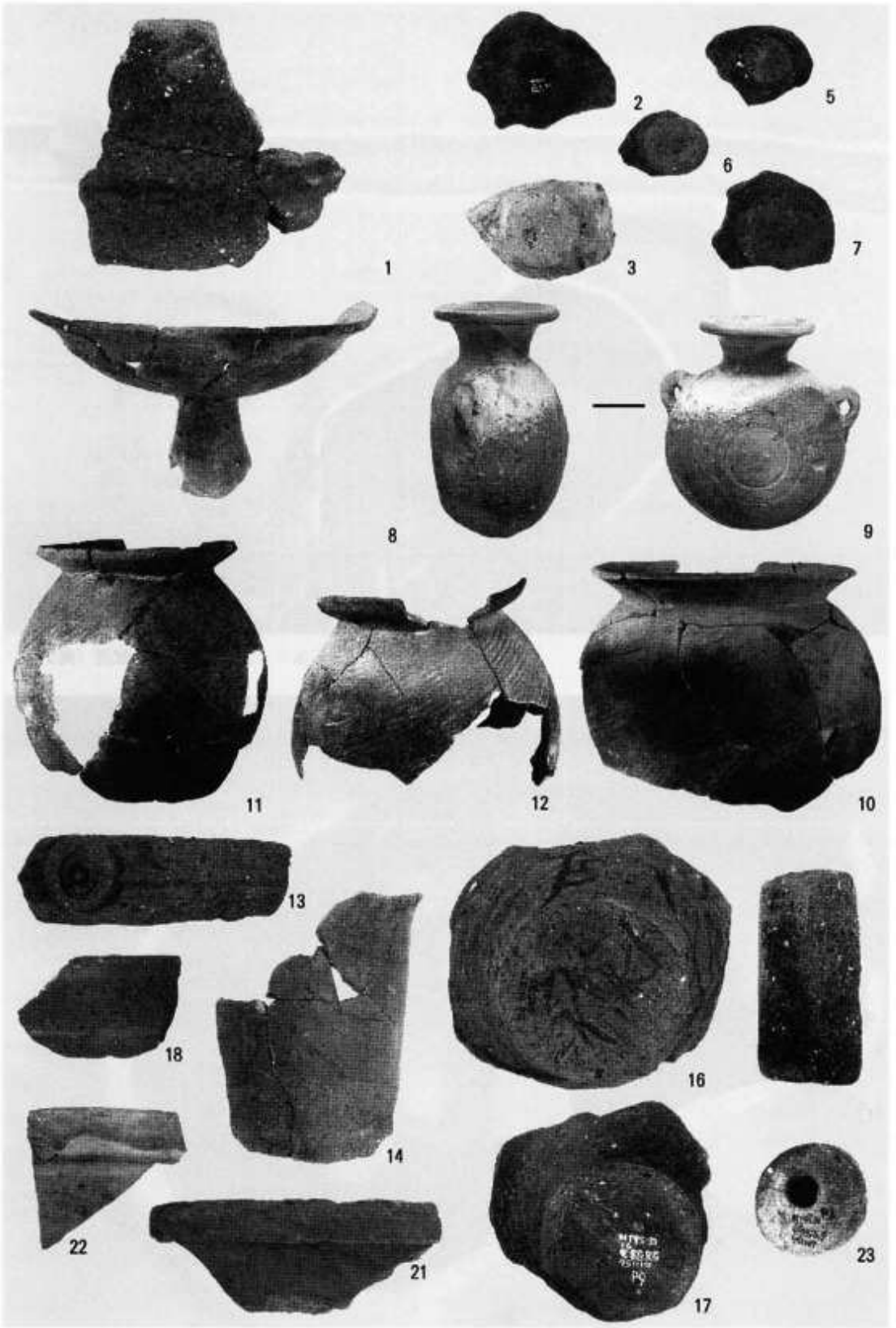
調査区全景（東から）



ＳＫ－４、ＳＷ－１検出状況（南から）

ＳＫ－４検出状況（北から）

図版三



SK－3（1～8）、SK－4（9）、SW－1（10～12）、包含層（13・14・16・17・18・21～23）出土遺物

Ⅶ　八尾南遺跡第22次調査（ＹＳ95－22）

例　言

1．本書は大阪府八尾市西木の本１丁目１番で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査である。

1．本書で報告する八尾南遺跡第22次調査（ＹＳ95－22）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋577－３号　平成７年３月13日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が松井義明氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成７年４月３日から４月18日にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は340㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・赤澤茂美・中谷喜多が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト－中村百合・西岡千恵子、トレース－市森千恵子が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……87

2．調査概要……88

　1）調査の方法と経過……88

　2）基本層序……89

　3）検出遺構と出土遺物……90

　4）遺構に伴わない出土遺物……90

　5）出土遺物観察表……94

3．まとめ……99

Ⅶ　八尾南遺跡第22次調査（ＹＳ95－22）

1．はじめに

八尾南遺跡は大阪府八尾市の南西部にあたる若林町・西木の本の一帯に広がる遺跡である。周辺の遺跡には、西側に市域を境とする長原遺跡（大阪市）をはじめとし、東に木の本遺跡、南西に太田遺跡・津堂遺跡（藤井寺市）、北に城山遺跡（大阪市）が存在している。

当遺跡は、昭和53年度～昭和54年度の２年度にわたり地下鉄谷町線八尾南駅建設工事に伴う発掘調査が実施され、後期旧石器時代から鎌倉時代に至る複合遺跡として認識された。それ以後、府教委、市教委、当調査研究会により、数十件の発掘調査を現在までに実施している。これらの調査成果から、特に当遺跡の南部には旧石器時代～鎌倉時代に至る遺構・遺物が重複し、広範囲に分布していることが明らかになっている。

第１図　調査周辺図及び位置図

2．調査の概要

1） 調査の方法と経過

発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、八尾市教育委員会の指示に基づき、当調査研究会が事業者と協定書を締結して調査を実施した。今回の発掘調査は、当調査研究会が実施した第22次調査にあたる。調査地（第２図）は、当遺跡の北部の沖積地上に位置し、大阪市との境界にあたる。周辺では弥生時代後期末から中世の遺構・遺物が検出されている。

調査にあたっては、建築基礎杭部分に上幅６ｍ×45.5ｍ（下幅４ｍ×43ｍ）のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。

調査の掘削は、市教委が実施した遺構確認調査、当地南部の隣接で実施している第10次調査の成果から弥生時代後期～古墳時代中期にかけての包含層を確認しており、その結果をもとに上部約1.7ｍについては機械掘削を実施した。しかし、調査を進めるにしたがって壁面の崩壊が著しく、東部の大半は調査不能の状態になった。これらの諸事情により当初設定した調査区が若干である南へずれたかたちとなった。さらに調査区の規模も上部（約48.5ｍ×6.5～7.5ｍ）がやや広くなった。人力掘削については0.3～0.4ｍの土層を掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。以下、調査成果について述べる。

第２図　調査区位置図

2）　基本層序

第1層　耕土。層厚　15cm前後。調査前までの水田耕作土。

第2層　褐灰色砂質混粘土。層厚15cm。床土。

第3層　灰黄茶色砂礫。層厚20cm。0.5～1.0cm前後の砂粒を含む。

第4層　灰茶色細砂混粘土。層厚10cm。

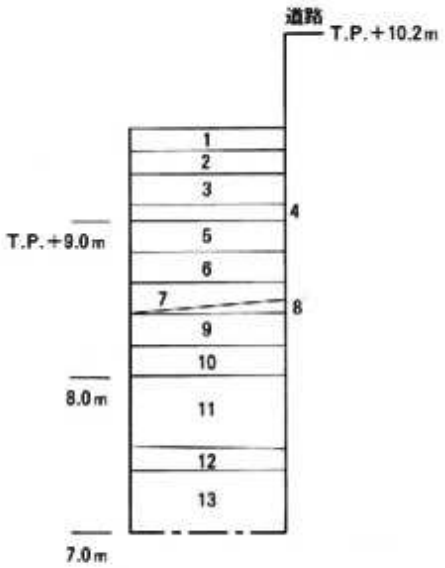
第5層　灰茶色～明茶灰色微砂混細砂。層厚20cm。

第6層　褐灰青色粘土混細砂。層厚20cm前後。平安時代以降の洪水層。

第7層　灰白色～青灰色細砂。層厚10～20cm。粘土を含む。

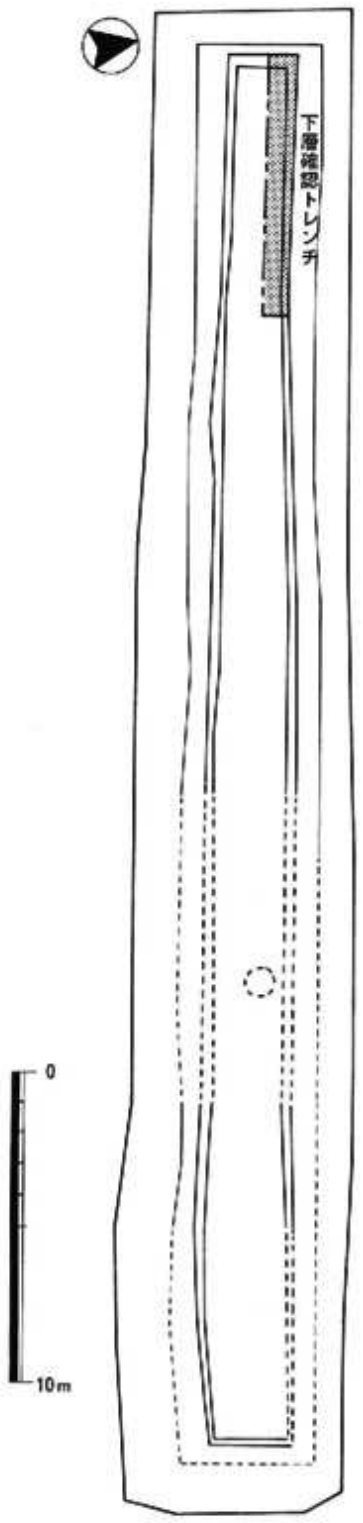
第8層　暗灰色粘土。層厚10cm。細砂を少量含む。奈良時代の遺物を含む。

第9層　灰色粘土混シルト。層厚20cm。



1　耕土
2　褐灰色砂質混粘土（床土）
3　灰黄茶色砂礫
4　灰茶色細砂混粘土
5　灰茶色～明茶灰色微砂混細砂
6　褐灰青色粘土混細砂
7　灰白色～青灰色細砂
8　暗灰色粘土
9　灰色粘土混シルト
10　灰色粘土
11　暗灰黒色粘土
12　暗灰青色粘質土
13　青灰色シルト

第3図



第4図　平面図

第10層　灰色粘土。層厚20cm前後。粘着性の強い粘土。

第11層　暗灰黒色粘土。層厚40～50cm。粘着性の強い粘土である。弥生時代後期末～古墳時代中期の遺物を含む土層。部分的に炭が多量に含み黒く見える部分が見られた。

第12層　暗灰青色粘質土。層厚20cm。弥生時代後期末～古墳時代中期の遺構面。

第13層　青灰色シルト。層厚40cm。

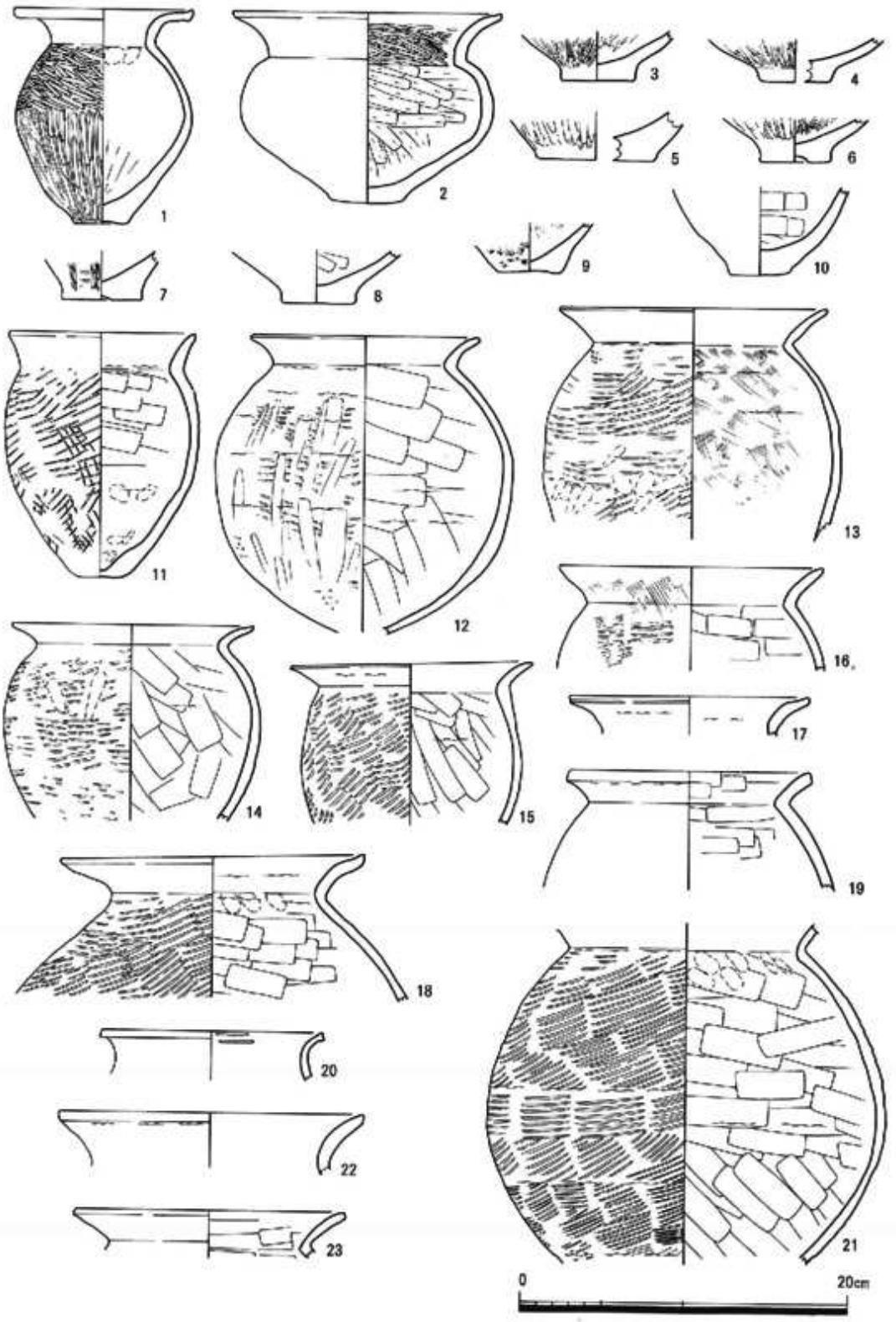
なお、第3図に掲載しているのは、調査区の基本層序の柱状図である。

3）検出遺構と出土遺物

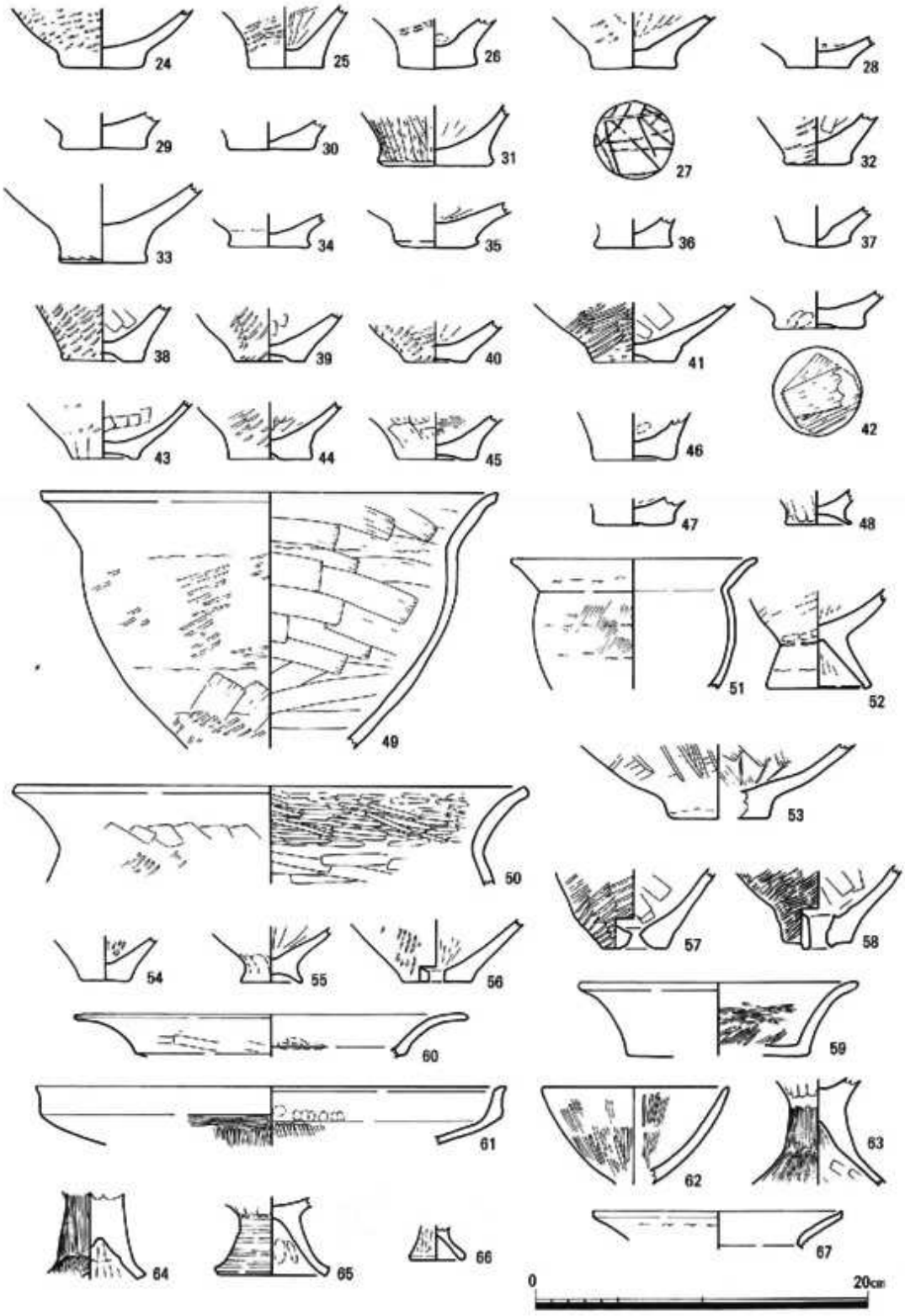
調査の結果、第11層内より弥生時代後期末～古墳時代中期の遺物を出土した。この層は厚く堆積しており、遺構は第12層上面より切り込んでいるのが見られた。が、地下水位高く、調査面の土層が浮き上がる。壁面が脆く、崩壊が著しい等の諸事情により詳細な調査ができなかった。実測や写真などの記録は取れなかったが、調査区中央よりやや東側で土坑を確認した。また、下層確認調査では柱穴と思われるピットを検出した。

4）遺構に伴わない出土遺物

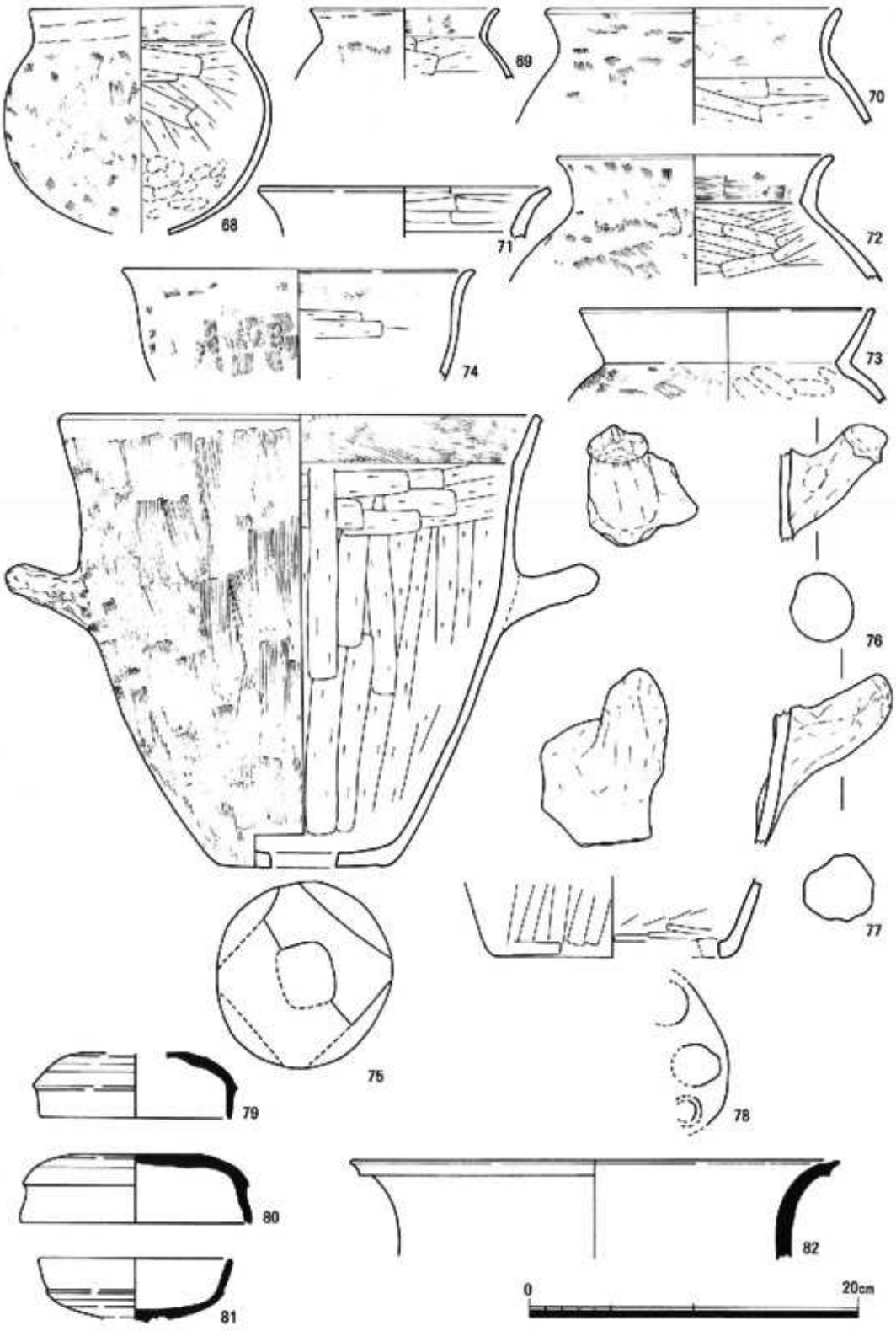
第6層・第8層・第10層・第11層内で出土した。第6層では平安時代末～鎌倉時代の土師器・瓦器の小片をごく少量出土した。第8層では奈良時代の土師器の杯片を出土している。第10層・第11層では弥生時代後期末から古墳時代中期に比定される弥生土器・土師器・須恵器が混在した状態で出土している。出土遺物はコンテナにして約3箱分を数える。図示できたもの82点で第10層・第11層から出土した土器である。弥生時代後期末に比定されるものは壺（1～10）・甕（11～47）・鉢（48～55）・有孔鉢（56～58）・高坏（59～65）・製塩土器（66）、古墳時代前期に比定される庄内式甕（67）、古墳時代中期に比定される甕（68～73）・甑（74～78）・須恵器の杯蓋（79・80）・高坏（81）・甕（82）である。



第５図　遺構に伴わない出土遺物実測図１



第6図　遺構に伴わない出土遺物実測図2



第７図　遺構に伴わない出土遺物実測図

5）出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 口径 (cm) 器高	成形・技法	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
1 三	壺 弥生土器	口径 10.8 底径 3.2 器高 13.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ、内面上部ナデ・指頭圧痕残存、下部ヘラナデ、底部外面ナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	2/3	
2 三	同上	口径 16.2 底径 4.4 器高 11.9	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ。体部外面剥離の為観察不明、内面板ナデ	外：暗茶赤褐色 内：淡灰茶色～淡赤茶色	5mm以下の砂粒を多量含む（長石・石英・雲母）	良好	2/3	
3	同上	底径 4.2	体部内外面ヘラミガキ。底部ナデ、モミガラ痕（7ケ）を有す	外：暗灰褐色～淡黄灰色 内：暗灰褐色	4mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）	良好	底部完形	
4 三	同上	底径 4.0	体部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。底部外面ヨコナデ	淡緑灰色	4mm以下の砂粒を多量含む（角閃石・石英・雲母・赤褐色酸化粒）	良好	底部1/2	
5	同上	底径 7.0	体部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、底部ナデ。モミガラ痕（7ヶ）を有す	外：黒灰色～淡茶灰色 内：茶灰色	1mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英・雲母・赤褐色酸化粒）	良好	底部1/2	黒斑有り
6	同上	底径 4.0	体部内外面ヘラミガキ、体部下部外面ヨコナデ、底部外面ヨコナデ	外：明橙茶褐色 内：暗灰茶褐色	1mm以下の砂粒を微量に含む（長石・石英）	良好	底部完形	
7	同上	底径 4.8	体部外面タタキ後ヘラミガキ、内面ヘラナデ。底部外面ナデ	明茶灰色	1mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英・赤褐色酸化粒・雲母）	良好	底部1/2	
8	同上	底径 4.0	外面ナデ、内面板ナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英・雲母）	良好	底部完形	
9	同上	底径 3.8	体部外面タタキ後ハケナデ、内面ハケナデ。底部外面ナデ	淡黄灰褐色	2mm以下の砂粒を微量に含む（長石・雲母）	良好	底部完形	黒底有り
10 三	同上	底径 3.4	外面ナデ、内面板ナデ	淡灰茶色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・石英）	良好	底部完形	黒斑有り
11 三	壺 弥生土器	口径 11.2 底径 2.6 器高 15.2	口縁部内外面ヨコナデ・接合痕残存。体部外面タタキ（3本）、内面上部ヘラナデ、下部ナデ・指頭圧痕	暗灰褐色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・石英・雲母）	良好	1/2	
12	同上	口径 18.6 最大径17.9	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タタキ後板ナデ・接合痕残存、内面ヘラナデ・接合痕	外：淡茶灰色 内：灰黒褐色	5mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	1/4	煤付着
13 三	同上	口径 16.0 最大径18.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タタキ（4本）下部に指頭圧痕残存、内面ハケナデ（10本）・接合痕	淡黄茶灰色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	1/3	煤付着
14 三	同上	口径 14.6 最大径15.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。体部外面タタキ（4本）・指ナデ、内面ヘラナデ・接合痕残存	外：淡黄灰茶色 内：淡黄灰茶色～淡灰茶褐色	4mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）	良好	1/4	煤付着
15 三	同上	口径 14.4	口縁部内外面ヨコナデ・接合痕残存。体部外面タタキ（3本）、内面板ナデ・接合痕残存	外：淡黄灰茶色 内：暗灰茶褐色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	1/2	煤付着
16	同上	口径 15.8	口縁部外面ヨコナデ後ハケナデ（7本）、内面ヨコナデ。体部外面タタキ（3本）、内面ヘラナデ	淡褐灰色	5mm以下の砂粒を多量含む（長石・チャート）	良好	口縁1/6	
17	同上	口径 14.4	口縁部内外面ヨコナデ、接合痕	外：淡褐灰色 内：淡褐灰色～灰黒色	2mm以下の砂粒を含む（長石）	良好	口縁1/5	

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	口径 器高	調　整・技　法	色　調	胎　土	焼成	遺存状況	備考
18 四	甕 弥生土器	口径	18.3	口縁部内外面ヨコナデ・接合痕残存。体部外面タタキ（4本）、内面板ナデ、上部指頭圧痕残存	淡茶灰色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	1/4	
19	同上	口径	14.4	外面ヨコナデ・接合痕残存、内面ヘラナデ	淡橙灰色	1.5mm以下の砂粒を含む（長石）	良好	口縁1/5	煤付着
20	同上	口径	13.2	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・一部ヘラミガキ	暗灰褐色	2mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	口縁1/6	
21 四	同上	最大径	21.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タタキ（4本）・接合痕残存、内面板ナデ・接合痕、肩部に指頭圧痕残存	淡茶灰色	5mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	1/3	煤付着
22	同上	口径	1.4	口縁部外面ヨコナデ・接合痕残存、内面磨耗の為調整不明瞭	明茶褐色	5mm以下の砂粒を多量含む（長石）	良好	口縁1/4	
23	同上	口径	16.2	口縁部外面ヨコナデ、内面板ナデ	淡灰褐色～赤褐色	3mm以下の砂粒を含む（長石・雲母・赤褐色酸化粒）	良好	口縁1/5	煤付着
24	同上	底径	2.8	体部外面タタキ（3本）内面磨耗の為調整不明瞭。底部外面ナデ	明茶灰色～乳灰色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・石英・雲母）	良好	底部1/2	
25	同上	底径	4.3	体部外面タタキ（2本）下部ナデ、内面ヘラナデ	外：赤褐色 内：茶灰色	2mm以下の砂粒を含む（長石）	良好	底部2/3	
26 四	同上	底径	4.7	体部外面タタキ、下部ナデ、内面ナデ・指頭圧痕残存	外：淡茶灰色 内：黒灰色	5mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	底部完形	
27	同上	底径	4.8	体部外面タタキ後ナデ、内面ナデ後指ナデ。底部外面木の葉痕を有す	外：淡灰茶色 内：黒灰色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	底部完形	煤付着
28	同上	底径	3.6	体部外面ナデ、内面ヘラナデ。底部外面ナデ後指ナデ	淡橙茶灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む（長石）	良好	底部2/3	
29	同上	底径	5.0	体部外面ヨコナデ、内面磨耗の為調整不明瞭。底部外面ナデ	淡茶灰色	2mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	底部完形	
30	同上	底径	4.8	体部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。底部外面ナデ	外：淡緑灰色 内：黒灰色	4mm以下の砂粒を少量含む（長石・角閃石・雲母）	良好	底部完形	煤付着
31	同上	底径	6.0	体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。底部外面ナデ	淡黄灰茶色	4mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英・雲母）	良好	底部1/2	
32	同上	底径	4.2	体部外面タタキ（3本）内面ヘラナデ・ナデ。底部外面ナデ	外：淡赤褐色 内：淡茶灰色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石）	良好	底部完形	黒斑有り
33 四	同上	底径	5.0	外面ナデ、下部に上黒痕有り、内面磨耗の為調整不明瞭	乳灰黄茶色	2mm以下の砂粒を多量含む（長石・石英）	良好	底部完形	
34	同上	底径	4.6	体部外面ナデ・接合痕残存、下部ヨコナデ、内面ヘラナデ。底部外面ナデ	外：明茶灰色 内：淡灰茶色	1mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英）	良好	底部1/2	黒斑有り
35	同上	底径	5.1	外面ナデ、内面ヘラナデ	外：乳灰褐色 内：乳褐灰色～黒灰色	2mm以下の砂粒を含む（長石）	良好	底部完形	黒斑有り

遺物番号 図版番号	器種	法量口径(cm)・器高	製作・技法	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
36	甕 弥生土器	底径 4.2	外面ナデ、内面指ナデ	淡明茶灰色	3mm以下の砂粒を多量含む(赤褐色酸化粒・長石・雲母)	良好	底部完形	
37	同上	底径 3.8	外面ナデ、内面板ナデ。底部に強い指頭圧痕残存、一底部外面に粘土塊強を有す	乳灰茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む(長石)	良好	底部完形	
38	同上	底径 4.6	外面タタキ(3本)、内面ヘラナデ。底部外面ナデ	外:乳灰茶色 内:淡橙茶	2mm以下の砂粒を微量に含む(長石)	良好	底部完形2/3	
39	同上	底径 4.0	外面タタキ(3本)、内面ヘラナデ。底部外面ナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒を多量含む	良好	底部完形	黒斑有り
40	同上	底径 3.2	外面タタキ(3本)、内面ヘラナデ後指ナデ。底部外面に木の葉痕を有す	暗灰茶褐色~明茶灰色	3mm以下の砂粒を多量含む(長石・雲母)	良好	底部2/3	
41 図	同上	底径 4.8	外面タタキ(3本)、内面板ナデ。底部外面ナデ	赤褐色	3mm以下の砂粒を多量含む(長石)	良好	底部1/2	
42	同上	底径 4.8	外面ナデ、下部に指頭圧痕残存、内面ナデ。底部外面ヘラケズリ	外:淡黄灰茶色 内:黒灰色	3mm以下の砂粒を少量含む(石英・長石・雲母)	良好	底部完形	
43 図	同上	底径 3.9	外面タタキと思われるが磨耗の為調整不明瞭、下部ヘラナデ、内面ヘラナデ。底部指ナデ、底部外面ナデ	外:茶灰色 内:褐灰色	3mm以下の砂粒を含む(長石・雲母)	良好	底部完形	黒斑有り
44 図	同上	底径 4.8	外面タタキ(3本)、内面ヘラナデ。底部外面ナデ	外:黒灰色~乳灰茶色 内:淡茶灰色	3mm以下の砂粒を少量含む(長石・雲母)	良好	底部完形	煤付着
45	同上	底径 4.4	外面ヘラケズリ、内面ハケナデ。底部外面ナデ	乳灰茶色	4mm以下の砂粒を少量含む(長石・雲母)	良好	底部1/2	
46	同上	底径 4.6	内外面ともにナデ、内面に指頭圧痕残存	外:乳灰茶色 内:灰黒色	4mm以下の砂粒を少量含む(長石・雲母)	良好	底部2/3	
47	同上	底径 4.9	外面ナデ、内面ヘラナデ	暗灰褐色	3mm以下の砂粒を多量含む(長石)	良好	底部完形	
48	鉢 弥生土器	底径 3.7	外面板ナデ、内面ヘラナデ。底部外面ナデ	淡灰茶褐色~明茶褐色	4mm以下の砂粒を少量含む(長石・雲母)	良好	底部完形	
49 図	同上	口径 27.6	口縁部外面ナデ後ヨコナデ、内面ヨコナデ。体部外面タタキ(3本)後ヘラナデ・接合痕残存、内面板ナデ	外:淡黄灰茶色 内:淡黄茶灰色	4mm以下の砂粒を多量含む(長石・雲母)	良好	1/3	黒斑有り
50	同上	口径 30.8	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ。体部外面タタキ後ナデ、内面ヘラナデ	乳灰茶色	3mm以下の砂粒を微量に含む(長石)	良好	口縁1/5	
51 図	同上	口径 14.6	口縁部外面ヨコナデ、体部ハケナデ(7本)後ナデ・接合痕残存、内面ナデ	淡褐灰色~黒灰色	3mm以下の砂粒を多量含む(長石・石英・赤褐色酸化粒)	良好	口縁1/5	煤付着
52	同上	底径 6.0	体部外面タタキ後ナデ・指頭圧痕残存、内面ヘラナデ(工具痕)。脚部外面ナデ・接合痕残存、内面ヘラナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒を多量含む(長石・石英・雲母)	良好	2/3	
53	同上	底径 6.0	体部外面タタキ(3本)後ヘラミガキ、下部ナデ・接合痕、内面板ナデ後ヘラで放射状にナデ	淡茶灰色	2mm以下の砂粒を含む(長石・石英・雲母)	良好	底部1/2	黒斑有り

遺物番号	器種	法量口径(cm)器高	調整・技法	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
54	鉢 弥生土器	底径　2.5	外面ナデ、内面ハケナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒を微量に含む（長石）	良好	底部1/2	
55	同上	底径　3.6	外面ナデ、下部指ナデ、内面ヘラナデ・ナデ。底部外面ナデ	淡灰茶色	2mm以下の砂粒を少量含む（長石）	良好	底部完形	黒斑有り
56	有孔鉢 弥生土器	底径　3.6	外面タタキ（3本）、一内面板ナデ（工具痕）。底部外面ナデ	淡灰茶色	2mm以下の砂粒を微量に含む（長石・石英）	良好	底部1/2	
57	同上	底径　3.8	外面タタキ（2本）、内面ヘラナデ。底部外面ナデ・穿孔を有す	乳橙灰色～乳灰橙色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・石英）	良好	底部完形	
58	同上	底径　4.0	外面タタキ（3本）、内面ヘラナデ。底部外面ヘラナデ・穿孔を有す	淡茶灰色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石）	良好	底部完形	
59	高坏 弥生土器	口径　16.4	坏部外面ヘラミガキと思われるが磨耗の為調整不明瞭。内面ヘラミガキ	外：黒灰色 内：乳黄灰茶色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・石英）	良好	坏部1/5	煤付着
60	同上	口径　12.0	坏部外面端部調整不明、下部ヘラナデ、内面ヨコナデ・指ナデ	明茶褐色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母・角閃石）	良好	坏部1/8	
61	同上	口径　28.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・指頭圧痕残存。体部内外面ヘラミガキ	乳褐灰色	2mm以下の砂粒を少量含む（長石）	良好	坏部1/5	
62	同上	口径　11.0	端部内外面ともにヨコナデ。坏部内外面ともにヘラミガキ	暗褐灰色	2mm以下の砂粒を含む（長石・雲母）	良好	坏部1/4	
63	同上		体部外面ヘラナデ、内面ナデ。脚部外面ヘラミガキ後ヘラ削さえ、内面しぼり目、下部ヘラナデ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石）	良好	柱状部完形	
64	同上		脚部外面ヘラミガキ、内面しぼり目・接合痕残存、下部ヘラナデ	淡褐灰色	2mm以下の砂粒を多量含む（長石）	良好	柱状部完形	
65	同上	底径　6.4	底部外面ヘラナデ、内面ナデ。脚部外面ヘラ状のもので横に線状痕残存、下部ヨコナデ、内面ナデ・指頭圧痕残存、下部ヨコナデ	乳灰茶色	3mm以下の砂粒を含む（長石）	良好	脚部2/3	
66 四	製塩土器	底径　3.0	脚部外面指ナデ、内面ナデ	外：暗茶褐色 内：淡灰茶褐色	1mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）	良好	底部完形	
67	甕 古式土師	口径　15.0	外面ヨコナデ一接合痕、内面口縁部ヨコナデ。底部ヘラナデ	暗灰茶色	1mm以下の砂粒を含む（長石・角閃石）	良好	口縁1/5	
68 四	甕 土師器	口径　13.4 最大径16.1	口縁部外面ヨコナデ・接合痕残存、内面ハケナデ。体部外面ハケナデ（12本）、内面ヘラケズリ、下部ナデ・指頭圧痕残存	外：明赤茶褐色～暗灰茶褐色内：淡灰茶色	4mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英・雲母）	良好	3/4	
69	同上	口径　11.0	口縁部外面ヨコナデ、接合痕整残存、内面ハケナデ。体部外面ハケナデ、内面ヘラケズリ	外：明茶橙色～暗灰茶褐色内：暗灰茶褐色	1mm以下の砂粒を微量に含む（長石・石英）	良好	口縁1/4	
70 五	同上	口径　17.4	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ。体部内面ヘラケズリ	淡灰茶色	2mm以下の砂粒を含む（長石・赤褐色酸化粒）	良好	口縁1/7	

遺物番号 図版番号	器種	法量口径 (cm) 器高	調整・技法	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
71	壺 土師器	口径 17.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケナデ（9本）、内面指ナデ	淡黄灰茶褐色	3mm以下の砂粒を多量含む（雲母・長石）	良好	口縁1/3	
72	同上	口径 16.4	外面ハケナデ、内面口縁部ハケナデ。体部ヘラケズリ	淡黄灰茶色	4mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英・雲母）	良好	口縁1/3	
73 四	同上	口縁 17.6	端部外面ナデ、口縁部外面ハケナデ（12本）後ヨコナデ・接合痕残存、内面ハケナデ（12本）。体部外面ハケナデ（12本）、内面ヘラケズリ	外：褐灰茶色～明茶橙色 内：淡橙赤茶色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・石英・雲母）	良好	口縁1/4	
74	壺 土師器	口径 21.0	口縁部外面ハケナデ後ヨコナデ、内面ハケナデ、端部内面ヨコナデ。体部外面ハケナデ（8本）、内面ヘラケズリ	淡茶灰色	1mm以下の砂粒を微量に含む（長石）	良好	口縁1/6	
75 五	同上	底径 28.8	外面端部ヨコナデ、体部ハケナデ（8本）、底部ナデ、取手上部指ナデ、下部ヘラケズリ、内面口縁部ハケナデ（10本）体部ヘラケズリ、底部四隅と中央に穿孔を有す	淡茶灰色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	ほぼ完形	
76	同上		外面ナデ、内面ヘラナデ	淡灰褐色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・角閃石・チャート）	良好		
77 五	同上		外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラケズリ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・赤褐色酸化粒）	良好		
78	同上	底径 14.0	体部内外面ともにヘラナデ。底部外面ナデ、3個以上の穿孔を有す	乳茶灰色	3mm以下の砂粒を含む（長石）	良好	底部1/4	
79 五	坏蓋 須恵器	口径 11.4	外面天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ、内面回転ナデ。底部ナデ	灰黒色	精良	良好	1/2	
80 五	同上	口径 14.0 器高 4.2	外面天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ、内面回転ナデ	外：淡灰色 内：乳灰茶色	3mm以下の砂粒を少量含む	良好	1/3	ロクロ左方向
81 五	高坏 須恵器	口径 11.6	外面坏部回転ナデ、底体部回転ヘラケズリ、内面回転ナデ	淡青灰色	精良	良好	1/2	
82 五	甕 須恵器	口径 29.8	内外面ともに回転ヨコナデ	灰黒色	精良	良好	口縁1/5	

3．まとめ

今回の調査は、隣接する既往調査の成果を踏まえて、調査を進めたが遺構を詳細に明確することはできなかった。しかし、弥生時代後期末～古墳時代中期の遺物を含む層が厚く堆積し、広範囲に残存していることは明らかである。隣接の調査においても同様の土層状況が確認されている。

参考文献

米田敏幸他　1981「八尾南遺跡」－大阪市高速電気軌道２号線建設工事に伴う発掘調査報告書－

米田敏幸　1983.3「第４章　八尾南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度』八尾市教育委員会

駒沢敦　1984「３．八尾南遺跡第１次調査」『昭和58年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告5

米田敏幸　1985.3「４．八尾南遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11 昭和59年度国庫補助事業

西村公助　1988「12．八尾南遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告16

近江俊秀他　1989.3「８．八尾南遺跡（63-075）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業

米田敏幸　1989.3「７．八尾南遺跡（63-084）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業

成海佳子　1989「21　八尾南遺跡（第11次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25

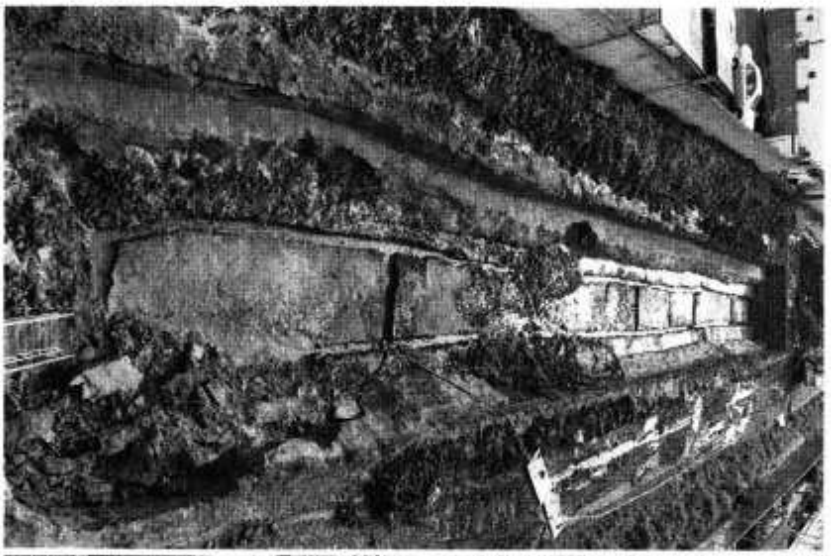
高萩千秋　1990「７．八尾南遺跡（YS89-16）」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告28

西村公助　1993「Ⅵ　八尾南遺跡第7次調査（YS86-7）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』（財）八尾市文化財調査研究会報告41

成海佳子　1994「Ⅱ　八尾南遺跡第10次調査（YS87-10）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告40

西村公助　1994「Ⅷ　八尾南遺跡第19次調査（YS93-19）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』

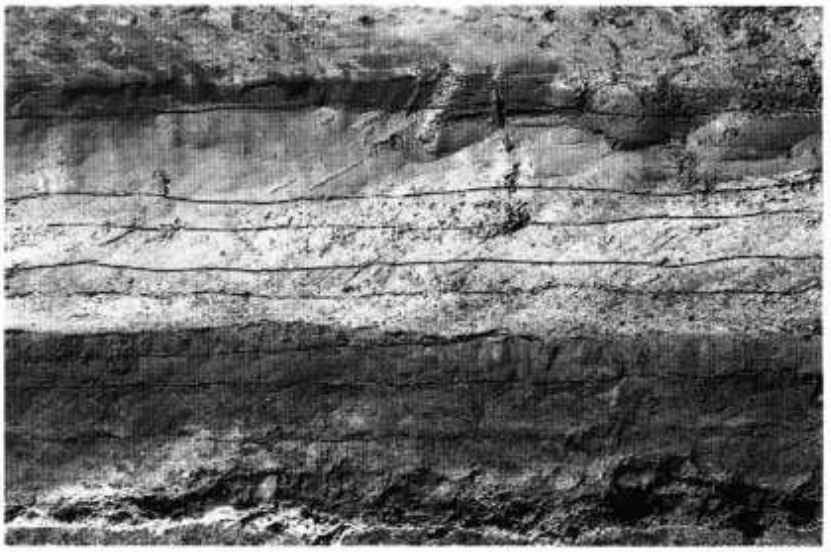
図版一



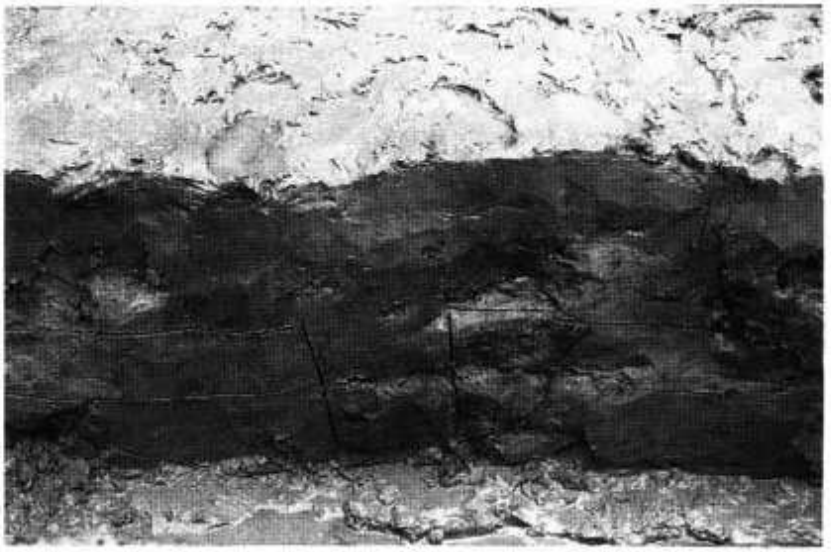
調査区全景（東から）

調査区全景（西から）

調査区西部
南壁（北から）



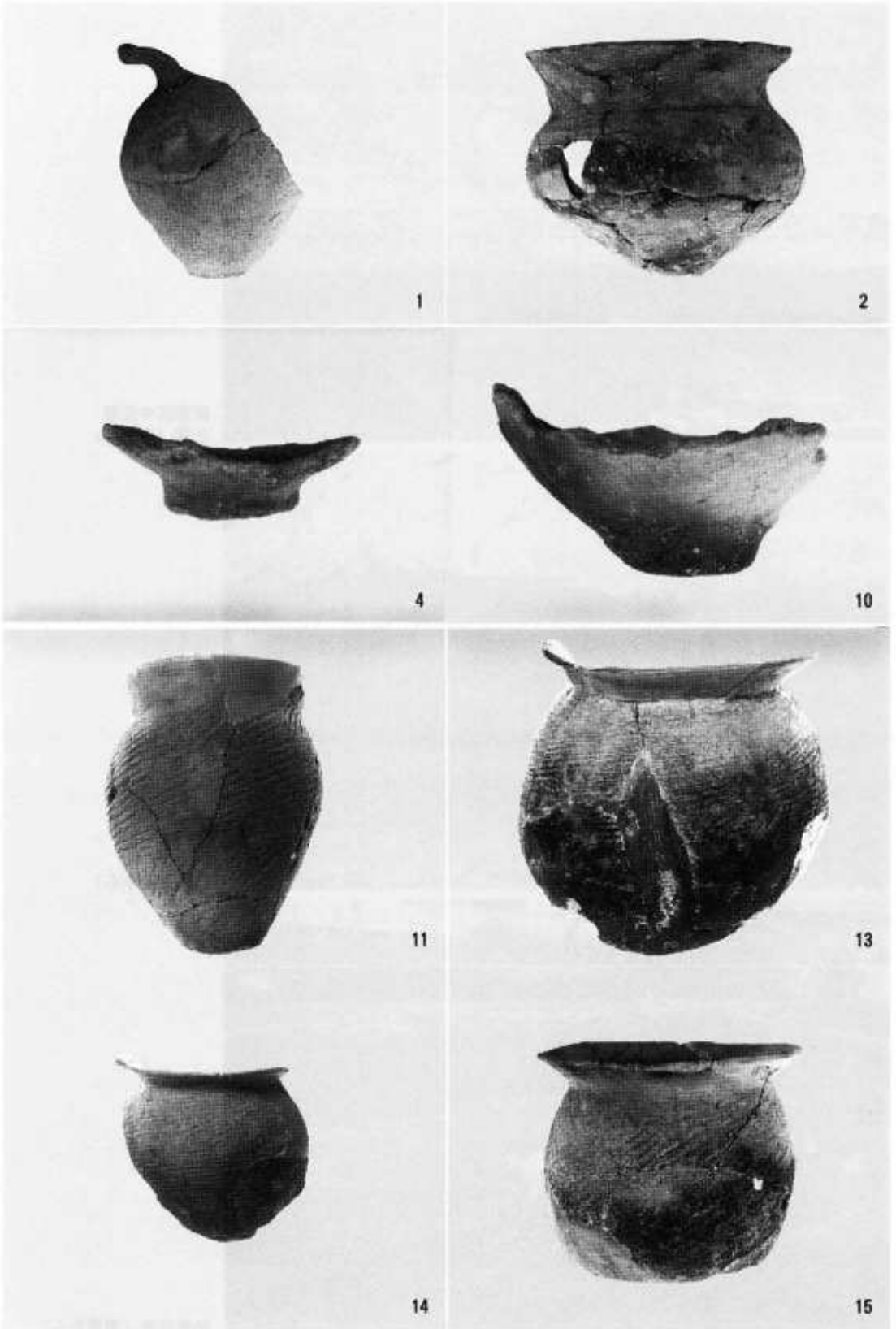
調査区中央部
北壁（南から）

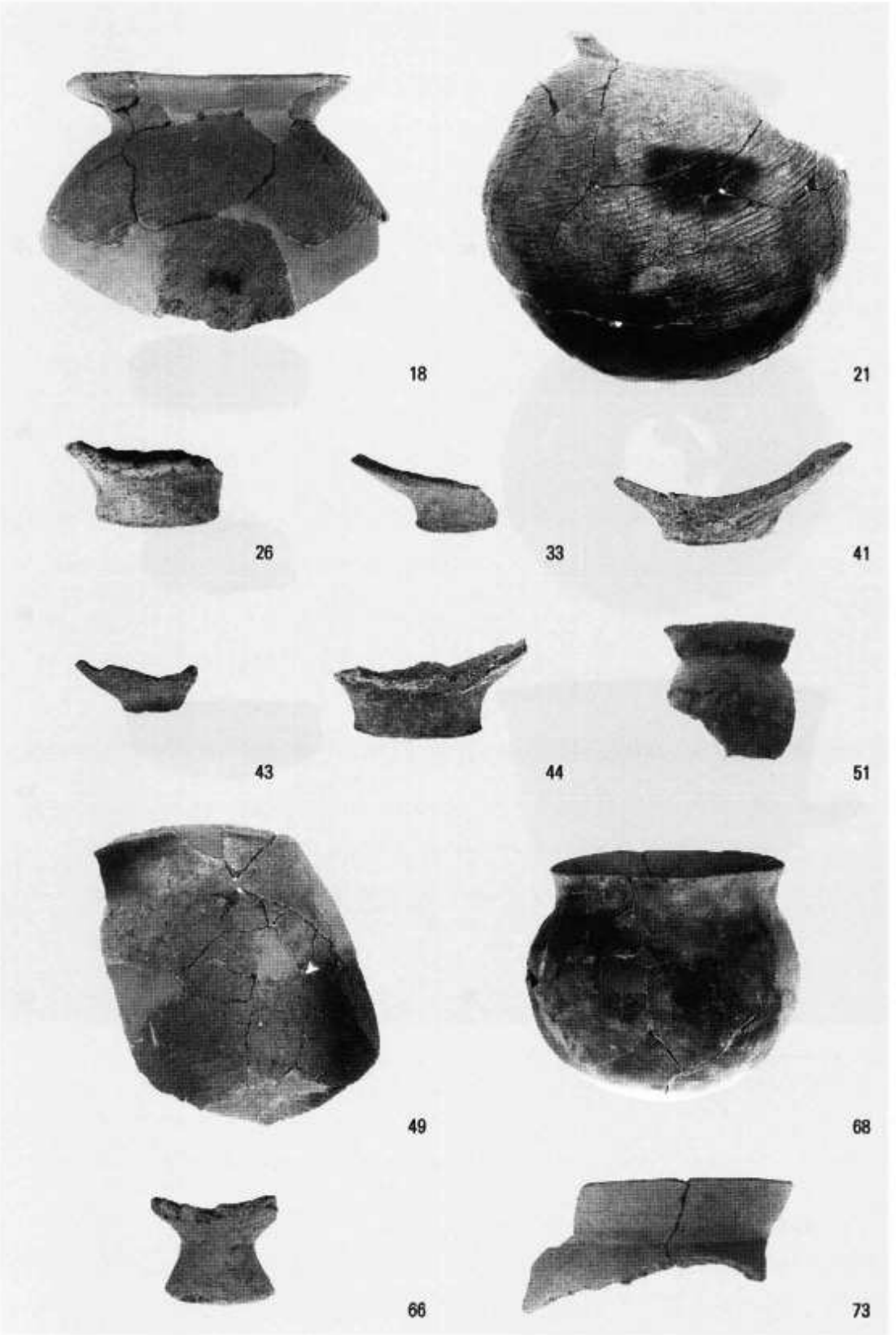


調査区西部
北壁（南から）

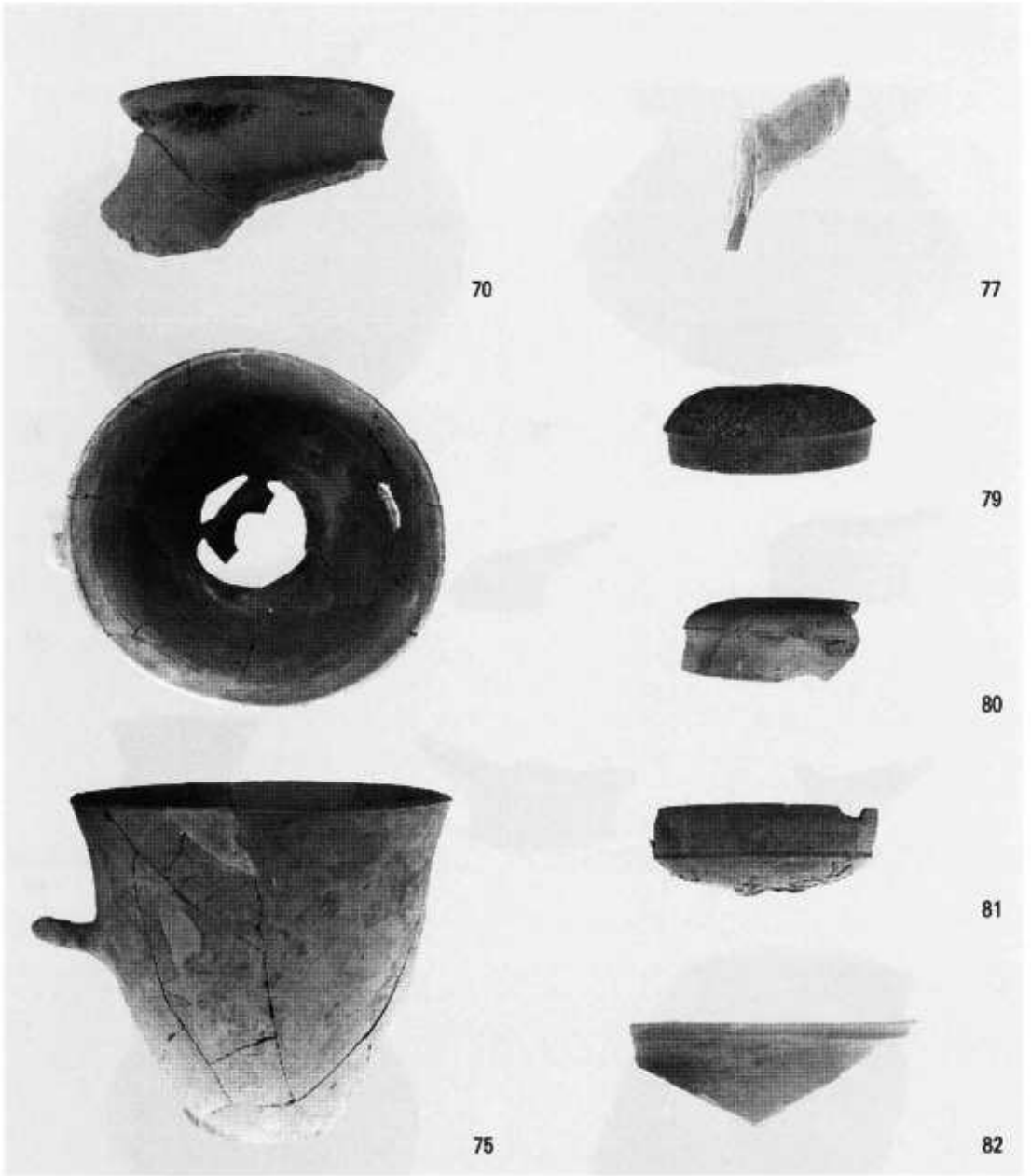
調査風景（南東から）

図版三




18
21
26
33
41
43
44
51
49
68
66
73

図版五



Ⅷ　八尾南遺跡第24次調査（ＹＳ95－24）

例　言

1．本書は大阪府八尾市若林町２丁目地内で実施した電気管路埋設工事に伴う発掘調査である。

1．本書で報告する八尾南遺跡第24次調査（ＹＳ95－24）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋294－３号　平成７年８月28日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が関西電力(株)から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成７年９月27日から９月29日にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は34㎡を測る。

1．本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレース－中村百合・西岡千恵子・市森千恵子が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに ……105

2．調査概要 ……107

　1）調査の方法と経過 ……107

　2）基本層序 ……108

　3）検出遺構と出土遺物 ……111

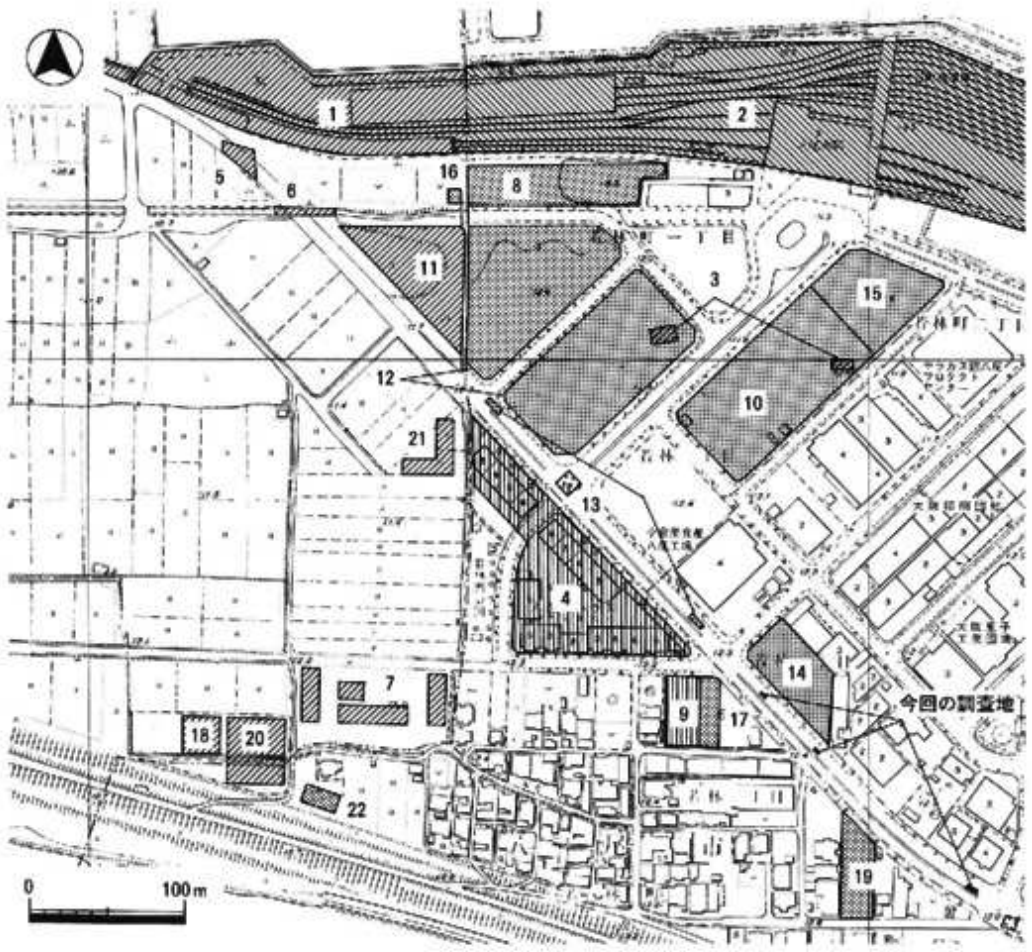
3．まとめ ……112

Ⅷ　八尾南遺跡第24次調査（ＹＳ95－24）

1．はじめに

八尾南遺跡は、大阪府八尾市の南西部にあたる若林町１～３丁目・西木の本１～４丁目一帯に広がっている遺跡である。周辺の遺跡には、西側に市域を境とする大阪市長原遺跡をはじめとし、東に八尾市木の本遺跡、南に藤井寺市津堂遺跡、北に大阪市城山遺跡が存在している。

当遺跡は、昭和53～54年度に地下鉄谷町線八尾南駅建設工事に伴う発掘調査が実施され、後期石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡として認識された。それ以後も、当遺跡では、現在までに数十件の発掘調査が実施されている。調査主体の内訳として大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・八尾南遺跡調査会・当調査研究会がある。これらの調査成果から、特に当遺跡の南部



第１図　調査地位置図及び周辺図

調査地周辺の発掘調査一覧表

	調査原因	調査地	年度	調査主体	文　献
1	地下鉄谷町2号線建設	木の本・若林・大阪市長吉	1977	長原遺跡調査会	「長原遺跡発掘調査報告Ⅲ」
1−1	地下鉄谷町線建設	長吉川辺3丁目	1977	長原遺跡調査会	「長原遺跡発掘調査報告Ⅰ」
1−2	地下鉄谷町2号線建設	長吉川辺3丁目	1978	長原遺跡調査会	「長原遺跡発掘調査報告ⅩⅤ」
2	地下鉄谷町2号線建設	木の本・若林町	1978	八尾南遺跡調査会	「八尾南遺跡」1977
3	範囲確認	若林町1丁目	1979	八尾市教育委員会	「八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要」八尾市文化財調査報告6　1981
4	分譲住宅建設	若林町2丁目	1980	八尾市教育委員会	−
5	区画整理事業	長吉川辺3丁目	1980	㈱大阪市文化財協会	「長原遺跡発掘調査報告Ⅷ」
6	区画整理事業	長吉川辺3丁目	1981	㈱大阪市文化財協会	「長原遺跡発掘調査報告Ⅹ」
6−1	区画整理事業	長吉川辺3丁目	1982	㈱大阪市文化財協会	−
7	大阪市営住宅建設	長吉川辺3丁目	1982	㈱大阪市文化財協会	−
8	分譲住宅建設（YS83−2）	若林町1丁目	1984	当調査研究会	「1.八尾南遺跡（第2次調査）」『昭和59年度事業概要報告』当調査研究会報告7　1985
9	共同住宅建設	若林町3丁目	1984	八尾市教育委員会	「4.八尾南遺跡〈若林町3丁目117〜119〉」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11　1985.3
10	病院建設（YS87−5）	西木の本1丁目	1986	当調査研究会	「7.八尾南遺跡（第5次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』当調査研究会報告16　1987
11	事務所建設（YS89　15）	若林町1丁目	1989	当調査研究会	「11.八尾南遺跡（第15次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』当調査研究会報告28　1989
12	大阪市住宅供給公社八尾南分譲住宅建設（NG86−3）	長吉川辺3丁目	1986	大阪市教育委員会 ㈱大阪市文化財協会	「ⅩⅣ.平野区長原遺跡」『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1988.3
13	ポンプ場・導入路建設（YS87−9）	若林町1丁目	1987	当調査研究会	「10.八尾南遺跡（第9次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』当調査研究会報告16　1987
14	公共下水道工事	若林町	1988	大阪府教育委員会	『八尾南遺跡　田石器出土第3地点−』第31　1989.3
15	工場建設（YS88−12）	若林町2丁目	1988	当調査研究会	「22.八尾南遺跡（第12次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』当調査研究会報告25　1988
16	事務所建設（YS88−13）	若林町1丁目	1988	当調査研究会	「23.八尾南遺跡（第13次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』当調査研究会報告25　1988
17	公共下水道工事（YS87−1）	大阪市長吉	1988	当調査研究会	「24.長原遺跡（第1次調査）」「八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』当調査研究会報告25　1989
18	共同住宅建設（YS89−14）	若林町3丁目	1989	当調査研究会	「11.八尾南遺跡（第14次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』当調査研究会報告28　1989
19	学園建設（NG89−48）	長吉川辺3丁目	1989	㈱大阪市文化財協会	−
20	社屋建設（YS91−17）	若林町3丁目	1990	当調査研究会	「19.八尾南遺跡第17次調査（YS91−17）」『平成2年度㈱八尾市文化財調査研究会事業報告』1990
21	共同住宅建設（NG93−1）	長吉川辺3丁目	1993	㈱大阪市文化財協会	「古墳時代のまつりのあと」『華火』
22	共同住宅建設（NG93−56）	長吉川辺辺3丁目	1994	㈱大阪市文化財協会	「井戸」『華火』49号　1994.4
23	電気管路埋設工事（YS94−20）	若林町3丁目地内	1994	当調査研究会	−
24	共同住宅建設（YS95−23）	若林町3丁目152	1995	当調査研究会	−

には旧石器時代～鎌倉時代に至る遺構・遺物が重複し、広範囲に分布していることが明らかになっている。今回の調査地は、当遺跡の西南部に位置し、当調査研究会が実施した第24次調査にあたる。

2．調査の概要

1）　調査の方法と経過

発掘調査は地中配電管路工事に伴うもので、八尾市教育委員会の指示に基づき、当調査研究会が事業者と協定を締結して調査を実施した。

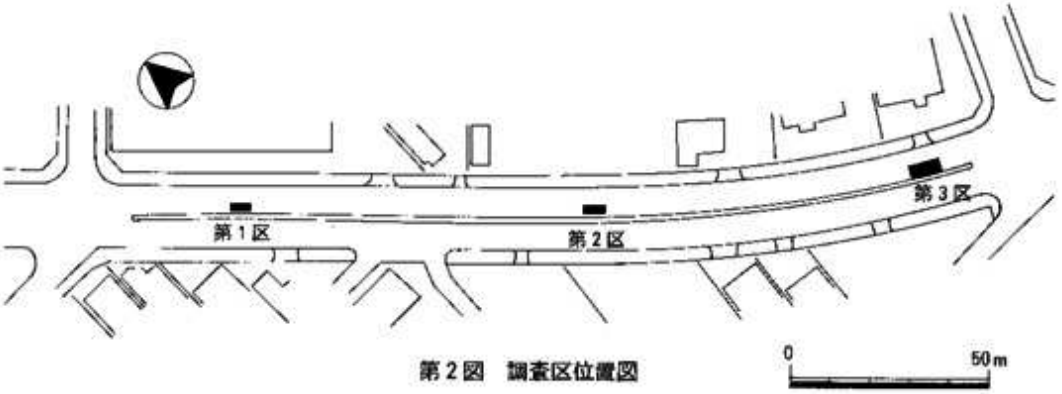
調査区は、人孔部分の１ヶ所（7.2×3m＝21.6㎡）、開削部分２ヶ所（5×1.2m＝6㎡）である。総計面積は約34㎡を測る。調査については道路上の規制など諸事情があり、すべて夜間調査となる。まず、北部の開削部分２ヶ所（第１区・第２区）から調査（９月27日～28日）を行う。調査区では東部に隣接する第12次調査（註１）で、古墳時代中期の遺構・遺物が現地表下1.2m（標高10.0m）前後で確認されており、その調査成果を参照にして機械及び人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。また、下層においては工事掘削で破壊される深度部分について地層状況の確認を行った。続いて北部の調査区終了後、第２区の調査区から南東へ約150m地点にあたる人孔部分（第３区）の調査（９月28日～29日）を行う。第３区では南部に隣接する第１次調査（註２）で、弥生時代後期～鎌倉時代の遺構・遺物が現地表下1.2m（標高11.3m前後）で確認されており、その調査の成果を参考に機械及び人力掘削を行う。また、北部の調査と同様、工事掘削深度までの地層状況について調査した。

以下、今回の調査成果について記す。

註

註１　原田昌則　1994「１．八尾南遺跡第８次調査」『八尾南遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』（財）八尾市文化財調査研究会

註２　駒沢　敦　1983「八尾南遺跡第１次調査」『昭和58年度事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会



第２図　調査区位置図

2） 基本層序

第2図に掲載しているのは第1区～第3区で確認した断面図である。以下、各区の層序について記す。

第1区

第1層　盛土。層厚約65cm。アスファルト・バラス・区画整理で整地した盛土。

第2層　旧耕土。層厚10cm前後。区画整理で整地されるまでの耕作土である。ほとんどが削平を受けている。

第3層　緑灰色細砂混粘質土。層厚5～15cm。床土である。

第4層　暗灰褐色細砂。層厚25～40cm。中近世の土層である。

第5層　灰褐色細砂。層厚5～30cm。

第6層　淡茶灰色微砂。層厚15～20cm。

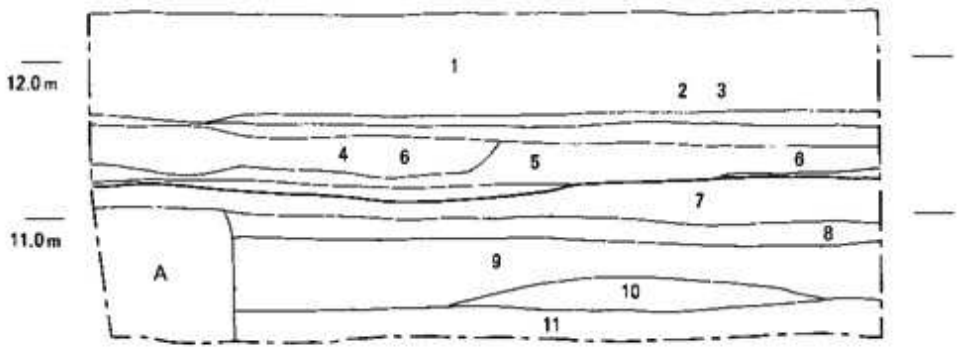
第7層　暗灰色粘土。層厚15～40cm。この上面が古墳時代のベース面と思われる。

第8層　灰色シルト。層厚15cm前後。

第9層　灰青色粘質シルト。層厚30～40cm。

第10層　淡灰色細砂。層厚15～20cm。凸レンズ状に堆積する。

第11層　黒灰色粘土。層厚20cm前後。



1　盛土
2　旧耕土
3　緑灰色細砂混粘質土
4　暗灰褐色細砂
5　灰褐色細砂
6　淡茶灰色微砂
7　暗灰色粘土
8　灰色シルト
9　灰青色粘質シルト
10　淡灰色細砂
11　黒灰色粘土
12　灰青色粘質シルト
A　暗灰色砂礫混細砂粘質シルト

第3図　第1区西壁断面図

第12層　灰青色粘質シルト。層厚10cm以上。

第A層　暗灰色砂礫混細砂粘質シルト。層厚10～15cm。古墳時代以降の溝状遺構。

第2区

第1層　盛土。層厚120～200cm。第1区と同様、アスファルト・パラス・区画整理で整地した盛土及び埋設工事等による撹乱。

第2層　淡茶灰色微砂。層厚10cm。少量の細砂粒が含まれる。埋設工事等で大部分が削平されている。

第3層　暗茶褐色砂混まじり粘質土。層厚10cm。第2層と同様、埋設工事等で削平されている。

第4層　茶褐色細砂混粘質土。層厚20～30cm。第2層と同様、埋設工事等で削平されている。

第5層　灰青色細砂混粘土。層厚10～15cm。古墳時代のベース面と思われる。

第6層　暗灰茶色シルト混細砂。層厚5～20cm。

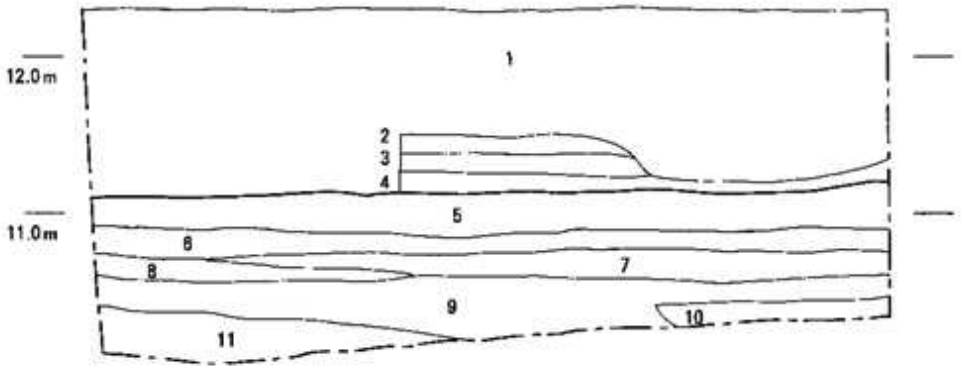
第7層　乳灰色シルト混粘土。層厚20～50cm。

第8層　淡灰茶色粘土。層厚10～15cm。

第9層　青灰色微砂。層厚20～40cm。

第10層　茶色細砂。層厚20cm前後。部分的堆積する。

第11層　黒灰色粘土。層厚30cm前後。北方へ落ち込んでいる。



1　盛土
2　淡茶灰色微砂
3　暗茶褐色砂混粘質土
4　茶褐色細砂混粘質土
5　灰青色細砂混粘土（ベース面）
6　暗灰茶色シルト混細砂
7　乳灰色シルト混粘土
8　淡灰茶色粘土
9　青灰色微砂
10　茶色細砂
11　黒灰色粘土

第4図　第2区西壁断面図

第3区

第1層　盛土。層厚150～180cm。アスファルト・バラス・区画整理で整地した盛土及び埋設工事等による撹乱。

第2層　明茶灰色粘土。層厚10～20cm。

第3層　暗灰色粘土と淡茶灰色細砂の互層土。層厚15cm前後。

第4層　暗灰青色粘土。層厚10cm。

第5層　茶灰色細砂。層厚20cm前後。

第6層　乳灰茶色粘質シルト。層厚20cm前後。

第7層　乳灰茶色粘土。層厚15～40cm。

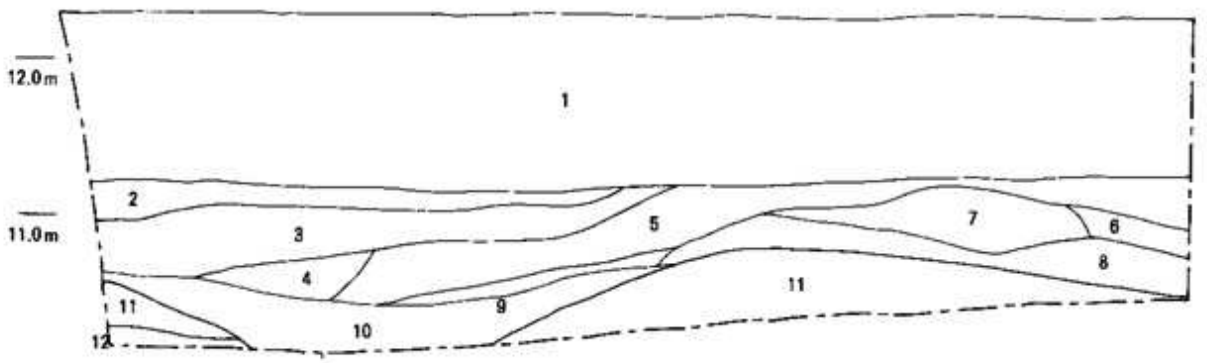
第8層　暗灰色砂礫混粘土。層厚10cm前後。植物遺体を含む。

第9層　黒灰色微砂。層厚10cm前後。

第10層　暗灰色粘土と淡茶灰色細砂。層厚30～35cm。薄いスライス状に何重にも重なる。落ち込み状遺構に堆積する層である。

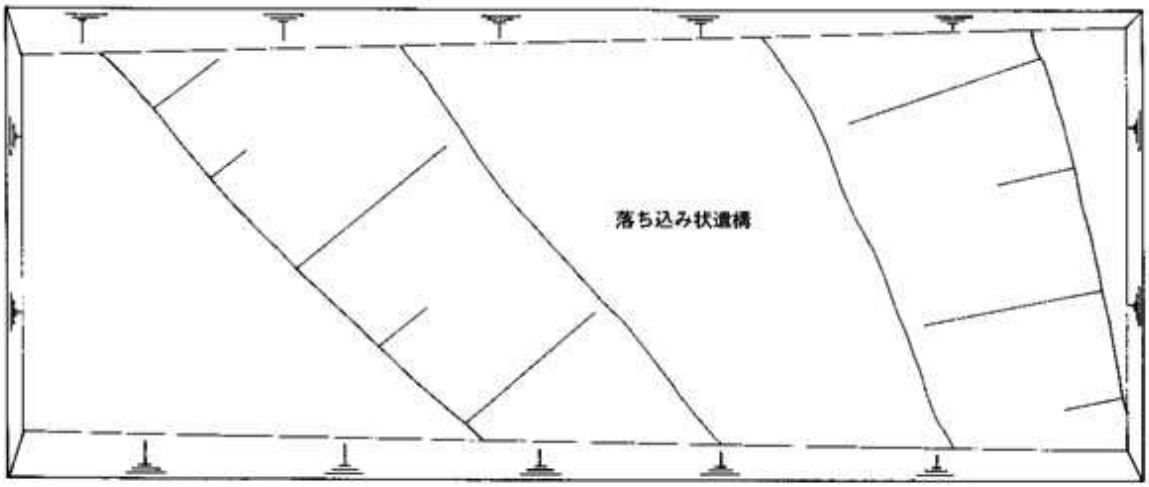
第11層　暗青色粘土。層厚30～50cm。炭化物が多量に含む層で、粘着性のある粘土である。

第12層　暗灰青色粘質土。層厚20cm以上。



1　盛土
2　明茶灰色粘土
3　暗灰色粘土と淡茶灰色細砂の互層
4　暗灰青色粘土
5　茶灰色細砂
6　乳灰茶色粘質シルト
7　乳灰茶色粘土
8　暗灰色砂礫混粘土
9　黒灰色微砂
10　暗灰色粘土と淡茶灰色細砂
11　暗青色粘土
12　暗灰青色粘質土

第5図　第3区西壁断面図



第6図　第3区平面図

3）検出遺構と出土遺物

第1区

調査の結果、現地表（標高12.3m）下約1.1mで古墳時代のベース面（第6層上面）を検出したが、遺構・遺物はなかった。現地表下約1.2mに存在する第7層上面から切り込む溝状遺構1条（ＳＤ－201）を検出した。溝状遺構は肉眼で見るかぎりではあまり不純物を含まないきれいな細砂が堆積している。現地表下約2.0mには水平に堆積する黒灰色粘土層がみられた。

第2区

調査の結果、第1区同様に現地表（標高12.3m）下約1.1mで古墳時代のベース面（第6層）を検出したが、遺構・遺物はなかった。現地表下約2.0mには黒灰色粘土層がみられたが、北方へ落ち込んでいるのがみられた。

第3区

調査の結果、現地表（標高12.3m）下約1.1mで落ち込み状遺構を検出した。落ち込み状遺構は粘土層で、その上面は細砂～微砂のきれいな層が堆積している。粘土層内には多くの有機物が含まれており、上部は炭化し黒づんでいる。西側の肩部では畦状に約30cmの盛り上がりがみられた。時期については土器など遺物が出土していないため不明であるが、周辺調査の状況から弥生時代後期以降のものと考えられる。

3．まとめ

今回の調査は、既往調査地が隣接する部分を対象にした調査を行った。調査区は小面積であり、遺構及び地層の全体像を把握するにはいたらなかったが、当調査区にも古墳時代ごろの遺構面が存在することがわかった。以下、各区ごとに記す。

第1区・第2区では、遺構は検出しなかったが第12次調査(YS88－12)で検出している古墳時代中期の方墳と同一レベルの遺構面を検出した。下層では第1区で溝状遺構を検出している。この溝状遺構は層位からみて弥生時代後期の前後のころに洪水等できた自然の溝と思われる。

第3区では落ち込み状遺構が検出された。第1次調査(YS83－1)の調査区西部で検出した河川跡と関連が考えられる。また、この落ち込み状遺構の西側の肩部が畦状に盛り上がっているのが断面で確認された。

参考文献

米田敏幸他　1981『八尾南遺跡』－大阪市高速電気軌道2号線建設工事に伴う発掘調査報告書－

米田敏幸　1983.3「第4章　八尾南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度』八尾市教育委員会

駒沢　敦　1984『3．八尾南遺跡第1次調査』『昭和58年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告5

米田敏幸　1985.3「4．八尾南遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11 昭和59年度国庫補助事業

西村公助　1988「12．八尾南遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告16

近江俊秀他　1989.3『8．八尾南遺跡（63-075）の調査』『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業

米田敏幸　1989.3『7．八尾南遺跡（63-084）の調査』『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業

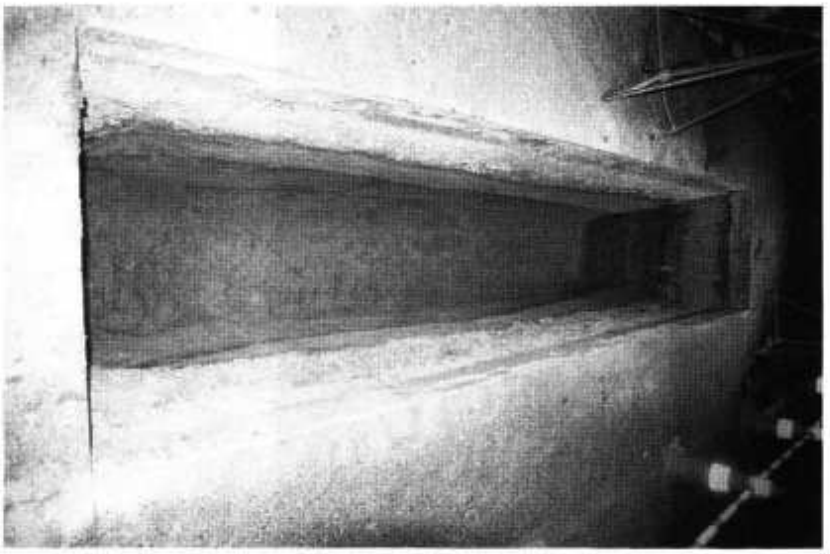
成海佳子　1989「2）八尾南遺跡（第11次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25

高萩千秋　1990「7．八尾南遺跡（YS89-16）」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告28

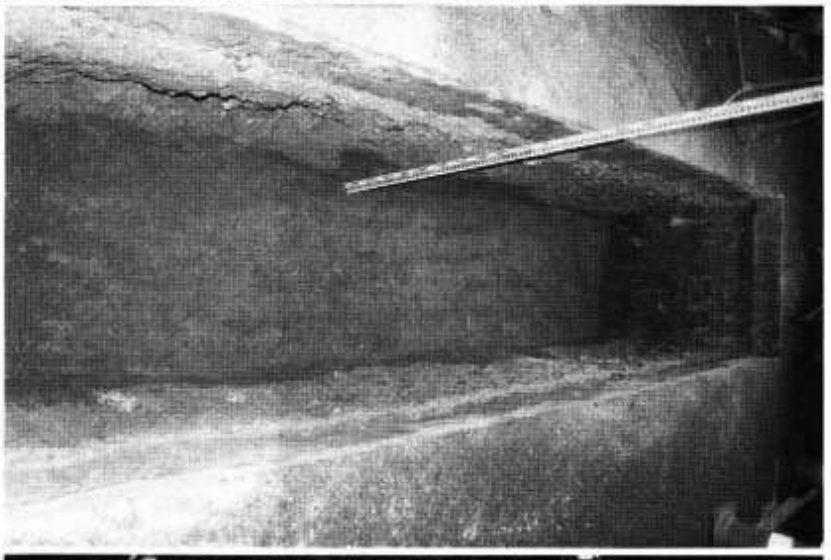
西村公助　1993「Ⅵ　八尾南遺跡第7次調査(YS86-7)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』（財）八尾市文化財調査研究会報告41

成海佳子　1994「Ⅱ　八尾南遺跡第10次調査(YS87-10)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告40

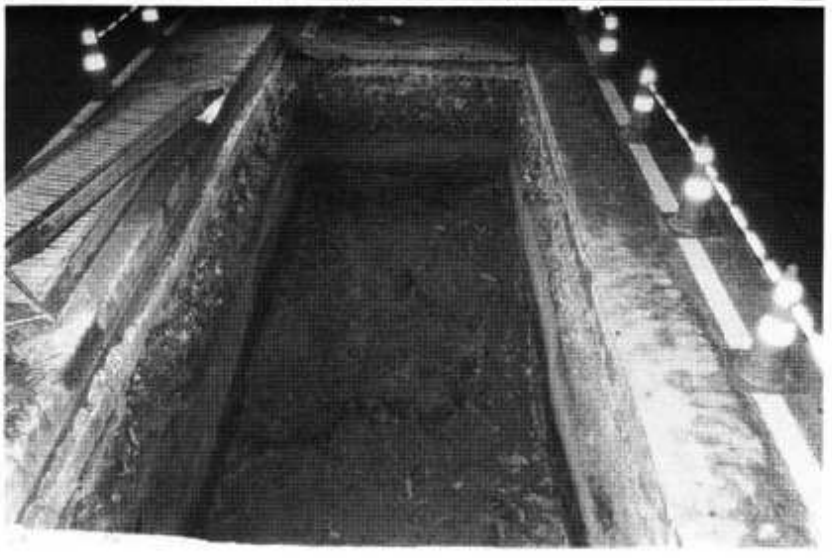
西村公助　1994『Ⅷ　八尾南遺跡第19次調査(YS93-19)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』



第1区全景
（南東から）

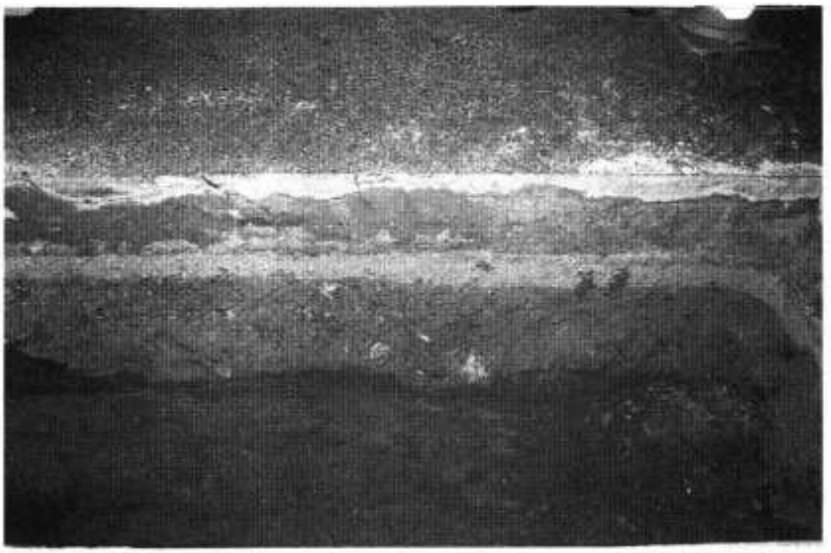


第2区全景
（南東から）

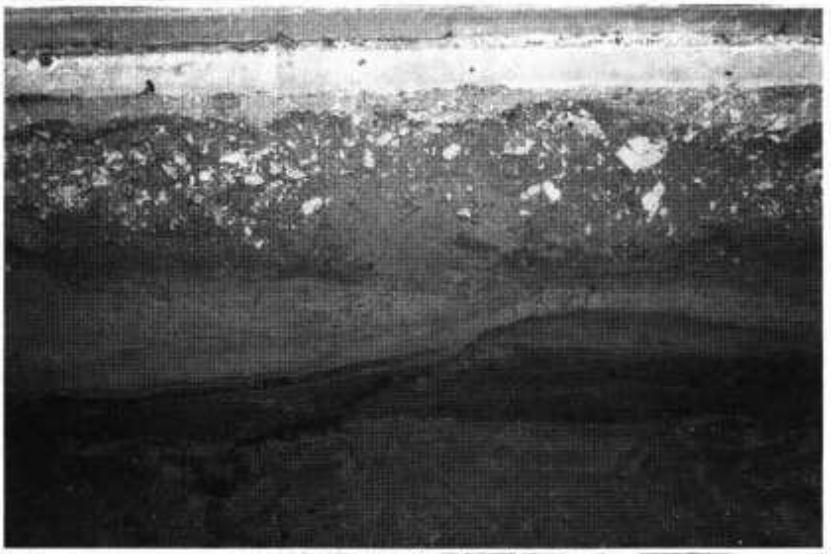


第3区全景
（南東から）

図版二



第2区西壁
（東から）



第3区西壁
（東から）

第3区調査風景
（東から）

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく
書名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告　54
副書名	Ⅰ小阪合遺跡　(第30次調査)　Ⅱ竹渕遺跡　(第4次調査)　Ⅲ竹渕遺跡　(第5次調査) Ⅳ東郷遺跡　(第49次調査)　Ⅴ東郷遺跡　(第51次調査)　Ⅵ中田遺跡　(第31次調査) Ⅶ八尾南遺跡　(第22次調査)　Ⅷ八尾南遺跡　(第24次調査)
巻次	
シリーズ名	(財)八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	54
編集者名	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ　原田昌則　Ⅱ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ　高萩千秋
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581　八尾市本町4丁目58の2　TEL. 0729-94-4700
発行年月日	西暦1996年9月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
こざかあい Ⅰ小阪合遺跡 (第30次調査)	おおさかふやおしみなみこざかあい 大阪府八尾市南小阪合町1丁目21番地	27212		34度37分18秒	135度36分58秒	19960108～0122	104	共同住宅建設に伴う事前調査
たけぶち Ⅱ竹渕遺跡 (第4次調査)	おおさかふやおしたけぶち 大阪府八尾市竹渕1丁目223-1、224-1、225-1、226-1	27212		34度36分54秒	135度34分18秒	19950619～0630	64	共同住宅建設に伴う事前調査
たけぶち Ⅲ竹渕遺跡 (第5次調査)	おおさかふやおしたけぶち 大阪府八尾市竹渕4丁目331	27212		34度36分54秒	135度34分13秒	19950925～1004	135	共同住宅建設に伴う事前調査
とうごう Ⅳ東郷遺跡 (第49次調査)	おおさかふやおしひかりちょう 大阪府八尾市光町2丁目120番、22番	27212		34度37分29秒	135度36分30秒	19950614～0623	140	共同住宅建設に伴う事前調査
とうごう Ⅴ東郷遺跡 (第51次調査)	おおさかふやおしひがしほんまち 大阪府八尾市東本町4丁目96番地-1	27212		34度37分34秒	135度36分28秒	19960319～0328	175	事務所新築工事に伴う事前調査
なかた Ⅵ中田遺跡 (第31次調査)	おおさかふやおしおさかべ 大阪府八尾市刑部1丁目183.184	27212		34度36分38秒	135度37分17秒	19951106～1115	120	共同住宅建設に伴う事前調査
やおみなみ Ⅶ八尾南遺跡 (第22次調査)	おおさかふやおしにしきのもと 大阪府八尾市西木の本1丁目1番	27212		34度36分02秒	135度35分14秒	19950403～0418	340	共同住宅建設に伴う事前調査
やおみなみ Ⅷ八尾南遺跡 (第24次調査)	おおさかふやおしわかばやしちょう 大阪府八尾市若林町2丁目地内	27212		34度35分27秒	135度35分06秒	19950927～0929	34	電気鉄道施設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小阪合遺跡　第30次	集落遺構	古墳時代後期	溝	須恵器	
竹渕遺跡　第4次	集落遺構	古墳時代前期	溝	布留式土器	
竹渕遺跡　第5次	集落遺構	古墳時代中期	土坑・小穴	須恵器	
東郷遺跡　第49次	集落遺構	弥生時代中期	土坑	弥生土器	
東郷遺跡　第51次	集落遺構	古墳時代前期	溝・土坑	土師器	
中田遺跡　第31次	集落遺構	古墳時代後期	溝・土坑	土師器	
八尾南遺跡　第22次	集落遺構	弥生時代後期		弥生土器	
八尾南遺跡　第24次	集落遺構	古墳時代以降	溝		

財団法人　八尾市文化財調査研究会報告54

I　小阪合遺跡（第30次調査）
II　竹渕遺跡（第4次調査）
III　竹渕遺跡（第5次調査）
IV　東郷遺跡（第49次調査）
V　東郷遺跡（第51次調査）
VI　中田遺跡（第31次調査）
VII　八尾南遺跡（第22次調査）
VIII　八尾南遺跡（第24次調査）

発　行　1996年9月

編　集　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581　大阪府八尾市幸町4丁目58の2
TEL 0729－94－4700

印　刷　明新印刷株式会社

表　紙　レザック66　〈260kg〉
本　文　ニューAG　〈70kg〉
図　版　ニューAG　〈70kg〉